明治三十二年七月二十二日發兌

女鑑

第百八拾五號

東京國光社

女鑑第百八拾五號

目録

瀬川至剛の妻



女鑑　第百八拾五號

依頼心

世に依頼心ばかり、智識、能すべての發達をさまたぐるものはあらじ。又、己ならぬものをたのむばかり、世にはかなきものはあらじ。むかし、よみし小學讀本に、ある麥畠に、雲雀巢をくひて、あまたのひなをそだてたり。麥やう／＼秀でゝ、はや刈るべき時になりぬ。親鳥は食を求めに出でたる後に、麥をつくりし翁來りて、明日は、此の麥をからするやう人をたのめりと云ふ。ひばりの兒、之を聞き、れそれて、親鳥の歸るをまちて、翁の言をつげしかど、親鳥は、敢てさわがず、明日もまた子を殘して出でぬ。その日、刈る人は來ず。二日三日ありて、翁また來り、麥をながめて、たのみつる人の用事ありて、昨日も、今日も來らず、明日こそは、必、刈らせんとて歸れり。雲雀の兒また、之を聞きて、親鳥に語りぬ。親鳥、又、耳にも

とめず、食を求めんとて出でぬ。やがて、其の日もくれたれど、必と云ひにし人も來ず。其の翌日にも來ず。またの日も、又々の日にも來ず。五六日を空しく過しゝが、例の翁來りて、つくづくと、麥の實入りたるさまを見て、あはれ、頼みし人は、中々に來らず。明日は、我、自、來て刈りとるべしといへり。兒ひばり、之を聞きて、又、親鳥に告げぬ。親鳥おどろきて、さらば何處にか、住家をかへずはあるべからず。昨日までは、彼、たゞ人を頼みき。故に、速かに來らぬを知りつ。明日は、自、刈らんと云ふ。又ゆうよすべきにあらずとて、にはかに兒をひきつれて、巣をうつしゝに、其の翌日は、まことに、其の人來りて、麥を刈り採りきとぞ。これ、人をたのむはおぼつかなきものとの例にひかれたる物語にて、俗言にも、あて事と何とかは、向よりはづるゝと云へり。依頼心、誠におぼつかなきものなり。何事も、自なすにしかず。果敢なき物の、しばし案じ煩ふを、之は彼の人知りたり。彼にきかん。彼、よく知れば、彼にたのみてんなど思ふ。さやうの心つく折は、案ずれば、案じ出でらるゝ事も、はや依頼心にさまたげられて、みづから、案ずる氣を失

ひ、つくればつくり得べきものも、又依頼心にうばはれて、なす力失せぬ。これ智能の發達をさまたぐるなり。而して、人は、くるしみをいとひ、ともすれば、依頼の念をひき起す。殊に婦人は、此の心、尤、多し。嫁するを、はやく人によるものとす。婦人は人によりて生活す。婦人は、人に嫁して、生計をいとなむものなり。學問、術、智能、何かは要せん。たゞ、少し文字を覺え、裁縫、それのみにて足れりとす。あはれ、あやまれるかな。嫁して、夫をたのむはよし。されど、たゞくたのみて、生計、全く夫にうちまかせ、世の中は知らでも、事すみ、能はたゞ髪を撫で、衣裝をこらすにて足れりとす。これ、大なる思ひ違ひと云ふべし。嫁して、夫をたのみ、たのみて助けずはあるべからず。尤、女は、三從とて、若うして、親に從ひ、嫁して、夫に從ひ、老いて、子に從ふ。從ふを道とす。されど從ふに道あり。從ふは、たゞ依頼せよとの意にあらず。從ひ助けよとの心なり。然るをあやまれる人の之をとり違へて、婦人は、智も能も、用せず。たゞ、若くして、親にはぐくまれ、嫁して、夫に衣せられ、老いて、子に養はる。學も、智も、さのみは用なきものとす。

故よ、女子の高等學科を收むるもの、その學問は二にして、大方は、容顔をつくり、衣裝をこらすに心を用ゐ、學べども學ばざる如く、みがけども光りそはず。これぞの、ふるくより、人をたのむ心、世々性となればなるべし。あらためずはあるべからず。勇奮せずはあるべからず。神功皇后は、夫帝におくれさせ給ひて、三韓を征し給ひ、雄略天皇の皇后は、天皇に從はれて、そのあらき御心をしづめ給ひ、上毛野形名の妻は、夫をはげまして醜のゑみしをうち退けぬ。夫に從ひ、夫を助く、これ妻のつとめにて、男に衣せられ、男に食べさせらる。之れ賤しき妾の心なり。あはれ、雜居も、いよ／＼近づきし今日、婦人、いたづらに男子にのみ依頼しそ。さればとて、なまなかなるげいもて、男子をしのげとにはあらず。たゞ／＼男子を助けて、共に、國家を保つべき智能をみがゝれよといふにこそ。



忠本論略（續）

霈軒

さて、又こゝに、中心といふことに就きて、甚だ緊要なることがあるゆえ、それを述べませう、前に、心の字を、「ナカ」と訓することがあると申しましたが、それは、畏くも、皇大神宮の御宮に、心御柱、又、忌柱、又、天御柱とも申し上ぐる所の、極めて、大切なる、御柱がありまして、この御柱が、御宮の中心となりてゐります。其の御柱の行事と申すものは、如何にも、鄭重愼嚴なるもので、先づ、正殿を造り奉るに、吉日を撰びて、まづ、山口祭ありて、次にその、心柱を造り奉るは、吉日を撰び、内人たち杣入して、木本祭を行ひ、其の忌柱を造り畢りて、杣より出し、御前追つゝ、運び來りて、正殿の地に置き、次に、吉日を撰び、地鎭祭あり。畢りて、後に新宮地の草刈始めて、宮地を穿り始、畢りて、大物忌といふ内人、まづ忌柱を立始め、然後に、諸後夫らに、其の四面の柱を立しむとの事で、これは、延暦の内宮儀式に、載せてゐるさうであります。此の程も、或人

に、右、御柱の事を、聞きましたが、いともいとも、尊き大切なものであるさうであります。抑、この御柱の由緒といふは、伊弉諾伊弉冉の二神が、磤馭盧島に於て、天神より賜りたる天瓊矛を植て、以て天柱となし、八尋殿を營みたまひし古事に出るとの説であります。又、顯宗天皇の、稚くおはしましゝとき、御名を隱して、播磨國明石郡なる、縮見屯倉首が家に、居たまひし時、その新室壽の御言に、「築立稚室葛根、築立柱楹者、此家長御心之鎭也。取擧棟梁者、此家長御心之林也。取置椽橑者 此長御心之齋也、取置蘆萑者、此家長御心之平也。取結葛繩者、此家長御壽之堅也。取葺草葉者、此家長御富之餘也」云々とありて、第一に、柱楹を以て、家長の心の鎭と、宣ひしは、正に、中心のことに、當つて居るかと思はれます。今日でも、太極柱といふものが、家の中心として、最も大切なるものとしてありますが、即ち、前の壽言の心の鎭といふところでありませう。或説には、太極柱の太極は、易の太極の意であらうといふことがあります、俗には、大黒柱と書くそうであります。又、中といふことに就ては、大嘗祭の祝詞に、「與天地月日共照志明志御座事仁本末不傾茂槍乃中執持弖奉仕弖壽詞遠稱辭定奉久止申」といふことがあります。この、本末不傾といふこと、中執持立といふことは、大に、意味のあることで、即、忠の義を、發せられてあるかと思はれます。或先生は、これは尙書

の、性精惟一、允執其中の話と符合してあると、いはれたさうであります。凡そ物は、中心根脚が確立せねば、決して、定靜安止することは、出來ません、それで敎育も、中心の柱が立ねばならぬ。道德も、中心の柱が立ねばならぬ。其の心の柱、太極柱は、即ち忠であります。

○

天地の神や堅めし萬世に立て動かぬ國の御柱　　平春海

なほ、中心、一貫の理を、發揮せんが爲に、畏れ多くも、三種の神器、即、劍、鏡、玉の三つのものにつきて、愚案を述べませう。先づ、刀劍については、其の本の柄に入るところを「なかご」と稱へ、忠の字が當てゝあるが、即ち中心であります。さて、刀劍の用は、身刄、にありて、物を斬ることであるが、刄を握て、力は揮れぬ、中心たる柄を把らねばならぬ。しかし、其の「なかご」は、柄に箝めたばかりではなく、目貫の孔がありて、これに目釘を、しかと打ち、始めて、刀劍の實がある。目釘の一貫には、中の象があります。又、鏡を用ゐるには、必、中心を得ねばなりませぬ。鏡と面との角度が、傾斜するときは、決して物は見えぬ即、鏡と物と、一貫して正對せねばなりませぬ。又、玉である。この玉といふは、穴の通たる、多くの玉を、緒で通したものであるが、これ

も、緒が中心となりて、一貫して居らねばなりませぬ。もし、この緒が切れたら、玉は散亂する。國語に、命を、玉の緒といふは、このことであります。この意象に於ても、物には、中心一貫がなくてはならぬ。忠は、實に大切のものであるといふことは、能く解ることかと思ひます。

忠本論も、右にて、大概述べましたが、なほ、一つの大事があります。これは、拙者如き、智德の淺小なる、修業中の者が、漫りに申すも如何でありますが、しかし、この一大義は、國典を誠實に研究すると、自ら知られます。即、宇宙の元神は、天御中主神でありますが、この神こそ、實に、宇宙の大中心で、一切の事物は、皆、この神の一貫を離るゝことは出來ませぬ。漢土の經書にて、深邃の理を說き、佛學や哲學にて、玄妙精緻なる論を爲せども、畢竟、この大中心、大一貫の外に、出づることはなりませぬ。即、我が國の歴史上の傳說は、世界衆理の中心であります。故に忠本論は、實は一事一件に限らず、これを發揮するときは、宇宙の事物は、凡べて解釋せられます。中庸に「誠者物之始終、不誠無物、」又、唯天下至誠、爲能盡其性、能盡其性、則、能盡人之性、能盡人之性、則能盡物之性、能盡物之性、則、可以贊天地之化育、可以贊天地之化育、則可以與天地參矣」といふ如きものである。而して、所謂誠は、即、忠であります。（完）

日本女子今後の覺悟（一）

三輪田眞佐子

四海同胞の實をつとむるこそ、恩愛の源となるべき女子の責任なれば、今や内地雜居に際し、外人來らば、則ち相當の禮を盡し、仁を施し、大和女子の德風を宇内に吹かしむべし。快事何かこれに若かん。故に内地雜居は、寧、歡ぶべくして、決して、憂ふべきにあらず。唯おのれの杞憂するところは雜居の事實にあらずして、雜居に伴ふ影響、如何にあれば、聊、我が國の女子が、今後懷くべき覺悟をものせん。

そも〳〵、獨立國の體面を完くするに、必要なるものは、その國固有の文物及び制度の特色ぞかし。然るに二千五百餘年卓爾として、東海の天に分立せし我が國ながら、一時に東西南北の外人を來住せしむるを以て、おのづから我が固有の文物及び制度に變動を及ばさゞるを得ざるべし。果して然らば、勢ひ國家の體面にも、多少の關係を及ぼすことなしと言ふべからず。

概、文物、及び制度の源となるべきものは、風俗、習慣、言語、及び思想にあり。然るに外人來らば、知らず、識らず、言語も混ずべし。習慣も染むべし。從ひて、思想も相感化すべし。而も女子はその天性感情的なるを以て、風俗の如き外觀に誘惑せられ易きのみならず。日時四隣の交際上より我が家庭の習慣を新にするものも、女子の手に存する

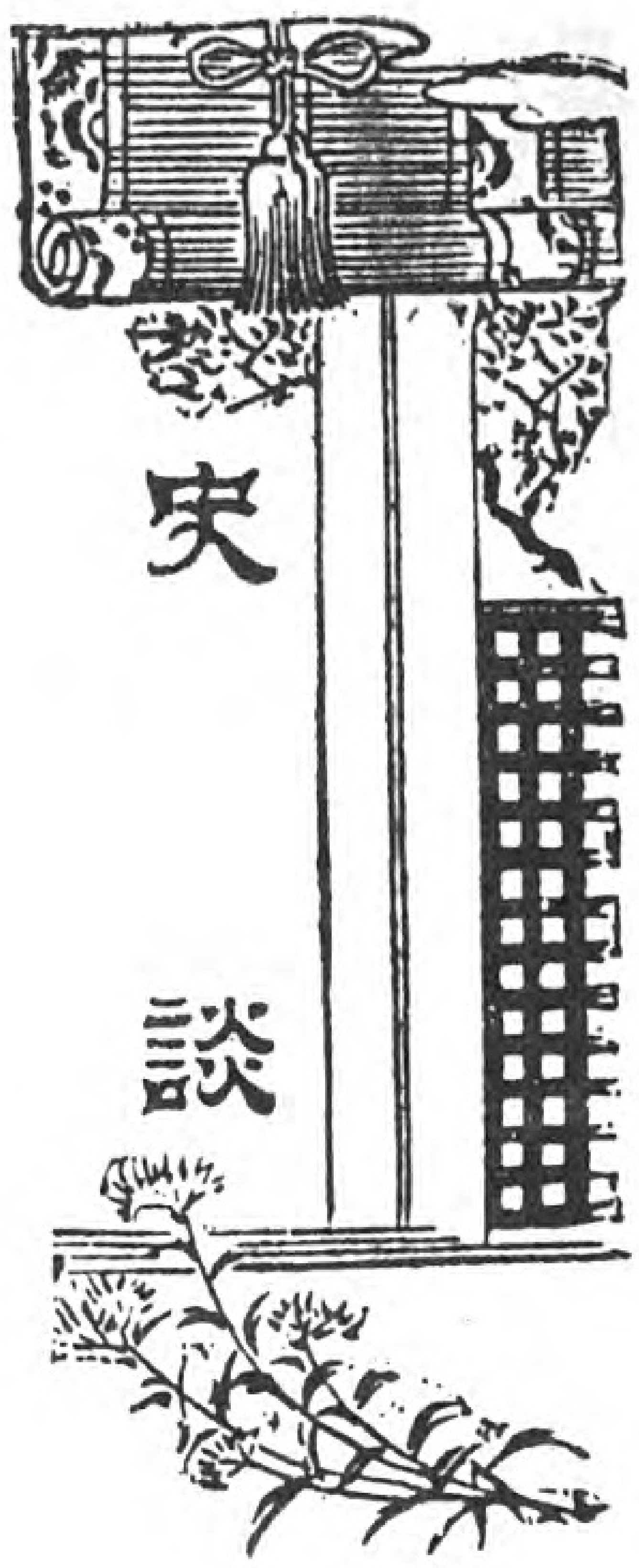
なり。その他なべて信向力に富むを以て、思想の流通も、女子より始まるべきなり。されば、内地雜居の曉に於て、わが文物、及び制度につき、その變動の媒介たるものは、女子の手、及び心なりと知るべし。あはれ、女子たるものは、その手を愼むべし。その心を戒むべし。

蓋、内地雜居に伴ふ結果は、強有害なるものに限らず。亦、その思想の上につき、並に事物の上につきて、有益の結果も多かるべし。こを以て、今後おのれの、女界に向ひて望むところは、その有益なるものは、悉、これを利用し、その有害なるものは、總て棄つる覺悟にこそあれ。

雜居に隨伴する有益なる結果は、これを知り、これを脩むるに容易なれど、説明せん必要なからんも、その有害なる點に至りては、一見、美と信ずべき裏面に、醜の潜むことあり。故にその取捨に、沈思熟慮を要すべし。今、その主なる數例を、左に示さん。

凡、内外の人は、互に、自國の面目を重んずるより、競ひて、壯觀を裝ふに至るべし。加之、彼の國人は、我よりも、富の程度、頗高きを以て、その風俗に對抗せんとならば、我らは、大に、奢侈を極めざるべからず。そは、愚の至ならん。おもふに、容飾の美は、一時、小人の目を眩惑するも、永く、君子の目に、麗光を放つこと能はざるべし。されど、

日本女子は、雑居の曉にも、我が富の程度を參酌し、唯、清潔と雅致とを主義とし、衣服を制し、奢侈の費を減して、以て、國力の實を養ふべし。我が師紅蘭女史の詩に、(買錦市珠靡重貲、高堂奉養自然疎、妹孥能減閨裝半、甘旨昏朝供有餘)と。實に、朝夕服膺すべきなり。



史談

瀨川至剛の妻

鹽井ふく子

君命、たゞ仰ぐ、これ忠なるか。夫命、これ從ふ、これ貞なるか。何ぞしからん。國に爭臣、三人あれど、其の君無道なりとも、國亡びず。家に爭子一人あれど、其の父無道なりとも、家亡びずと云へり。あしきは諫め、諫めて善にうつらしむるは忠なり。貞なり。孝なり。豐前中津の人に、瀨川至剛と云ふ武士ありけり。心げに剛直なれど、士、若くして、酒を好む癖あり。酒を好みて飲む。呑めど、直に酒にのまれて、人の性を失ひ、前後を知らず泥醉して、心あらく、氣さかだち、ともすれど、きばもつ虎狼もたゞならぬ暴行さへなさんとせり。したしき友、しば〳〵諫むれどもきかず。酒はます〳〵つのり、暴行、また絶えず。之によりて、親しむ友も、いつか親を失ひ、心知りたる友も、多くは、之をうとんじさくるに至る。あはれ、白樂天は、微醉にうさを散じ、東湖は一ぴやうの飲を、こよなき樂とせり。げに、無量のたのしみ、たゞ微醉にあり。微醉、よく人のうさを散じ、人の氣を活潑ならしむ。飲

むべし百藥の長、たゞ微醉にあるのみ。飮むべからず狂水、沈泥すれど、遂に家を亡ぼし、身を亡ぼす。といへる言、誠にしかり、至剛、また沈泥の淵に至らで、家を亡ぼし、身を亡ぼすべかりけんを、幸に、花の如き妻女、玉の如き心をたもち、まどかに、夫に諷し、夫を諫め、あるときは、心を和らげ、色を下して、夫の心を和げ、諫め、あるときは、端座色をたゞし、聖賢の事蹟をあげて、物語りて、其の暴行を、みづから耻ぢしむ。才識、よく時機をはかり。色を見て、夫をしていからしめず。よく〳〵、心をつくして、之を諫めたり。夫、遂に、非をさとり、遂にみづから泥醉をはぢ、暴行する事なきに至りぬ。此の妻女、名は、何と呼びけん、田井氏よりとつげるものにて、容貌もうつくしく、才識も、またそなはりて、善く家を治むるのみならず、博く、和漢の書に通じ、傍ら、陰陽の學にさへ渉り、最たちぬひの業に巧みにして、食物の調理、すべてくりやの事、下婢に専任する事なく、鷄なけど、己、まづ起きて、夫が出勤の用意をなし、時變あれば、巳、まづ身をとゝのへて、人をしてつゝしましむ。妻女が勤愼の心に、至剛、しらず〳〵化せられて、遂に勤儉の士となり、學をみがき、武をきたへて、家を保ち、身をたもち、名をもあぐるに至れり。實に妻女の功も大なりといふべし。

新井白石の母

有馬祐政

世に、白石の名聲と功業とを言ひ傳へ、持て囃す人々、今も、昔も、いと〳〵多かれど、其が北堂の性行を稱ふるをば、吾、いまだ、きかず。豈、口惜しからざらんや。

是は、いさゝかなれど、其の人と爲りを識るに足るべければとて、かきつゞれるなり。

さて、其の母たる人は、坂井氏とて、其が曾祖は武勳

かくれなく、かの信長記にも、驍名を殘せり。又、其が外祖父も、嘗て、高麗の城砦を攻め落しゝ剛の者なりき。されど、斯の母氏が親しく、「人の親の、わが子につゝむことあるべしやは、しらせ參らすべき事ならねばこそ、あらはし聞えはべらね。昔のやむごとなき人も、すぢなき者の腹にやどり給ふためしは、古も、今も多かるものを、母の父母の御事知り給はぬとも、なにかははづかしきことあるべき」と、白石に告げたる言の葉によりて考ふれば、其が兩親の代は、いともいともみえぐるしき境遇に在りしものなりけらし。但し、其の兄坂上となん云へるは、其の頃にめづらしき能筆家なりし樣なり。

母氏はじめ、丹羽長重の愛孃が、淺野長直に嫁ぎしをり、小上臈に召し出されて、かしづきゐたるが、ほどへての後は、奥州二本松に在りし長重の妹、長生院と呼べりし尼公のもとに使はれ居たりけり。やがて、三十路に近くなりにしころにもやあらん。新井家に、嫁げるなり。

當時白石の父は、既に、はや不惑の齢に、餘りしほどにてありき。鴛鴦、いと睦ましくして、その間に女子四人と男子一人とを產けぬ。而して、唯獨、一人の男子、即白石のみ壽長うして、他の四女は、皆、不幸短命なりき。されば兩親の愛は、全く白石、一身に萃まれり。鞠養訓育、遂に、以て、紫石稜稜たる大丈夫と成らしめたる者なるべし。

母氏、其の兄に似て、ものよくかきしがうへに、歌作む道にも暗からで、代代の歌集、物語の書類など、其の子女によみきかせ、更に圍碁象棋の才さへあり。これら、みな白石に敎へつたへたりき。又、琴絃の嗜もありし樣なれど、末には、其の爪など、堅く袋に藏め措きて、織り縫ふ事こそ婦女子のわざなれと云ひつゝ、年毎にみづから、うつくしき筋の布、あやある絹の帛などを織りなして、家人に、之を縫ひ着せ、節儉の法を守るにつとめき。而して、其がもの〻いひざま、こ

とのなしざま、常に、其の夫に似かよひて、それに應じて、少しも違ふことなき、いといぶかしきばかりなりき。俗諺に似たる者の夫婦にはなるなりと云へるわれど、母氏の貞順溫厚、能く相唱和するを得るに臻りしものにこそ。

夫仕を致へしてより後は、倶に共に、頭を剃り飾を落して、淺草の報恩寺境内に、小やかなる草庵をむすびて、いみじく佛陀他力の敎に歸敬し、稱名念佛、懈りなかりしが、偶々、其が夫のさる惡人輩に讒せられ、其の子、白石も仕の道妨げられ、殊に又、愛くしき乙女を先立てゝの後は、一志は、心地わづらわしく、物おもひになやみつゝ、延寶六年五月七日といふに緣ありてか、はげしく、そのことどもうち案じ出でたる爲にや、急症に犯されて、僅に一日をおきて、その九日、終にみまかりにき。春秋六拾有三。白石の漸二十二歳になりし夏のことなりき。

母氏が節の淸く、行の高く、志かる上に意ばせ誠にして、情の濃やかに暖かなる、吾、實に白石が、斯の母氏に稟けし所多き、決して、其が父に劣らざりしとを信じて疑はず。



茶の湯

茶禮初學（承前）

孤峰庵篠仙齊不美

關　葦雄

次に、待合掃除終りたらば、續て數寄屋、或は小座敷の除掃をなすべし、總て、是は餘程多端なるものにて茶道心掛深き婦人、謂所數奇者とか、熱

心家と云ふ、側の御方に、無レ之ては可レ得レ成事にあらざれば、客方も、容易には不ニ申籠ものなり。單に申籠、若不承諾の時は興無もの也。果して、實際被レ行可レ得信用の上の事と知らるべし。亭主の務方も、婦人、令孃等にては、頗る困難なるものならん。依て、懷石等も、一汁三菜と不レ極、一汁二菜、或は吸物を略し、或は、八寸不レ出等の内を作略あるべし。道具類も、出合居候物の中にて、組合可レ申。其邊に心配、手數をかけ、時間を移しては不宜、神速を尊ぶ。餘り客方は不ニ倦怠樣にするが上手なり。本文のざつとしたるがよきと云ふは、此の意なり。不完全も、又一興ならん。全体不時の茶杯と云ものは、修業終塾の御婦人にあらざれば難レ爲もの也。尙實地に付て可レ知。特に難レ解場合儀々は、師傳を可レ受。底て、猶總体の準備調たらば、近邊にても、我家屋の中にても、案內者をして待合へ御出あるべき旨を申遣すべし。次に客方は案內を受たらば、相客一同、速に待合に至り、亭主の出迎を竢つ事、外種類の茶會に差違ある事なければ、爰に省略す。正午の手續の條所を見合せて、一會を終るべし。

一 獨客茶禮の事

獨客の節は、主、料理茶、共に相伴するなり。是必する事也。其の外、主は、客の寂寞からす樣、客は、主の半間にならぬ樣、心得べき也。主客、共に、茶禮の意味會得功者ならでは、出來がたき事也。

註釋不羨曰、此の會の性質たる、最茶道習練、終りたる人ならでは不レ得レ勤傾きあるもの也。一人一數客ならば、又紛らすと云事もあれども、己の賓客を招聘して、滿足を得せしむると云事は茶の湯、各種中の一難題ならん。寔に、茶道の意味萬般の事柄を、飽迄鵜呑にしたる人にあらざれば、務め得ると云ふ識見我量もなかるべし。併、稽

古の上は特別なれども普通の茶會にて、十分の度數を重ね、順序は勿論、所レ謂効を經たりと云ふ、側の人ならでは、僧侶ならば、和尚、寺持、株醫者ならば院長株藝者ならば、寧賛株、娼妓ならば、御燭株と云人、品潔白の資格ある良婦人のなし得べきものなり。底で懐石の時に至り、先客の膳部を持出、客は進め、次に自分の膳部を持出し、末座に着き、私も御相伴と云ふて、飲喰を共にすべし。夫よりは通の者を以て、給仕の勞を可レ令レ取。(但、是は茶道修塾の者ならでは務まらざるものなり。亭主になり換り、給仕計りに無レ之、縦へ令は持出す品物にても、客に問はれたらば、夫は何品であると云ふ位の事は言述得らるゝ人を選むべし。最、少年の女子を好む)次に客主、懐石終りたらば亭主、先、我膳を持入、再出で、客の膳を撤去すべし。

(未完)

女禮

有住常子

盃臺出し樣

先、飯終りたらば、樣子見斗らひ、中酒の盃臺を兩手に持出で、左あしより、しづかに本膳の手前にすわり、上座の方に置き、正めんざの時は、右の方に置くべし。引替にする手つゞき、すべて、是に同じ。あらたにもち出る膳を、かりにも下座におき、取り下ぐべし物を上座に置かぬものなり。扨、燒物をとり、下座の方に、かたよせ置き、そのあとに盃臺をすゑ、やき物膳へ向ひ、すこし前へ引出もちて、右左と二ひざ引、一そくにそろへ、右のあしより、みあしひき、しづかに、勝手にいるなり。

又、是はなき物を、本膳の向にすゑたる時のことなり。臺引あるときは、先、だい引を下げ、次に、燒物を下げ、あとに盃臺を持出で、本膳の向にすうべし。酒、

一こんすみたれど、此の盃だいを下ぐべし。

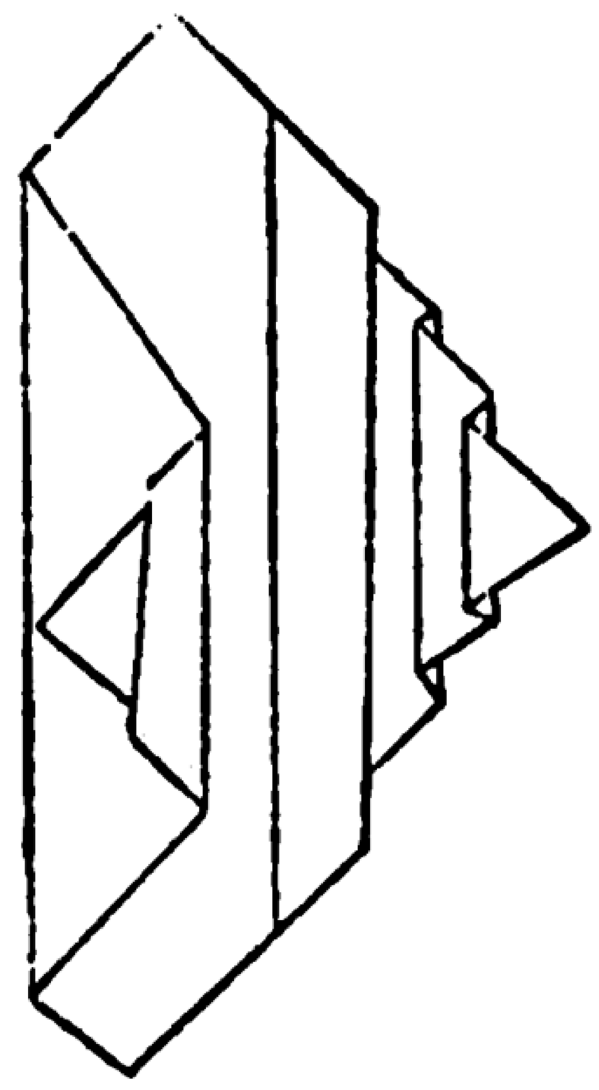
折形

有住くわう子

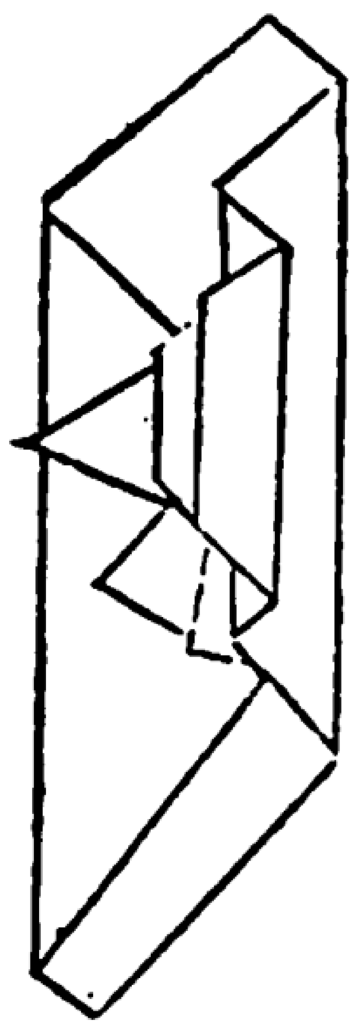
水入包

是は、け粧の水を入れ、しんもつなどにつかふときの包方なり。

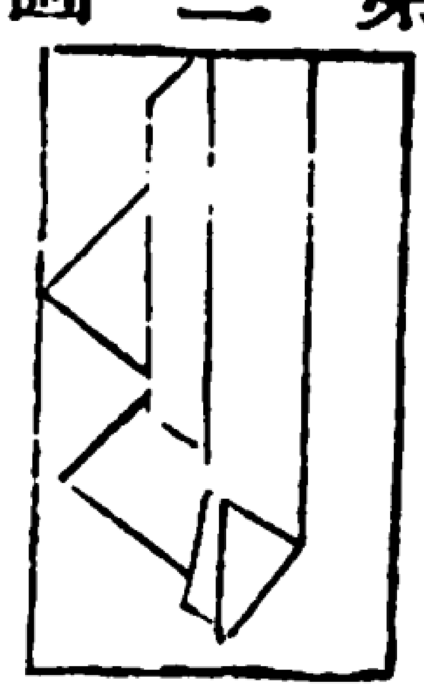
第一圖



第二圖



第三圖



新撰 結物百種

百草庵一無

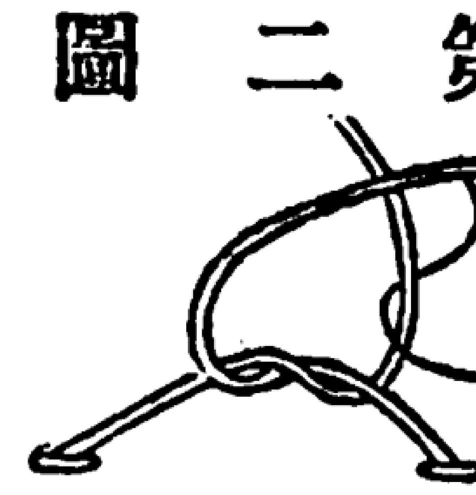
文箱の緒

文箱の結方、三通りある中、結方の記に、如此結ぶとある也。又、翁結ともありて、其の結び中へ、両端を折りかへして締むるなり。又、一本緒の結方は、後に示すべし。

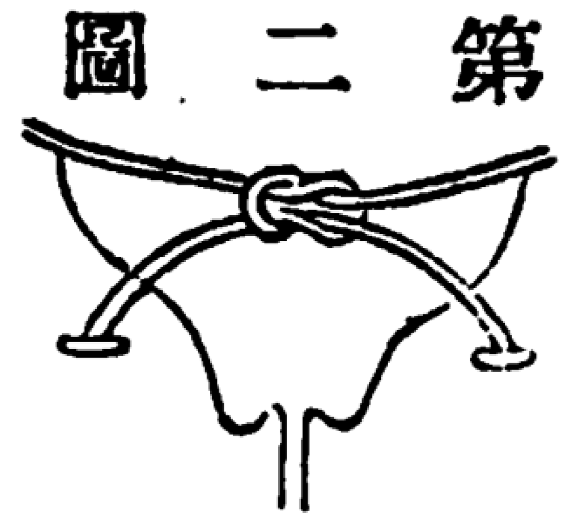
第一圖



第二圖

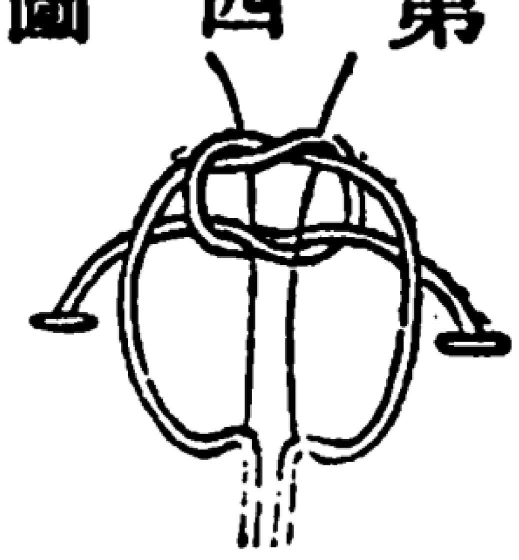


第二圖

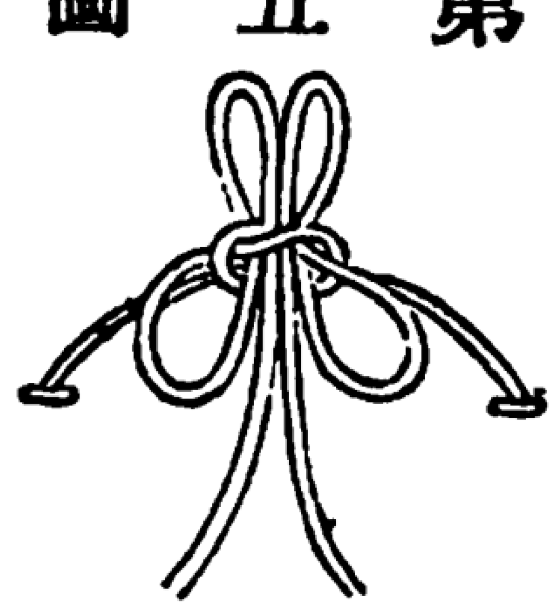


挾箱の緒

第四圖



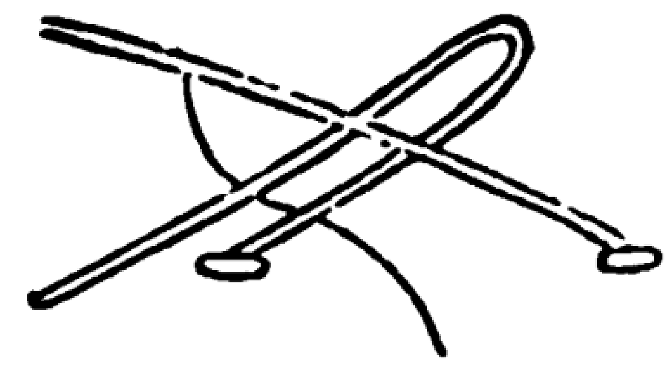
第五圖



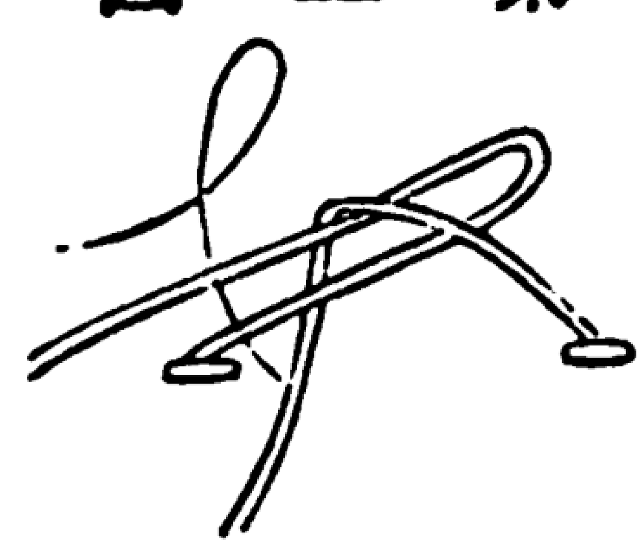
狹箱の緒の結方、幾通りもありとみえ

たり。この外に兩端にて、上巻に結ぶものあれども、後に示すべし。

第一圖



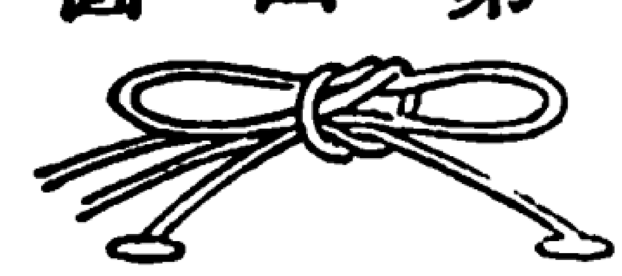
第二圖



第三圖



第四圖



たちぬひ

西山たい子

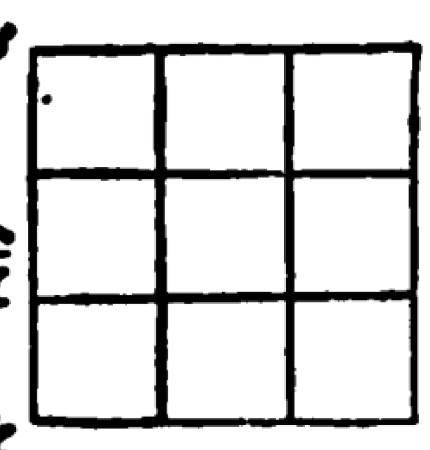
（百十四）疊紙

疊紙は、たゞ針さしのみをつゝみたるも、たゝう紙にて、細き、粗き、さまざまあれど、これは、もと學校に通ひ、或は他處へ出る時など、用意に持つものなれど、糸、はり、切れ等をも入れまほしく、且は、細工物なれば、細かく、きように、おもしろく、つくらまほしきものなり。その細かく、うつくしくつくるには、切入れ、糸づゝみの折方を、まづ二つ三つ折りおくべし。形もさまざまあり。大小もいろいろ、随意たるべし。

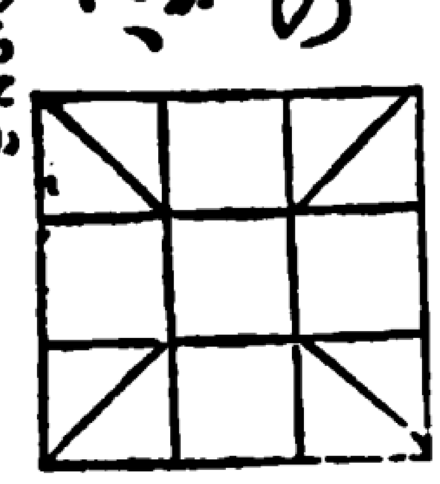
されば、此處には、學校通ひにたよりよからんため、半紙形の書物と同じ大さにつくらんとす。

（1）桔梗疊

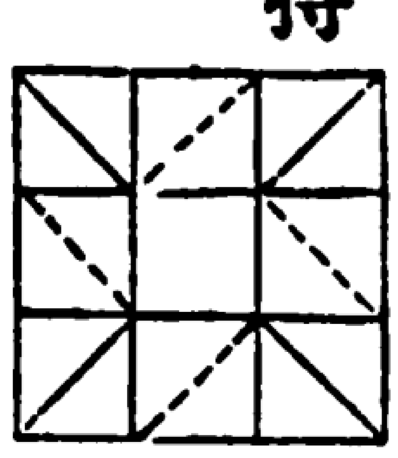
先づ六寸五分四方の厚紙に、千代紙にても、色紙にても、随意なるを裏表にはり、また、あまりあつしと思はゞ、千代紙のうらうちしたるものにても、しかるべきを、横縦とも、表だかに、三つに折れば、やがて、



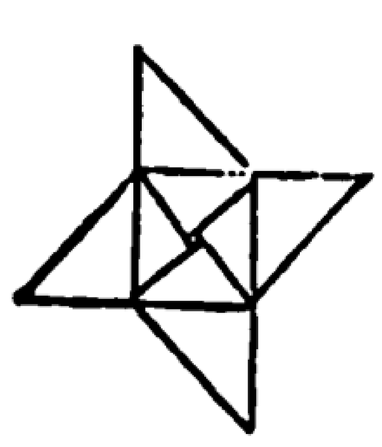
上圖の如きすぢつくべし。その條のつぎたるものを、又、表高に、

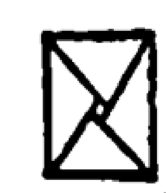


の如き裏高のすぢ、圖の如く折り、四方を持ちて、すぼむるときは、

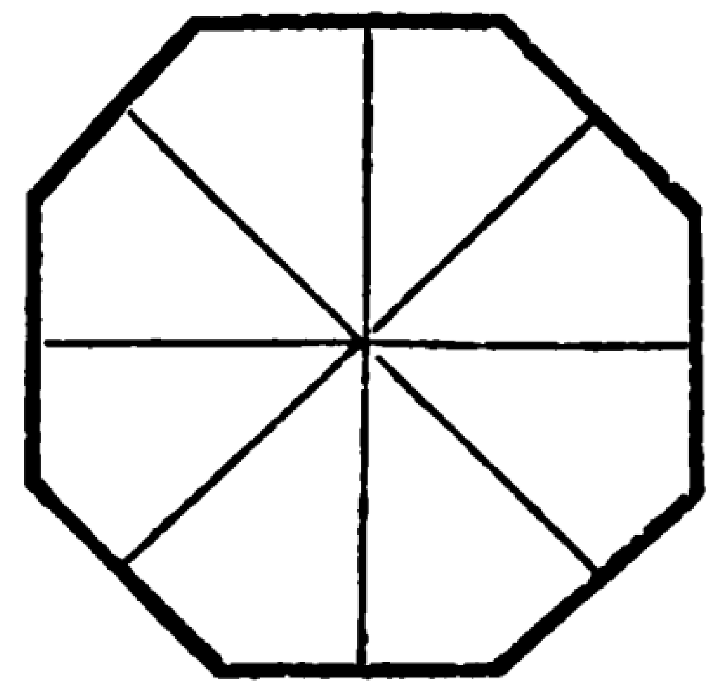


れのづからつきて、圖の如く疊まるべし。それより、四方とにがり出でたるものを、順に疊みて、最終なり

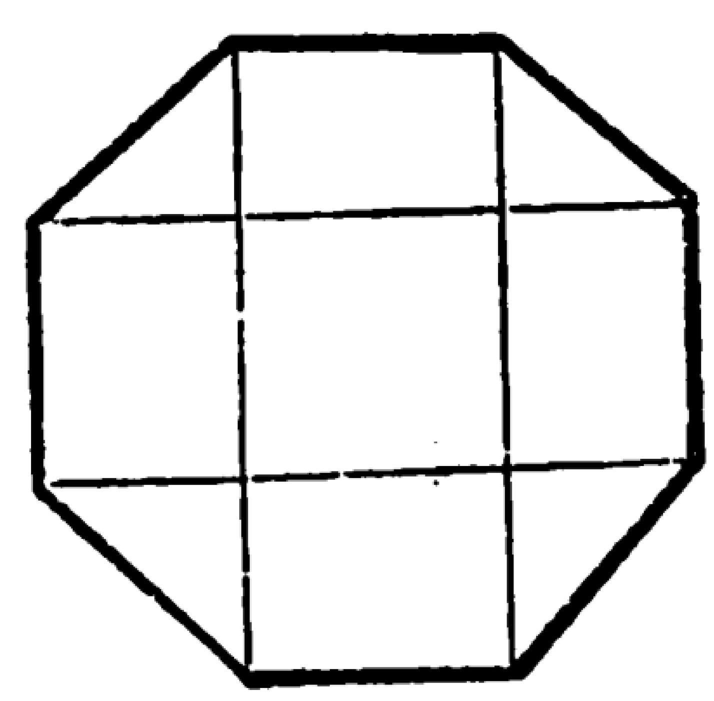


る角を、最初に折りたるもの、間にはさめて、圖の如く疊まるべし。之を桔梗折と云ふ。開かんとせば、そのはさみたる所をぬくなり。疊まんとせば、前の如く、折り目を折るべし。開閉、誠に自在にておもしろきものなり。

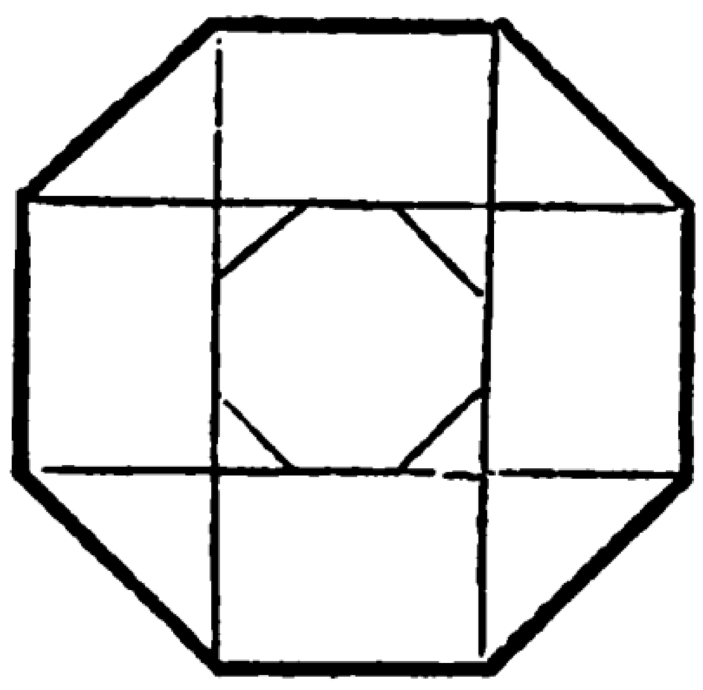
（2）蓮花疊み



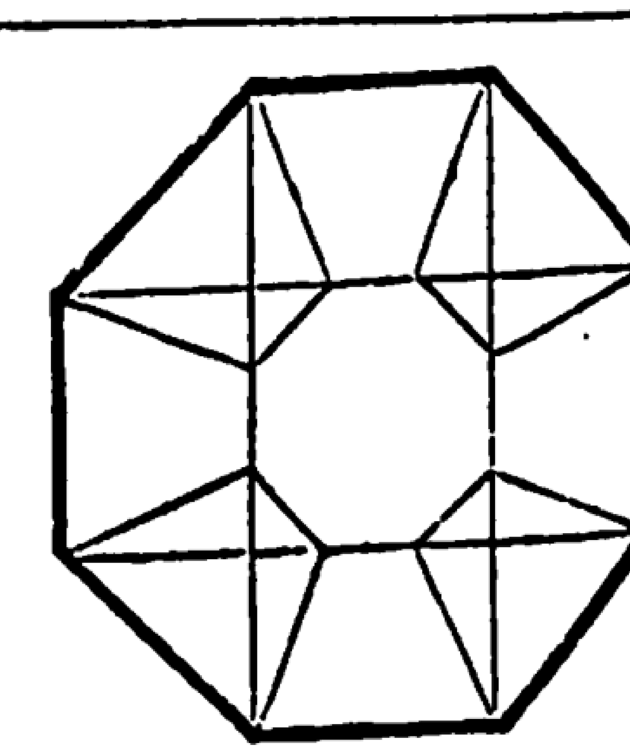
圖の如く經五寸づつに、八角に厚紙を切り、前の如く、千代紙をはり、それを、



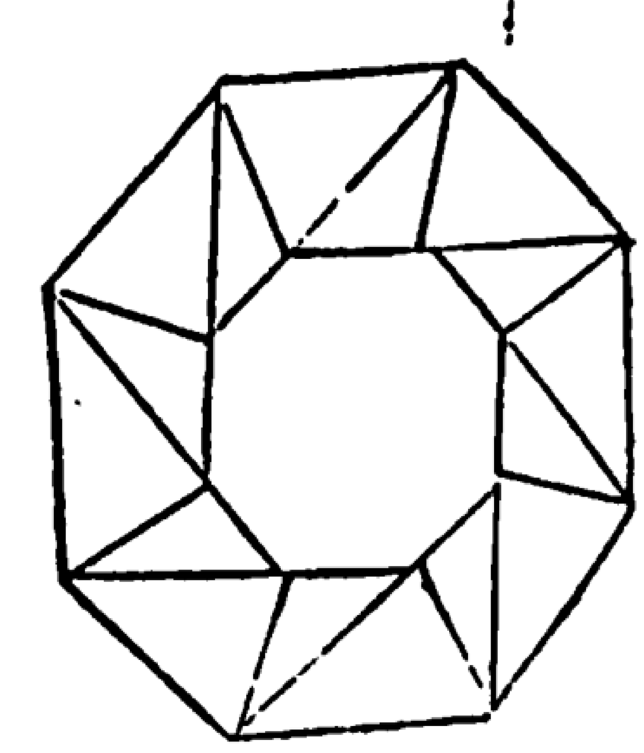
圖の如く縱横とも、表高にすぢをつけ、それを又、



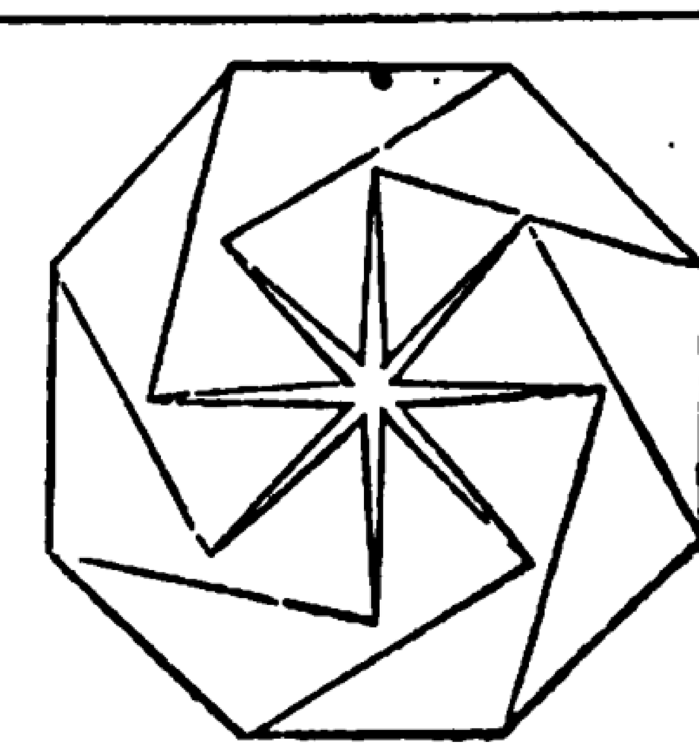
圖の如く中をも、八角に折り目をつけ、中の八角の角より、外の八角の角まで、



圖の如く、斜に表高に折りて、疊めて、



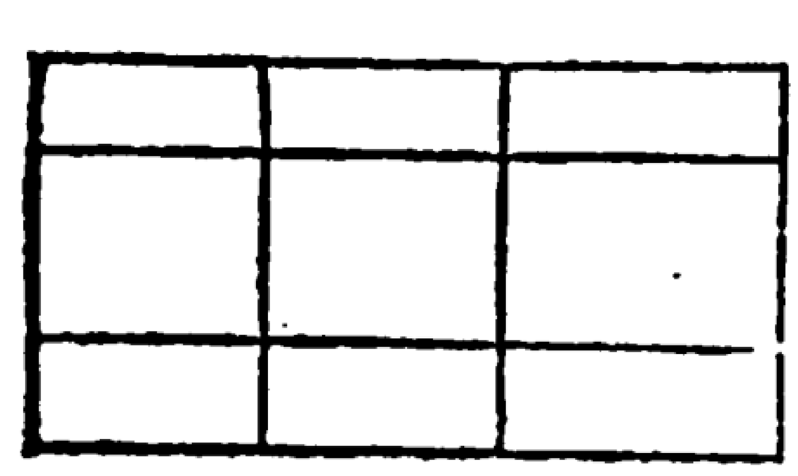
圖の如く裏高の條つきて、



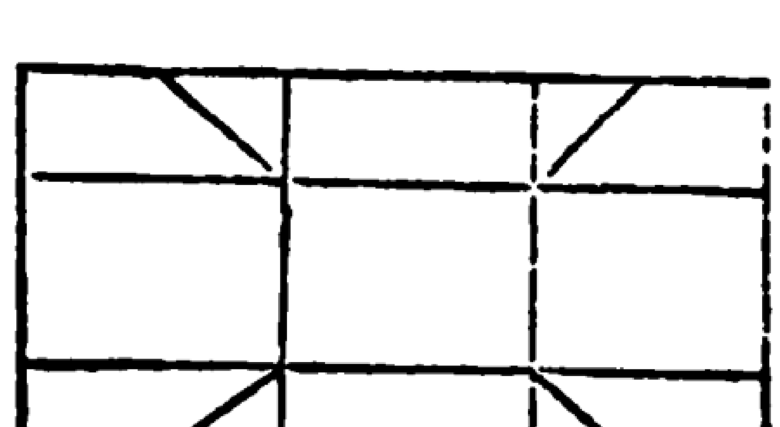
圖の如く疊まる、之を、れんぐゑ疊と云ふ。

（3）箱疊

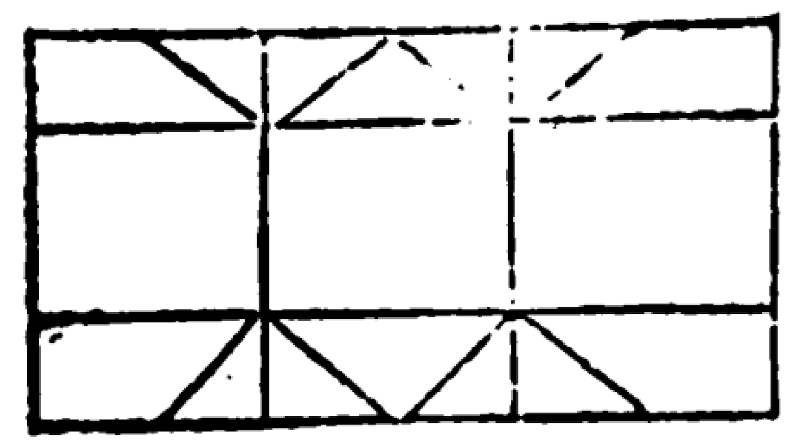
之は、縱七寸五分ばかり、横五寸ばかりの厚紙を、最初に、横縱を、



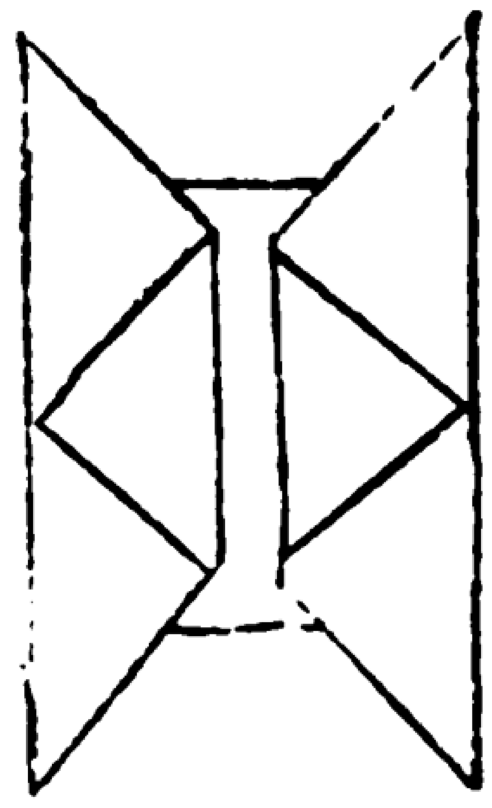
圖の如く折り、次に



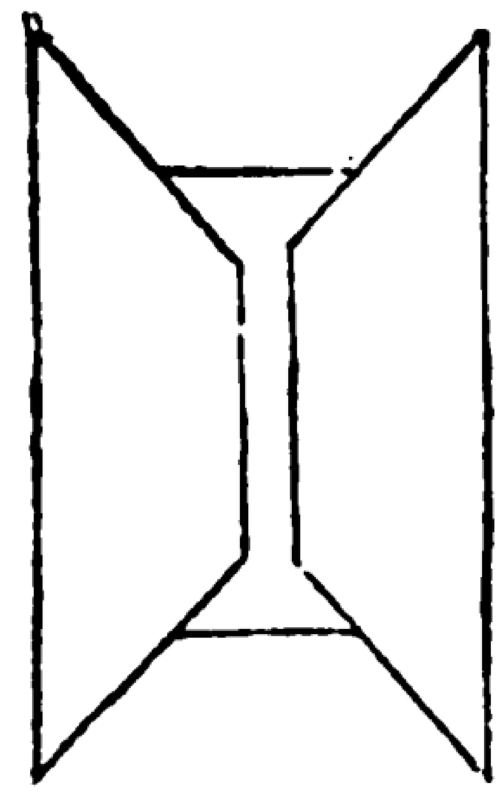
圖の如く表高に條をつけ、また



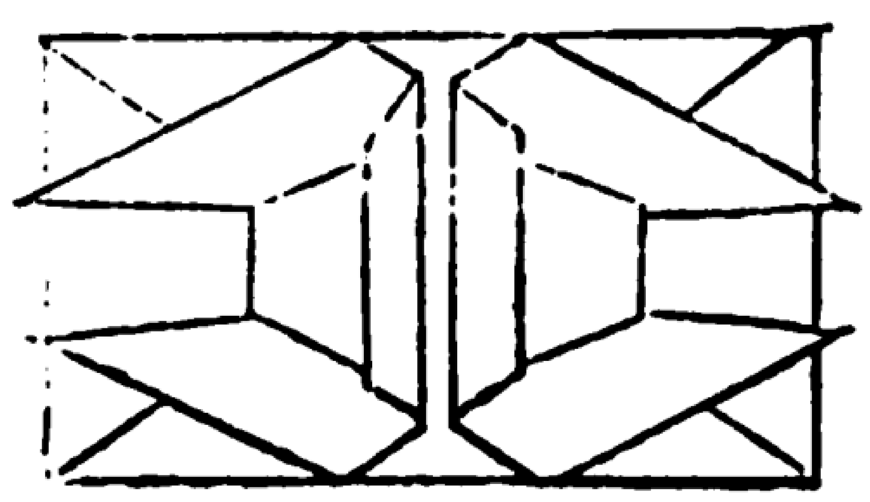
圖の如く裏高の折りめをつけ、



また神のれ宮の如く折り、次に、



また上圖の如く裏高のすぢをつけ、



かうやうに疊みあぐべし。之を箱疊と云ふ。なほさまざまあれど、次回にゆづらん。



だいどころ

雷干し

雷干しは、青瓜、又は、白瓜にても、兩端をきり、丸のまゝ、中の種をとり、長く、螺旋形にきり、鹽をふりて、二三日間太陽に干し、少し、よれたる處を洗ひて、能程にきり、酢、味淋、醤油等にて、用ゆ。

胡瓜大鼓漬

胡瓜の兩端をきり、中の種をとりて、其の中へ鹽をふり、しばらくねさて、水にて、洗ひ、紫蘇の葉を、鹽にてもみ、こまかに、きざみたる蓼の葉を巻込み、瓜の穴の中に入れ、これを、五分程にきり、酢に、砂糖、少量を加へたる中に、漬て、用ゆ。

白瓜の印籠漬

先づ、瓜の兩端をきり、身をくり拔き、紫蘇、生姜、青

唐がらしなどを、其の中に投れ、甘鹽加減にして、おしをつよくし、一週間程經て食すべし。

胡瓜渦卷漬

胡瓜の渦卷漬は、末になりたる頃、唐がらしを入れ、鹽加減をなし、漬け置き、水のあがりたるとき、竪に、庖丁目をいれ、身を、すきとり、一日大陽にほし、竹の皮にて、とけぬ樣に卷結び置、糠三升に、鹽、五合を交ぜ合せ、澤庵漬の如く、漬こみ、其の上に、壓石を置、凡、二十日程、經たる後とり出し、糠を洗ひ、小口より、きりて食すれば、味よし。

茄子阿茶羅漬

先、茄子の、へたをとり、一夜鹽壓になし置、翌日、酢に、砂糖、少量を加へ、其の中に漬、二三日經て食すべし。

小蕪青の辛漬

小蕪を、薄くきり、鹽漬になし置き、柚子の皮と、唐がらしとを刻み込、柚の絞り汁と、醬油にて漬よ。

菜花園

そも〱、菜を作り、花を植うることは、いと興あることなり。春は、朝まだきに、朗かなる朝日を迎へつゝ、串、また、かろげなる鋤もて雪消の跡を柔らげ、去年收めし種子のくさ〱取りいでゝ蒔きちらし、夏の夕には、腰に團扇、手に挾をもて枯れし葉をさり、蕾をさまたぐる枝をかりとり、さては萎れしには水などそゝぎ、まがきにまつへる朝貌に、明日はさくめりなどいひて、日頃の熱さ、淺き池などは底もかくるゝばかりなるを、たゞに忘れ、秋されば籠を肩にして黄に赤に黄金に、玉の美しき果を竿もたわゝに昇き來て、先づ、御靈の前に手向け、次には、これを叔母がりもて行けなど、わらべのあへぐばかりに、荷はせやり、こん年の秋は、一入多からむなどよろこびせたる、割なく樂しからむ。ことわざに、己が子はさらなり、養ひ子

にてみづからそだてたるは、ことにめぐしとかいへるとひとしからむ。且、此のわざや、身を健かにし、つひえをもはぶき、さては、こよなき樂あれば、三の德を集めたりともいふべし。されど、今より號を追ひて、折につけつゝ、咲く花より植うるもの、蒔く草木の色色、又、其の物につけ、今昔の歌俳句などをもとりそへて、掲げんとす。心あらん人は、これによりて、試みてよ。

○樗花　雲見艸、苦楝、俗に云ふ栴檀之。正字楝なり

舊五月頃さく花

歌、　夫木　家隆

かをりあふ庭のあふちの花散て
あやめの軒をすくる夕かせ

○山梔子花　木丹、越桃

○石榴花　古來より石榴三種あり。本紅千葉、白千葉、黃色千葉なり。近世桃色あり。かはりて珍らしく愛すべし。

云ふ

○女貞　貞木、鼠もちの花、五月、細く白き花開く、葉は椿に似てきざなし。故に姫つばき、又は、やぶ椿と

○黐樹　五月の頃白き花を開く之。葉は女貞に似て、うすく光あり。四時凋まず、只二三分落葉す、此の木の皮を取てひたし、臼につきてとりもちとす。

歌、　夫木

君がすむ宿の軒端のもちの樹の
かはらぬ道はときはかきはに

○南天花　南天燭、南燭、男續、染菽、楊烱、牛筋、

○栗花　花、青黃之。

○杜鵑花　さつき、種類、はなはだ多し。其の中八木とて賞するもの、松しま、ぜんじ、さつま紅、みねの雪、神樂岡、小つゞき、はかたしろ、人丸等之、五月躑躅とも書く、今はさつきとぞかりいふ。一名石巖花と云ふ

○合歡花　合昏、夜合、青裳、萌葛、花、上半は白く、

下も、半紅なり。葉は緑にして、夜は合すねむるが如きによりねむりの木の中略なりとなん。

歌、　萬葉　紀女郎

ひるはさきよるはわひぬるねむの花
君のみみんやわれさへにみん

○榊花　今の世に用ゆるさかきには花なし、尤、此の木は、色々説あり。三才圖會には、榊を坂樹とかく、花は、白く、少さき實を結ぶ、生は、青く、熟すれば紅なり。

○百合　強瞿、重箱、

歌、　夫木　西行

雲雀上るあら田に生る姫百合の
何につくともなき我身かな

姫百合　山丹、百合に似て、花も葉も少し、葉は柳に似たり。花赤し。

歌、　夫木　土御門院

庭の面の土さへさくる夏の日に
ひとり露けき姫百合のはな

○兒山丹　開花、小さく愛すべし。江戸より出づ

○唐山丹　赤花びら厚し、薄きものを緋百合と云ふ

○袂山丹　白く、花瓣厚く、本、琉球より來れり。深山の間、縄にすがりて、是を取得て、袂に入れて歸る。依て此の名ありと云ふ。

○鬼百合　卷丹、花赤く六辨なり。黒点あり。山丹より大きなり。

○糸百合　山丹、卷丹は一類三種なり。此の種數品になりて、透明百合、博多百合、黒百合、紅葉百合、紅百合、其の外、擧げて數ふべからず。

○紫陽花　一名四ひらの花、花葉、ともにてまりに似たり。唐の白樂天、初て、紫陽と名づくと云ふ

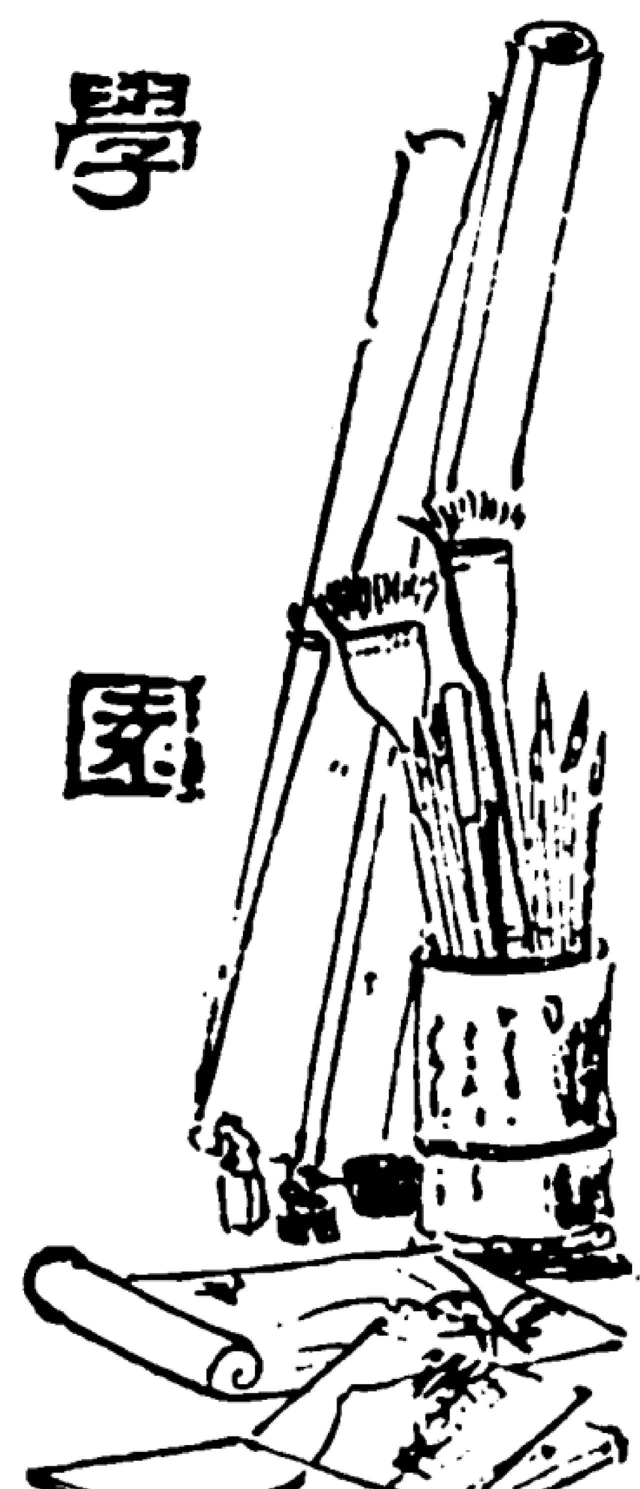
歌、　夫木　公朝

是程と人は思はし川上に
さきつゝきたるあぢさいの花

其の他、紅花、天門冬花、蜀葵、錦葵、龍葵、萱艸

花、下毛花、金銀花、金盞草、金錢花、夏菊、茴香、時計草、威靈仙、鼠李、美容柳、酢漿草花、蛇牀子、莪朮花、草石蠶、萎蕤花、天南星花、苔花、朝菊、豌豆引、花且見、花菖蒲、菖蒲、朝露草、長根草、蚊帳釣草、萍花、鐵綫花、撫子、菱の花は、いつれもいま咲く花なり。花のみならず、諸の草木の作りかたも書かまほしけど、所せけれど、次回よりせん。

學園



源氏物語講義（廿九）

下田義天類

いと、かうしも見えじとおぼし〻づむれど、さらにえしのびあへさせ給はず。御覽じ始めし年月の事さへかきあつめ、よろづにおぼしつゞけられて、時の間もおぼつかなかりしを、かくても月日は經にけりと、あさましうおぼしめさる。

この一句は、母、北の方よりの御返事を御覽じて、さて後、さま〲に、聯想せさせ給ふ、陛下の御心の內を、かき顯はしたる所なり。

○いと、かうしも見えじと覺し鎭むれど、いとは、元來最といふ字の義にて、優れてといふ程の意味を有せる詞なり。されど、一轉しては、俗にホンニといふ、冠頭辭の如くに代用せし所もあり。こゝも其の用方なり。かうしもは、かくしもの音便なり。如此バッカリハの義なり、しもと云ふ助辭は、事を、專に聞かせむとする折に用うる助辭なり。見えじは、俗にいふ見られまいと云ふ義なり。如何に、亡き更衣が戀しけれどとて、ホンニ、此のやうにバッカリ、心弱く愁傷のけしきには、人にも見られまいと、陛下は、御自身にて、御自身の、御心を思ひ鎭

めさせ給ふやうにし給ふけれどもといふ意なり。
○さらに、え忍びあへさせ給はず、一向に、その甲斐なく、我と我が心を抑へ兼ねて、忍びむとしても忍びきれず、こらへむとしてもこらへかねさせ給ふ程に、更衣の事が、御心に掛り給ふとなり。
○御覧じ始めし年月の事さへ、其の以前、桐壺の更衣を御覧じ始めし年月にて、即、更衣の入内し給ひし、その當座に有りし事がらなどまでをといふ義なり。
○かきあつめ、よろづにおぼしつゞけられて、かきは、あつめといふ語の力を強むる爲に添へたる一種の副詞なり。御入内なされし、其の當時の事を迄かき集めて、色々様々に、御追懐遊ばされてなり。
○時の間もおぼつかなかりしを、其の當時は御覧じ給はねど、只暫時の間なりとも、更衣の上が、おぼつかなく思食されしをなり。
○かくても、月日は經にけりと、あさましうおぼしめさる。かくてもとは、更衣の亡くなり給ひて後は、時の間所ではなく、久しく逢ひ給はねども、かくてもといふ義なり。月日は經にけりと、あさましうおぼしめさる。あさましうは、呆れたこと、若くは、肝のつぶれた事などの意なり。其の當時は、唯、片時の間も、更衣を御覧じ給はざれば、何となく、氣遣はしく不安心に思食されしものを更衣の亡くなり給ひて後は、かく久しく逢ひ給はねども、夫でも、猶こがれ死に、死にもせず、永の月日を過ぐしたわいと、陛下には我と我御身を、呆れたものに思食し給ふとなり。是、即更衣を御覧じ始めし當時とおくれ給ひて、かくながらへ給ふ今日とを比較して、色々様々に思食し續けさせ給ふ所の一ふしを、かき顯はしたるものなり。陛下には、彼の母、北の方よりの、御返事を見そなはして、後さま〴〵に聯想して、右のごとく思食し續け給ひたりとなり。
故大納言の遺言あやまたず、宮づかへのほいふかく、

ものしたまひし祝はかひあるさまにとこそ思ひわたりつれ。いふがひなしやと、うちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。かくても、おのづから若宮などおひいで給はゞ、さるべきついでもありなん。命ながくとこそおもひ念せめなどのたまはず。

これは、陛下が御追懐の餘りに思食す所を、彼の靭負の命婦に仰せ聞けらるゝ一くだりなり。

○故大納言のゆゐごむあやまたず。とは彼の母、北の方が亡夫、按察使大納言の遺言を無にせずになり。

○宮使の本意、深くものしたりしよろこびは　夫の遺言を遵奉し、其の娘を宮中に差し出さむとせし冀望の念、深くして、遂に、彼の更衣を、朕に逢はせてくれた報酬にはの義なり。宮使の本意とは、其の娘を宮中へ、御奉公に差出さむとせし冀望の念願をいへるなり。深くものしたまひしよろこびとは、深く辛苦を積みて、遂に、彼の更衣を宮中へ出し、朕に満足をあたへたる、其の報酬にはの義なり。こゝのよろこびは謝義報酬の義なり。

○かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ　かひあるさまにの下へ『してとらせむ』といふ一語を補ひて見べし。こゝは、わざと、此の語を省きたるものなり。即甲斐あるさまにしてとらせむとこそ思ひわたりつれといふ句なり。かひあるさまとは、亡夫大納言の宿願、また、其の遺志を繼ぎたる母、北の方の念願のかひあるさまにといふ義にて、詞をかへて言へど、彼の娘を女院皇后にもして取らせむとの、陛下の御豫考をいへるなり。思ひわたりつれとは、此の年月、夫のみ思食續けておはしましたる由なり。

○いふがひなしやと、うちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。　然るを、其の御豫考の片端をだに爲遂げざる内に、更衣の病死となりし故に、朕も共にはりあひ拔がしたりと、勅掟あらせられて、いとあはれなるものに母、北の方の、御身の上を御察し遊ばされたる御様子なりきとなり。

故大納言のゆゐごむといふ所よりいふかひなしやといふ所まで、陛下が、勒負の命婦に仰せ聞けらるゝ御詞なり。さて此の御詞は勒負の命婦の復命を聞こし食してより、かく仰せられたるものなる事は勿論の事どなれも、此の話は、更衣の御在世中燕寢のをりの睦ごとなどに、本人の口よりも、兼ねて、聞食し置かせられて、能く御承知わらせらるゝ事がらと見えたり。それは、今命婦の復命によりて呼起し來り、更に陛下が、年來の御豫考をも、こゝに、明に讀者に知らしめて、さて、更衣を御寵愛遊ばしたる度合の程をも知らしめたる所也。その筆法の微妙なること、實に驚くに堪へたり。此の所を、例の評譯に批評して、

故大納言の遺言云々、此の語、最妙なり。命婦歸參の所にはあはれなりつる事を奏すと云ひて、筆を省き、茲に至りて、更衣の母の物語をうく。かくても及ばぬ筆つきなかといひ、又かひあるさま云云、此の語にて、大納言の遺言は、豫ねて知ろし食したるさま見えて、更衣との御むつごと、いとこまやかなりけむ。と思ひやらるゝ例の妙なり。といへり。合せ見て、此の所の作者の意匠を察すべし。

○かくてもをのづから若宮などおひいで給はむ、これも陛下より、命婦へ仰せ聞けらるゝ御詞なり。かくてもとは、かくありともの義なり。彼の娘を、女院皇后などに食上げて取らせむと思ひても、今はかひなし。さどさりながら、かくても亦といふ義なり。

○れのづから、わか宮などおひいで給はざるべきついでもありなむ、このおのづからと云ふ語はさるべきついでといふ上へ移して見べし。かくても、若宮などおひいで給はむ、おのづからさるべき序もありなむといふ義なり。若宮は光る君をさしたるなり。生ひいで給はゞとは、成人し給はゞなり。成人といふことの内にはまうけの君、即、皇太子などに居給はゞと云ふ意を含めりと知るべし。さるべ

きついでもありなむとは、然るべき好時機もありなむとなり。謂ふ意は、若宮、光る君成長の後、若、皇位繼承の順序など來ることあらむ、更衣は、取りも直さず、國母にならせ給ふべき節合なれど、なき後なりとも、故大納言の宿望を果すべき時節もありなんと、母、北の方を慰め、かたく御心ゆかしの御物語りをせさせ給ふなり。

○命ながくとこそ思ひ念ぜめなど宣はす　此は、さきに二條の里亭にて、母、北の方が、靫負の命婦に語られし折りに、今迄とまり侍るがいと憂きをかゝる御つかひの蓬生の露分け入り給ふにつけてもはづかしうなむといはれ、また命ながさの、いとつらうおもう給へらるゝに松の思はんことだに恥かしう思う給へ侍れど云々ともいはれ、またかゝる御せを、そこにてみたてまつる、かへすかへすつれなき命にも侍るかな、などゝいはれたる詞を命婦が、つぶさに奏上したるによりて、此の仰ごとを賜はりしなり。右にいへるごとく、かくても若宮御成長の後、自然皇位を繼承すべき、御好運などもあらむ、更衣の兩親か心を盡し丶宿望の一端をなりとも、遂さすべき時節の到來する事もあるべければ、そのやうに氣短く、此の世を憂き物に思ひ屈せず。彼の母君も命長くながらへむとやうにこそ、思ひ念ぜめ。命ありてのものだねなり。猶、その方より、此の旨を傳へよなどのたまはしたりとなり。

以上述べ來たれる所を、今一度言を補ひ、義を續けて申せど、いとかうしも見えじとれはし鎮むれど、更に得忍び敢へさせ給はず、彼ノ更衣ヲ御覧じ始めし年月の事さへ、搔集め、よろづにおぼし續けられて、其ノ頃ハ時の間も御覧ゼネバれぼつかなかりしを今ハナクナリ玉ヒテヨリコノカタ、久シク逢ハセ玉ハザレド、かくても、ナホ生キナガラヘテ月日は經にけりと、我ト我ガ御身ヲあさましうおぼしめさるといふ義にて、是までは、陛下の御心の中を書き顯は

したる所なり。

さて、其の次ぎは彼ノ母、北方ガ故大納言の遺言おやまたず宮づかへの本意、深くものしたりし事ハ、豫ネテ、更衣ガ存在中ニ、彼ノ物語ニモ聞居タル事ナレバ、其ノ心遣ヒノよろこびはかひあるさまにシテ取ヲセンとこそ思ひわたりつれ。然ルヲ、朕カ、其ノ豫考ヲモ爲畢ヘザル程ニ、更衣ハ、墓ナクモアノ世ノ客トナラレニシカバ、誠ニ言ふがひなしやとうち宣はせて、いと哀に彼ノ母、北ノ方ノ身ノ上ヲおぼしやるといふ義にていふがひなしやまでは、陛下が靭負の命婦に仰せ聞けらるゝ御詞、その以下は草紙地にて、其のみありさまを序したる所なり。さて末段の一句は、かくてもおのづから、若宮などおひいで給はゞ自然の順序トシテ、皇位ヲ繼承シ玉フベキヤウノ好時運ニ逢ヒ玉フヤウノ事モ必ナシトハ云ヒ難カルベシ。サル時運モ來ラバ、更衣ハ、即、國母ノ御身ノ上ナルガ故ニ、皇后追尊ノ宣下ナド仰セ出サレテ、彼ノ故大納言ノ宿望ノ萬分ノ一ヲ果スベキヨキついでもなりなむ。彼ノ母君モ命ナガサノイトツラウ思ハルナドヽ心細キ事ヲ思ハズツレマデハ命ながく生キナカラヘン＝とこそ思ひ念せめなどゝ、宣はすと云ふ義にて、之を陛下より命婦に仰せらるゝ御詞なり。但しなどゝ宣はすといふ語だけは、双紙地の文なり。演者云ふ。此の結文に……を圍みたる所は、成る丈、本文を離れざるやうに、其の大意を述べむとして、講演の詞どもを、かく書き分けたるなり。これを除き去れば、即、元の本文なり。補ひたるは、即本文の餘意とも言ひつべし。讀者こふ、これを引續けても讀み下し、また、これをとり放しても讀み試み給へかし。

漢文學講義（十九）

大林弘一郎

十六、石川丈山（承前）

事平。以レ犯二軍律一。薙レ髮匿二于京師妙心寺一間、

從信勝。正意等遊。信勝奇其才。勸見藤原肅。重之素鄙文儒不肯。强而後可。肅爲說倫理道德。於是痛自悔悟。發憤潜研經傳。肅讀其詩。嘆曰。異日必爲一代詞宗。

この一節は、事平ぎし後、世をさけて、學に志したることを記したるなり。

大阪の役は、慶長十九年冬、初の戰あり。遂に、和を議し、又翌年元和元年夏、再、戰ひ、遂に、落城となりて、豐臣秀頼等一族、皆滅びて、事、始て平ぎしなり。

かくて、この役に功ありしものは、それ〴〵、恩賞をうけしかど、重之は、軍令を犯して、ぬけがけしたる故に、その事もなく、自、心を決して、薙髪し、京都の妙心寺の寺中にかくれ、その頃の學者林羅山(信勝)堀杏庵(正意)などと交を結びたり。羅山、重之の才あるを見て、之を奇なりとし、自、師とする所の藤原惺窩肅に見えしめ、學を講ぜしめんとせり。重之、もと、武士なれば、文學を事とする儒者をも鄙しみ、容易く承知せざりしが、羅山强ひて、之を勸めければ、遂に、之を聞き入れて、惺窩の門に入れり。惺窩重之の爲に、倫理道德、人道の大要を說き、聞かせければ、重之も、是に於いて、いたく、感服して、自、先來の非を悔い悟り、これより、憤を發して、聖賢の經傳、支那、古來傳ふる所の書、四書、五經の類を心を潜めて研究したり。これによりて、學問もすゝみ、詩なども、巧にするに、至れり。ある時、惺窩、重之の作れる詩を讀み、嘆じて曰はく「他日に至らば、この人は、必、一代の詩人の首ともなるべし。」と、其の詩は、漁村夕照といへる詩にて、「欲將簑衣曝返照。釣竿還是魯陽才。」との二句につきていへりし由。先哲叢談に見えたり。この句の意は、漁村にて、簑などを、夕陽に照して曝さんとするに、夕陽の光、次第に斜になり行

くことなれど、むかし、支那の魯陽公が戰場にて、日暮に、戈を擧げて、日を招ぎ返したるが如く、釣竿を擧げて、また日をまねぐなりと、面白くいひまはしたるなり。魯陽公の故事は、淮南子といへる、古書に見えたり。

常山紀談の文、(つゞき)

此の軍に、御近習の士首を得たるは、丈山と、間宮權左衛門豊島主膳と、三人ばかりなり。丈山御軍令にそむきけるゆゑ、賞に及ばず。是より前、丈山駿府にありし時、清見寺の僧說心に禪理を聞きたりしが、出陣の時、暇乞とて寺に至り、此の軍に御近習の士首を取たる人、三人有と聞れなば、其の一人は、必、我なりと云はれよといひたるが、果して云かし。東照宮、いまだ、御旗を駿河に返されざる中に、妙心寺に隱れたり。是より、學文の志、厚く、日夜となく書を讀み、經史(經書歷史のこと)に通じ、詩を善せり。丈山三十三の時とかや。

重之遂遷俗。然素懷在嘉遯。不蓄妻。板倉重昌雅相友善。薦之淺野長晟。重之有老母。乃曰。家貧親老。不擇祿而仕。因與母往安藝居。久之母沒。去還京師。結廬叡山麓。放情山水。題其景勝。有百花塢。洗濛瀑。老梅關。嘯月樓等之目。壁上畫漢晋唐宋善詩者三十六人。各題其一詩。名曰詩仙堂。因自號六六山人。風騷自娛。口絕兵革。人叩之輙云。老芳昏耄。前事昔々。然每出行。使童奴檐偃月刀以從。有詩曰。枕頭三尺劒。瓶裏一枝梅。又曰。腰間無寸鐵。胸裡揮三軍。人謂山人雖隱。而壯心未已也。

此の一節には、丈山が、遁世の志ありし事を初とし、母の養の爲に藝州廣島に仕へし事、母沒して後京に歸り、詩仙堂を營みて、風流を樂みし事などを敍したるなり。

重之、儒道を學びしより、遂に、心を決して、還俗したりしか、其の志は、もとより、退隱して仕へざるにありて、妻をも娶らずしてありき。嘉遯とは、周易の遯の卦の辭にて、よく遁るといふ意なり。よく遁るとは、進むべき時には、進みたれども、退くべき時には、潔く、身を引き退く意にて、中正にして、邪ならざる行なり。

板倉重昌、(内膳正と稱す、勝重の三子、重宗の弟なり。)島原の役に戰死せり。)もと、重之と親しかりしが、重之を安藝廣島侯淺野但馬守長晏に薦めて仕へしめたり。時に、重之は、なほ、老母ありしかど、漢詩外傳にある曾子の語をあげて、いへるやう、家貧しく親老ゆれば、祿を擇まずして仕ふ。」と、この語は、もと任重道遠不レ擇レ地而息」といふ語と對句なり。かくて、母を、輿にのせ引きつれて、安藝に往きて、淺野家の客分となりて仕へたり。居ること久しうして母も沒しければ、辭して京に歸り、叡山の麓一乘寺村に、廬をしつらひ、山水の樂に、情をほしいまゝにして、自、娛めり。又、自その、景色につきて、名を付し、百花塢洗濛瀑、老梅關、嘯月樓等の稱あり。而して室の四壁に、漢、晋、唐、宋、各時代の詩人にて、名高きもの三十六人を畫工をして畫かしめ、自筆にて、その上に、各人の詩一詩づゝを題し、詩仙堂と號し、因りて、自、六六山人と號しひたすら、風流文事をもて、自、娛、口に兵事を談ずるを止めたり。騷とは、むかし、支那戰國の頃、楚の屈平といへる人、離騷といへる文を草して、自、讒を蒙り、憂にかゝれる情をのべたるより、騷を憂の意に取り、憂愁を懷き詩賦にあらはすことに、騷の字を用ゐ、騷人、騷客などつゞけて、文人歌士を稱することとはなれり。

人、もし、兵事を問ふものあれば、丈山曰はく、「年老い氣力も衰へ、物事をうち忘れたれど、以前

の事は、すべて瞢々として、明に記憶せず。」と答へぬ。されど、出で行く時は、必、召使のものに薙刀を持たせて從はしむるを常とせり。又、其の詩にも、枕頭三尺の劍、瓶裡一枝の梅、と詠じて、常に劍を身に從へ、武を忘れざる意をのべ、又、腰間寸鐵なく、胸裡三軍を揮すと詠じて、胸中には、武略を懷きて、忘れざることをのべたれど、當時の人々も、その身は山水を樂みて、隱遁せりと雖、その壯なる心は、未、全くうせざるを知れりき。この事、先哲叢談には、林春齋が文を引きて、之を證せり。

常山紀談の文(つゞき)

其の後板倉内膳正重昌、丈山の流落をいたみ、淺野但馬守長晏にかたりしかど、長晏、賓客のもてなしにて、いと懇にせられしかど、安藝に行く、老母孝養の爲なり。母終りて後、寛永十三年五十四にて、藝州を去りて、京師にかくれ居しに、板倉重宗、京都に有て、丈山をいたはる事大かたならず。諸侯貴人の會する時、丈山を、座上にまねぎて、此の老は、文武の道に達せる人なりと敬禮せらる。其の後比叡山の麓一乘寺に、隱遁の地を設け、詩仙堂を作りて、詩人三十六人の像を、壁に畫き、書籍を友として閑居す。　後光明帝御即位の時、松平伊豆守信綱、賀使として、京都にまゐられしに、丈山と親戚たるゆゑ、たびたび閑居を訪れけり。承應元年七十歳に及で、三州泉の郷は、其の故郷たるゆゑ、歸るべき志あり。板倉重宗にかくといへども、許さゞりしかど、今よりは、京都へ、再び出じ、さらど、其の許へも參らじとて、和歌あり、

　　わたらしなせみの小川は淺くとも
　　　老の波をふかげもはづかし

後光明帝、丈山が隸書によきと聞し召、高木伊

勢守守久、勅命を傳へけれど、八卦の字を書て奉る。上皇も、又隷書の大字を書しめ、酒肉を賜はる。寛文十二年壬子五月廿三日、一乘寺の閑居に終りたり。九十歳となり。其の詩を覆醬集と名付け、いま世に行はる。

一乘寺の閑居、今は尼持たる寺になりぬ。されども、詩仙堂は殘れり。繪像も廢せず。丈山の物具、鎗、又、如意、几などもありといへり。

（未完）

布美安波勢（十）

白松園主人

九月

秋の夜月あかし。林のもとに鹿たてり

左持　保世

月みるよひの、いつとても、あはれならぬをりはなきなかにも、こよひの月、いとはなやかにさしいでたるに、おぐらの山もなのみにて、照りまさりたるもみちのもとに、鹿のたゝずみて、山田のひたにもおどろかず、のどやかに首さしのべて、ふたごゑみこゑなきたるは、所からにや、たへがたきほどものあはれにて、

右　重豐

鹿のこゑふたこゑばかり、例よりけぢかきにおどろかされて、まどのかけかねをおしはなちたれど、ひんがしの山ぎははなやかなるに、ふとおもへた、こよひははつかのありあけ月になん。こなたのはやしのしもとはらもあきらかなり。うそふきたちて、いともかなしけになくさまはしげも見えて。

評判　左右の文ともにわろからず、ちからいれたるさまも、ことどのあやも、同じやうなり。

左　清風

十三夜の月の、はなやかにさし出たるに、小ぐらの山を見わたせど、いともしげれる木のもとに、さをしか

のたゝずみけるは、つまにおくれて、道まどふにかと、こゝろぼそくもあはれになむ。

右勝　　　侚文

鹿のこゑの、枕がみちかう聞ゆる、さうじれしあけつゝみれど、くまなき月影の、もみぢの林に、色はえて、ひるかとむかりあやまたれ、をちこちみわたすに、ことにそめましたる木のもとに、たゝずみをる鹿の、こゑのかぎり鳴くなりけり。かれもこれも、とりあつめたるものあはれさを、かくめにちかく見るは、山ざとのかひよと、われもうめかれて。

評判　左の文よろしからず。右の文はこよなくまさりて、めでたけれど、いさゝかのきずあれどもかちとす。

左勝　　　徳

さしのぼる月影の、例よりも、いとさんなるに。もよほされて、こゝろのゆくまゝ、こゝかしこと見わたすうちに、秋風いたうふきにたれば、山の梢は、さらにもいはず、日ごろめなれしふもとに、色こきもみぢのはやしも、大かたはのこるかたなくちりみだれて、あらはなる木のもとに、さはしかのおのれひとりかくろひかねて、いとわびしげになきつゝ、月のかほのみ打まもりて、たゝずみゐたるこそ、かぎりなくあはれなりけれ。

右　　　祝之

をかこえの道、けちかくなきたる聲にれどろけむ、くまなうさしのぼれる月にはえて、かた山林のもみぢあかうてりそひつゝ木がくれに、うかれ出でたる鹿のたちども〇みえて、いとをかし。

評判　左の文めでたし、たゞしさをしかといふは、歌詞なり、文にはをしかとかくべし。右の文もわろからねど、かきえぬところありて、れとれり。

（未完）

漫録



教梯抄（十二）

新後撰集雑中

普光園入道前関白左大臣

むくふべき世のことわりは思へども
民のちからをたすけやはする

續千載集雑中

弘安百首歌奉りける時

前大納言經任

二世まできみにわふみのかゞみやま
こゝろ曇らむいかゞ見るべき

同　同

百首歌奉りし時

前中納言定房

ひとすぢに人をも身をもれもふかな
うつ墨なはのすぐなれどのみ

同　同

御製（後宇多院）

世をさまり民やすかれといのるこそ
わが身につきぬ思ひなりけれ

同　同

文永八年白河殿にて人々題をさぐりて歌つかふまつりけるついでに

後嵯峨院御製

なかなかに人よりものをなげくかな
世を思ふみのこゝろつくしは

風雅集雑中

雑歌に

前大納言爲兼

ものとしてはかりわたしなよはき水に
おもき船して浮ふとおもへむ

新千載雜中

正中二年百首歌奉りける時　大納言師賢

河かみの丹生のそまひとこゝろせよ
みしかき木をも棄てぬ習ひを

新拾遺集雜中

千五百番歌合に　從二位家隆

ながらへてあれぞあへる君が代に
數ならずとも身をばいとはじ

同

同　貞和百首歌奉りし時　等持院贈左大臣

いにしへのかしこき道をまなべども
こゝろをかふる人ぞすくなき

新續古今集雜中

貞和百首歌に　後福光園攝政前太政大臣

おろかなる身にこそ更にしられぬれ
人をしすてぬきみがめぐみは

同

同　永和百首歌に　後深心院關白前左大臣

往昔をかゞみとすれぞれろかなる
こゝろはなぞか映らざるらむ

同

同　文保百首歌に　前權僧正雲雅

うきは身の報いとしらでおほかたの
世のならひとも思ひけるかな

續古今集雜中

洞院攝政家の百首に　入道前太政大臣

世をてらす月日のひかり見るたびに

くもらじとおもふ心こそつけ

續千載集雜中
題しらず　山本入道前太政大臣

つかふべき道をわすれぬきみがため
こゝろくもらで月をみるかな

新拾遺集雜中　源直氏

數ならでながらへ來つるうき身をも
きみがためにと猶をしむかな

（未完）

歌誹百人撰（二）

故海壽翁

雪中庵嵐雪

第六
秋風のこゝろうごきぬ繩すだれ

此の句は「秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞおどろかれぬる」といふ歌をふまへていへり。すべて一心は、主人にて、手足は家來のごとく、心の行所へ、手足のはこびありて、善となり、惡となるも、皆心ぞかし。足をおさへるぬの切といふ、天台の一心三觀もみな、心のさとりやうなり。寺にて、幡を立たるに、風の當りてひらめきければ、師の僧あれは何が動くとあれば、一人の弟子はたがうごく成と云ふ。今壹人の弟子は幡がうごくにあらず、風の動く也といふ。師の僧聞て、動くは幡にあらず、風にあらず、汝等が心のうごくなりといはれし。是を非風非幡の法問といふ。此の嵐雪の發句と、如斯かせの吹來るにつれて、繩簾の、ひら〳〵と動きしを見て、是れすだれにあらず、風のうごくにあらず、秋の心の動く成との心なり。

第七　成島道筑
露雫かゝる所へ君を置て
袖絞り行く木々のむら雨

此の歌は、寛延四年六月二十日大御所吉宗公、御他界

まし〳〵、東叡山の御廟所へ、御尊骸を納め奉りて、退くとてよめる歌也、君の大恩を荷ひ、御いたみの、深切の歌おもひやるべし。露雫の、箇樣なる所へ、今日の只今迄は、あまたの御家臣かし付奉りしに、今は、誠にわかれ參らせて、羽なし鳥の如く、君に逢見ん事も、是限りと、名殘の涙、眼前に見る如し、百年の後に吟じても、手に取るやうにおもはるゝ社、實義なれ。君、一人置參らせ候筈はなき事なれども、是非なし。當時の有樣、殉死、追腹といふは、堅き御停止にて、詮方もなく、袖のみにしられて、村雨のごとき泪せきあへず、露雫かかるといひかけし所、面白し。臣として、君を、先立て歎くに、かゝる眞實、和漢に少し。此の道筑といふ人表御坊主にて有しが、學文を好み、吉宗公御聞に達し、御同朋格となり、帶刀御免被遊候なり。一とせ飛鳥山の碑の銘人にて歌學も、尤よろし手跡は、東波流の能書にてなをざりの人にあらず。

第八　　寶井其角

むめがゝや乞食の家も覗かるゝ

是は、誹諧宗匠にて、むせを翁の高弟、三廻り稻荷にて、雨乞の發句にて雨降し事、誰しらぬ人もなく。予が、誹諧妙談集に記して委し。此の梅が香の句は、むさく、穢しき非人の家なれども、むめの、ほのかに匂ひぬるに、思はず覗かゝるは面白し。人も、又如此、顏形も、見苦しき、見だてもなき、人がら、衣服の破れけがれたるを着たりとも、心に、文學秀才あるは、綴の金を包むごとく、乞食の園に梅のぷん〳〵と匂ふがごとく、終には用ゐられん事、齊の晏子、我朝の秀吉、或は山本勘助、福島正則の三人臣の如く、見苦しき形によるべからず。韓信が、高祖を助けし類多し。

第九　　法眼不角

いぶくとも跡はねやすき蚊やりかな

是は、立羽千翁とて宗匠なり。誹諧にて法眼に成られしは、此の人斗なり。子息十人有りて、皆男子也。惣領を不局二男壽角、三男辰角といへり。此の三男を、江

戸芝飯倉町小川平八といへる人の方へ、聟に遣はせり。先の兩親むづかしき人にて、辰角不縁して歸りし時、父不角、此の發句をして、辰角に遣したり。辰角、此の句を見て、また飯倉に立歸り、兩親に、孝を盡し、すゑながく繁昌し、兩親も過行き、我も年老、忰勝五郎へ、家督を渡し、高輪へ隱居して、老を樂しめり。今、平八といへるは勝五郎の事にて、先平八の孫にて、辰角の子息なり。ます／＼繁昌し、めで度、此の不角、法眼の官に、大内へ參りしに、雲の上の人々、不角に逢●ふて、法眼は、四位に當れり。古も源三位賴政、椎を拾ひて、世を渡るといふ歌を讀て、三位になり、御自分は、誹諧の妙を得たるよし、都迄もかくれなし。狂歌にても致されよかしと望まれ、不角とりあへず、

　位山はるかに登り賴政の
　　拾ひ殘せし椎をとりへて。

と讀れたり。拾ひ殘して、捨たる官を、我が爲には有がたしと、冥加をおもひし心、至て、情深し。また或時、不角、伊豆の熱海へ、湯治に行かれしに、宿の主人、眞桑瓜を、饗應す。殊の外厚味にて、甚賞翫せられしかど、亭主、これは手作の瓜に候得共、此の間は、狐毎夜來て取食ひ申候故、番を置き候得共、何時の間にか取食ひ、瓜も殘り少に成候といふ。不角聞て、夫は困りし事なり。某咒に發句して見るべし。今宵、狐畑に立おかるべしと、有合の短冊に

　巳が名の作りを喰ふ狐かな

と書てやられけり。畑に立置きしに、其の夜よりして、狐、ふたゝび來る事なし。妙と云ふべし。狐といふ文字、才に瓜とかくなれど、瓜を喰ふは、則巳が身を喰ふなり。字のつくりを、誹作の作りにかけたるところ小町の、雨乞の歌の、さりとては、又、天が下とはど、諺をせめたる所こもれり。狐は、詩歌連誹に、己が身を、作る事、まゝ有。唐土にも、ためし有。我が朝にも、源頼朝公、夏の頃、狐のなきしをあやしみ給ひ、愛甲の前司、一首詠じければ、狐死したり。近くは、北

條氏康、ある年、小田原の亭にのぼり、四方を見晴らしたまふに、折節、狐、しきりに啼しかど、氏康、あやしみ夏は、狐は啼かぬものなるに、いかゞして啼くやらんといぶかり給ふ。御側にありし郡司保高、往昔の頼朝の事をおもひ出し、一首、被遊然るべしと申上げゝれど、氏康、

夏はきつねに啼くむしのから衣
　おのれ〳〵か身の上にきよ

とぞ讀れたり。翌朝、狐、其の亭の下へ來り死してけり。氏康は、和歌にも、名高く、夏はきつと、狐の文字を切たり。是とりも直さず、狐を調伏したるなり。不角も、きつねの文字を切たり。其の夜からは、來らぬからは、死したるも知れず。俳諧は、和歌より出たれば、感ずる所、同じきなり。惣体、此の不角は、句に妙を得たり。一年丹後國切戸の文珠にても、名句を吐き、又、發句して、瘧を落しゝ事も、度々なり。事しげきゆへもらしぬ。

第十

●をもひやれつかふも人の思ひ子を
　我が思ひ子におもひくらへて　吉川維定

此の歌は、彼を察し、是を、おもふといふ場にて、人に、仁を及すのことゞなり。陶淵明が、我が子の所へ、僕を、遣て遣す言葉に曰く、汝が、薪水の勞をかへんため、僕を遣す也。然れ共、是も、人の愛し子なり。汝も、不便を加ふべし。我、汝を思ふと同じ。其の心にて、召仕ふべしと也。此の淵明が、仁愛の語を取ての歌ぞかし。此の維定がおもひ子とよみしは、すぎし延享二年のはる、御用に付、佐渡の國へ、旅行のせつ、或家に泊りしに、あるじ、召仕の小忰を、殊の外打てうちやくして居たるをみて、是を、押とめ見れば、主にも一子あり。淵明が、事を思ひ出して、御身分にも、子あり。是も、人の子なり。御手前の子に、おもひくらべて、憐を加へ給へと、此の一首を書て、わび言せられしなり。夫より、亭主も、腹立時は、此の歌をおも

ひ出して、折檻をせざりしといへり。

第十一

黒木焚けむりも己が落葉かな　　其角門人　貞佐

此の貞佐は其角秘藏の弟子にして、今の有佐と、平砂が師匠なり。此の句、落合といふ俳書の、秀逸の句なり。黒木は、多く、京都の在八瀬より、出で、其の黒木の葉を以て、黒木を焚く、是、則、豆からを炎くとやらん、同根同性をそこのふ誡、爰にあり烟も己がといへり。世の中に、親子不和なるもあり。又は、兄弟、不斷心よからぬもありて、家督など爭ひて、訴になることもあり。天地に背きて、甚不仁なる事なれども、百人に二三人はあり。これも、五倫にはづれ、不實の科、同物にて同物をそこなふ。俗に云、血で、血を洗ふにして、淺間しき事にあらずや。さよふ成事有ては、天地に孕れたる人間、血脉の甲斐もなし。近くは、武藏守利隆、舍弟忠繼を憐み、御繼母のよこしまにて、忠繼に毒がひし給ふを、利隆知つて、忠繼に與へず、手づから取て食し給ふ。是を見て、忠繼も、兄の利隆のたべられし物、たとへ、毒ありとも、弟の食せざる事やあると、取て食し給ひ兄弟、共に、血を吐て逝去ありし。御兄弟の道を守り給ふ事、斯の如く、是程にはあらずとも、せめて中庸に守りたし。此の發句は、五倫を守らず同性をそこなふものには、よき戒の句なり。此の貞佐が方へ、或時、其角來りしゆへ、誹談の折から、雪降り出しけれど、貞佐、傘を貸さんといひしに、其角けふは、降りさうにありし故、傘は、持來たりと、云ひければ、貞佐、

かり物とおもへば重し傘の雪

其角

我がものとおもへど輕し傘の雪

と追句せり。傘々の發句といふ。

（未完）

飛鳥井家和歌の式法

一短冊の事、二條家には、青雲を上になす。冷泉家には、春夏は、青雲を上にして秋冬は紫雲を上になす也

一短冊とづる水引はゆび三ふせ置て、上を指二ふせ置て、水引を切なり。

一たんざくとずる水引、白赤の方見合、かたくは紅の方を表にして、白き方を、裏へ通すべし。紫色の水引は、間の色とて五色より外へなすべし。

一、懐　帋とぢやうの事、重ねたる紙の奥をとづるなり。とづる帋は引合を用ゆ。又、短冊にてもとづる也。其の時裏を表にして、雲有かたをうらへなすなり。

一懐　紙を二つに折て、折目より、一寸すむかり除きて、小刀にて穴を明て、懐　帋のうらの方より畳て、かみを裏に通して、二結びむすぶかみの方をかたわなにする也。かたわなを上になす也。かたわなの長さ一寸むかり下の方へなりたる閉紙の先を一寸ばかりに切なり

一懐帋のとぢめ文字にかゝりてもくるしからず。

一裏書は、とぢぬ方の裏のはしに上にあげてかくなり。

一木草の枝に付て贈る短冊の事、冷泉家には竪帋を二ッに折りて、又、横を四ッに折りて、草木を結びつくるなり。二條家には、竪を、二ッに折り、横を三ッに折りて、草木に付るなり。付やう人に依りて口傳有り。

一百首懐帋二行書のしたゝめ様の事

夏日同詠百首應製

正位行權大納言藤原朝臣雅親

郭公　(位あかりたるは、位を先に書也。位を、先に書付、如此此行の字を書入なり。)

何々……………

何々……………

(二行也)

一三行三字の懐　帋書様の事

夏日同詠社頭鳥

和歌

神祇權大副大中臣基長

見よし野やかつての
宮のやまからす神
につかふる名もふり
ぬなり

是は、第二の賞翫の書樣なり。夏の日の夏の字、見よし野の見の字に、中程にたるやうに書べきなり。鳥の字和歌と云字の下通よりあがりたるがよき也。又、和歌と云字をそはに書也。とは紙の奥廣きとき、かやうに書べき也。

一三拾首懷帋書やうの事

春日同詠三十首和歌

權中納言藤原雅世

春七首

初春霞

あさ日かげ匂ひそめぬる霞より
春のそらこそあらはれにけれ

題

何々…………

何々…………

一法躰の懷帋書樣の事　（引合を繼て書也）

詠社頭鳥和歌

權律師弘宣

みよし野のかつての
宮のやまからす神
につかふる名もふり
ぬなり

詠三十首和歌

權律師弘宣

春七首

初春霞

あさ日かげ匂ひそめぬる霞より
はるの色こそあらはれにけれ

題何…… ……
何……………引合縫て書て
何…………兒若衆同前

詠三首和歌

千菊丸 此丸と云字兒若衆いづれも書ものなり

月前虫
草のいほに月見にこゝろ
ゑらてこそ人をまつてふ
虫はなくらめ

古寺月
すみのほるよかはのかねの
こゑのうちに月はにしなる
みねにおちつゝ

寄月祝
君が代にめてらふたみの
秋のかけ空にをゑるや
月の宮人

一女房の一首懐帋の書やうの事

梅がかにきゐる
うぐひす春
か氣て
那氣ともいまた
雪は降
つゝ

一女房三首懐紙書様の事

いてゝたになひく
くもや
へたつらん月をゐ(ちらし書は、文字の數定まらす、大かた此分には墨つきども不定なり)
まちの
よはそふけぬる
あさちふやふかき夕の
むしのねにれきこそ
そはれ
袖のしらつゆ
玉かつら心にかゝる

おりふしはふきくる
　かせの
なつかしきかな
（是は東將監頼政か妻の歌也）

詠五首和歌
　榮雅

山家春
さそひてもいつち行らむ
山にてもなをうき風の
はなに吹なり

山家夏
たか里になかめてかまつ
郭公ゆふなるくもの
軒に鳴聲

山家秋
人もこす月も出つる
みねちかみ松の戸はそに
影そすくなき

山家冬
けさはまつ柴をりたかて
むかひみる山のいくへの
ゆきもくもらす

山家雑
都をそにしの空とは
おもひやるこゝも小倉の
山里にして
（五首七首同前）

一能書方（世尊寺殿なとの事也）には、綴目の前に二行あり。七首同前、口傳有之なり。飛鳥井家には、前の帋に、一行有之。四首めの歌の事也。

一短冊の當座の時の詠草有口傳
（人に歌を見せる時、中帯を詠草といふ也）

一懐紙の詠草の事
（着日より題出されし時の事）

（兒法師同前なり）

沼杜若　弘宜上

さらぬたにそことも見えぬかくれぬを
咲てへたつるかきつはたかな

霞隔遠樹

三輪の山まつ里かすむ
はつせ川いかにおいみん
二もとの杉

霧中聞鶯

都いでて遠山すりの
狩衣なく音もなるゝ
たにのうくひす

野外殘雪

春日野はきのふの雪の
きへかてにふりはへ出る
袖そ數そふ　（歌數多き時は二行にて書也）

一女房懐帋の料紙は、薄やうのかき手といふに書。京城殿と云所に有之、田舍にては引合一重に、金銀のはくをちらして書也。常には、一枚にも、書之、料紙に、句を、ふかくとめ申べきなり。

一能書方傳短ざくのかきやうの事

としのうちに春は來にけり一とせを
去年とやいはんことしとやいはん

如此字頭を、一つはかな、一つはまなに書てよし。假名になりとも、眞名になりとも、二つながら、字頭の同事になるはあしきなり。

詠方便品和歌

榮雅

其智惠門

いかにせんみやまかくれの
松のかとたつねいるべき
みちもまかはし

懐舊

なげくとてもよはしかほの
月夜かなわすれぬ去年の
春のわかれを

（是は、哀傷の懐帋也。氏歌は、東山どの丶一周忌の時の歌なり）

一短ざく裏書の事口傳有之

文龜二年正月五日

文龜二年正月廿五日　春日法樂

急日に題を配て、當座にてなきは、此の分までにて、當座共、何とも書べからず。

一懐帋裏書の事

明應九年四月廿九日　會

明應九年十月十八日　和歌會

大永五年七月七日（七夕共）　月次和歌會

如此書べきなり。

大永八年八月廿五日　和歌會

是は會といふ字の下通のそはへ、五六歩ほとのけて、次第不同を可書之書式の懐紙は、法中は法師はかり、別に官次第にかさね候、左ならで、法中も、又、俗方も官位も、不同にひとつにとつるをは、次等不同と書儀好し。

競點歌（第二十五回）

諏訪忠元

阿部光忠君評

新年の竹　津輕承昭

呉竹の若かへりてもみゆるかな
年の初日の影もうつりて

結句、影もうつりてトアルヲ光そはりてト改タシ

門松にそへて立たる八ちまたの　前田利嗣
竹のみとりのいさましきかな

三句、初句に打合侍らぬにや、依テ八ちまたトアルヲ、家ことのト改タシ

ことなくて去年はきのふにくれ竹の　荒山徳隣
嬉しきふしは今朝もみゆらむ

下句嬉しきふしも、今朝もみゆらんトアルヲ、嬉

しきふしぞ今朝みえにけるナドセマホシ。

海老原秀之

新らしき年の姿をみせはやと
　園生になびく千代の若竹

二三ノ句ヲ姿もみゆる哉トシ結句ノ若竹字呉竹トカヘタシ

増山三雪子

霜ゆきに葉かへぬ宿の竹村に
　千代ことはきて雀なくこゑ

メデタケレド、雀ノ歌ト聞エテ題意ニ叶難クヤ侍ラン。但聲はなりト改タシ

増山きみ子

新らしき年の光のそひてなほ
　緑ふかめし窓の呉竹

二三ノ句ヲ年の光りやそはるらんトシテ、四句ヲ緑ふかむるト改メバヤ。其の理由は、此の四句ハ、必ズ現在ナラザルベカラズト思ヒ侍ルノミナラズ、猶ト云ふ詞ノツカヒザマモイカニゾヤ。

増山正治

。新玉の年立けさは呉竹の
　葉末の風ものどけかりけり

佳

青木修

あたらしき年のみそらに千代こめて
　おなし緑に見する呉竹

上ノ句新らしく年立空にいろかへぬナドアラマホシ。

南部明子

嬉しさの一とふしそへて呉竹の
　世は新らしき年立にけり

初二句樂しけきふしもそはりてナドニヤ

南部利恭

生立し庭の若竹新らしき
　年のはしめそ千代はみえける

初二ノ句生茂る庭の呉竹ナドアラバヤ。

南部幾く子

立かへる年のはしめの嬉しさを
世々にこめたる千代の呉竹

二ノ句以下ヲ年のはじめに嬉しさのふしさへみゆるトシ玉ヒテハ如何

水野忠敬

新らしき年を無かへてわの宿の
竹のみとりも色そへにけり

結句、自他違へりいろそひにけりト改タシ

鳥谷部紹胤

塵ひらをはらひ清めし門にけさ
新たに切てかさる呉竹

三句以下ヲわが門にまつ新らしくたつる呉竹トカヘ玉ハヾヤ、本ノマヽニテハに文字カシマシキガ上ニ結句穏カニモ侍ラヌニヤ。

相澤成

○新玉の年立門の呉竹に
うれしきふしもみえそめにけり

佳

土岐頼知

年立て千代を重ぬる呉竹に
光りのとけき朝日子の影

土岐ときは子

初日影のとけき園にふしもなく
直き姿になひく呉竹

園にふしなしナドツヾケガラ穏カニ侍ラズ。二三ノ句ヲのとかにみゆるふしのみかナドシ玉ヒテハ如何

年立て嬉しきふしのみゆる哉
千代をさゝやく園のくれ竹

土岐いく子

さゝやくは私語ヲ云ウ詞ニ侍レバ上ノ句ニ雫、又ハ露ナドノヨセナクテハ、聞エ侍ラヌカ如シ、

サレバ四五ノ句ヲちよをこめたるやとの呉竹トセマホシ。

（以下次號）

東京盲唖學校を觀る

澤田總重

月の某日、予は小石川指ケ谷町に東京盲唖學校を訪へき。水道橋を渡りて、眞直に行き、植物園の、左側の坂を登れは、白壁清洒の一校舍、綠樹蓊欝の間に聳えたる即是なり。

先づ受付に至りて、名刺を出せば、暫らくありて、「上り給へね」と給仕のいふ。導かれて「第三敎室」といふに至れば、二十四五名の唖生ありて、黑板の前に怜悧らしき一青年たてり。彼は頻に手を動かし、生徒に何事をか敎えつゝありしが、予は、彼もまた、物言ふ能はざる人のひとりたりし事を知りし時は、吃驚せざらんと欲するも能はざりき。彼が態度の、極めて輕快なるところ、少しも常人と異ならず。誰か唖とおもはん。思ふに、彼は本校卒業生にして、本校の助手となれるものなどにやあらん。給仕は、其傍におはせし豐頰疎髯の一紳士をゆびさしていはく、「彼の人は石川先生なり、」と。石川先生とは、予が、兼ねてより、其名を慕ふ石川倉次先生ならん。先生は、わが千葉縣の人にして、千葉師範學校を卒業し、後、專心盲唖の敎育に、身を依ねて、倦み給はず。盲生が常に用ふる点字は、佛國官立訓盲院卒業生ルヰエ、ブレイユ氏の點字より工風して、先生の創作せるところなりとぞ。

次の「第四敎室」は、木雜嵌を、生徒に敎ゆるところなり。彫刻指物敎師靑山武一郎氏、嘗て木雜嵌を以て、唖生に適せる技術たるを知り、之を授け試むること數年なりしに、其進歩大に見るべきものありしかば、取て、技藝科の一課となせりと。文庫、衝立、書棚戸、卓子等の製造品ありて、行儀よく陳列せられたり。地板に天然各色の材片を嵌入して、人物、景色を顯出せる狀、眞に迫り、卒業生片岡貞吉作聖德太子の額面

の如き、純潔の温容、沈着の態度、當時知名の大家の作に比して耻つべきものなきに似たり。作者の名はなかりしも、蘆荻中にたてる、狼の額面、これまた老頸蒼古入神の狀、予は覺えず、月夜身自ら、其聲をきくの感をなせりき。「彫刻指物教室」といふ一室には、最早や卒業生らしき、三箇の啞生、刀を執りて傍目もふらず、極めて熱心に、何物をか彫刻しつゝあるがありけり。

この教室の盡くるところに階段ありて、上りゆけば、こゝには「和服教室」と記し、年のころ十五六許りの二人の女生徒、蝦茶色の袴を穿ちたるが、共に絳紅裏の絹ものを縫ひ居たりき。廊下の兩側なる壁上には、畫と歌とを張付け、歌には、盲生某詠、啞生某書としるしたるもの多し、何とはなけれど、參觀者の注意をは引けり。

二階の左側は、幾間にも區別せられて、一室に二人若しくは、三四人宛の盲生徒、いと物しつかに、琴の稽古をなし居たり。啞生の一擧一動が、手の仕方に依るに比すれど、耳にて、總てを知る盲生の擧動は、極めておとなしき樣に感せられたり。掻き鳴らす琴の音も、聞く人の心なればにや、悲むか如くにて、騷々しからず。「按摩教室」といふがありて、洋服着たりしは教師にや、壇の上に寬座して、十二三許の生徒に腰のあたりをもませつゝ「もつと上」などいふは、何となく打笑まれてしわぶきせられたり。年ころ二十二三の男は卒業生にや、十才には過ぎしとぞおもふ盲生に、肩をもませたる、こはいとあはれなり。次の教室には、杉山撿校の肖像をかゝげ、一箇の盲いたる教師ありて、鍼治の講義をなし居たりしが、生徒は少しの身動きだにせず、頸打傾けて、是を聞く狀、大理石なんどにて作りたるかと疑はるゝ許りなり。年のころは、いづれも十六七より廿才前後にて、點字の書籍を、前に置きて讀むものもありけり。

講堂に隣れるところ、「圖書教室」には一箇の老教師

あり。年たけし、四人の啞生に、各々彩色せる人物畫を課して模寫せしめつゝありき。一生の寫せる元祿時代の姿せる侍女の櫻樹のもとにたてる圖、やうやく半は以上を描きしのみ、未だ其の終りを見ずと雖も、筆力婉麗、しかも雄健の態を失はず。思ふに、彼等は、最早や畫に於て室に入らんとするものなるべし。

階下の「遊嬉體操教室」は、今啞生の一年生、及二年生の教場に用ひられて、丈高き教師と、丈低き教師と一箇の女教師と、これが教授をなし居たりき。生徒の數は七十人許りもあるべし、附添の女なども二箇三たり見え、いと稚くて可愛氣なるもの多し。こゝには習字と書取とを居へ居たり。普通の尋常一年生よりは、文字など麗はしく書くかと見受けられたり。次の教室には生徒二十七八人あり、眼鏡かけし教師、掛け算と、加へ算とを教へ居たりしが、こゝは前の教室の生徒よりも年たけたり。これにて、予は教室の參觀を終れり、教師の態度の、いづれも、極めて落付きて親切なりしは、予の感に堪へざる所なりき。實に、斯の如き教育に就て缺くこと能はざる物は親切といふ二文字なるべし。

中村秋香氏の作「嬉しき御代」といふ歌あり、これらの果敢なき生徒の心情のほどをうたへり。

嬉しき御代

（その一）

うれしき御代や　けふの御代、
むかしの世には　すてられし、
吾かともがらも　ひとなみに、
かぞへられてぞ　世にはたつ。

（その二）

たふとき御代や　けふの御代、
きかぬにもきゝ　みぬに見て、
わがともがらも　ひとなみに、
まなびのにはを　たちならす、

（その三）

ひとなみ〳〵の　みちふみて、

あさなゆふな　たちならす、
まなびのにはの　いやひろき、
世のめぐみこそ　うれしけれ。

放課の時間を以て、予は石川倉次先生に逢へり。先生は予がために參觀の便宜を得せしめしこと多く、且つ、予を教員室に誘ひ、校長小西信八先生に介し、小西先生が、歐州より携ひ來りし蓄音器、速記印刷器等を出して、これが說明をなし給ひしなど、懇情謝するに餘りありといはざるを得ず。小西先生は舊長岡藩士にて、嘗つて、吾が千葉縣中學校、師範學校の教師たりしことあり、明治二十年盲啞學校教諭となり、後校長に任ぜられ、明治二十九年十二月中、米、英、獨、佛に於ける盲啞教育研究の命を受けて留學し、昨三十一年九月を以て歸朝したまひしなりと。

校を辭して門を出づれば緑なる木の間に隠れて、彼の白き壁も今は見えず、琴の音の、幽かに風に送られて聞ゆるのみ。

雨窓剪燈録

安藤正次

風おどろ〳〵しく吹きて、雨さへいたくふりそひたり。マニラわたりより襲ひ來るべしと、豫て傳へられたりし低氣壓の、こゝもとに顯はれたるなるべし。されば、今宵はいとゞ荒れまさりなむと思ふまゝに、窓の戸深く鎖して、孤燈の下、徐に、文机に向ふ。月を言へば、既に、七月の始なれど、今夜の涼しさは、秋にもや似たるべき。常ならではしたなき物に數へられぬべき蚊も、いと力なきさまに名のりいづるなか〳〵にあわれなりや。心もしめりがちなり。いでやおもへる事、見たる事とり集めて、このひとまにかいしるして見むやとぞおもひなりぬる。

近き頃、また女子教育の事、とやかくと、囂しくもてはやさるゝやうになりぬ。其の道さへ宜しきをえたらむには、げに悦ばしき限なるぞかし。まことや、今の

世に、昔ながらの儒教のまゝを教育の道とせむは、少しく、頑きに過ぎたらむ。されど、亦あまりに、社會人情とかけはなれて、西洋流ならむも、時勢を知らぬとの譏は免れ難からむ。總て、かゝる道は、常に進歩といふ事を目ざすべきは、素よりなから、殊に忘るまじきは、時勢と人情とにかなふか否かをみる事なり。會〻机邊に「難波江」といへる書あり、是は松平樂翁公か、十五歳の時、新婚の後、その夫人峯子の懇請に、應じて、婦女子の訓誡たるべき事を鈔録して贈與せられし物なるが、心ともなく開き見もて行く中に、左の一節あり。頗味ふべきなり。

一、男女、相授くるには手を以て授けず、下にれきて授く、若、下にれく事不レ能者は、受るに篚を以てすと、是、古の禮にて候、當時は男女の間かろがろしくうちまじり候を、へだてなき歡樂とおもひ候。如レ斯ときに、手を以て授けじとし、門を出れど、其の面を掩はむなどすれど、則、ならはしにそむくべく候。古の世はしかなり。今の世は、かくの如しと、時の勢を審にして、その宜しきに隨ふこそ、いみじく覺え候へ。

また同書に、愛憎の變を説ける一節あり。女子のみならず、人たる者の心得べき事なりかし。

一、愛憎の變と申ことあり候。我園の花は、野山の花よりまさるやうに思ひ候が、愛憎の變と申し候。是も、人と我と隔てあふ故にて候。そのかみ、彌子瑕は、衞の君に愛せらる、或時、彌子瑕が母疾ありとて、人ゆきて、夜告げしかど、彌子瑕、いつはりて、君の車に乘りて、行しを、衞君かへつて、孝なりとて稱譽す。又、一日、彌子瑕、果を食ひしに、甘しとて食ひかけし果を、君に奉りしかど、衞君、亦、忠なる由を以て稱しぬ。彌子瑕、寵を失ふ時、先、この二ツを以て罪せられしとぞ、愛憎の變、よく〱、慎み思ひはかるべく候。

猶外にも、一つ二つの、おもしろきもありけれど、さ

まではとて錄せず。

書も讀みさして、徒然なるまゝ、かたへの、手箱を探りて、親しき友どちの玉章など、繰りかへしつゝ見る、いつ見てもかはらぬは、魂あへる友の情なる哉。そが中にも、我にはとりわけて、親しき友二人あり。ともに、わりし程交は、同胞のそれよりも、親しく、互に心の隈もなく、打語らひて、聊の隔だにあらざりき。然も、歡會は、常住なることをえず。善を共にし、愛をわかつべき友垣の睦もわかれ〳〵となりて、今は、僅に、筆の便に、心をやるのみ、一人は、滿腔の氣慨を抱きながら事意の如くならず、早く去りて、南國の天にあり。今年初夏、彼は新人を迎へたりといひおこせたれど、新人の慰藉は、果して、その不平鬱悒の氣を和らぐるに足るべきか、去月以來しばらく、その近況を知らず。われ、之をおもふ事切なり。一人は天才ある詩人にして、而も、其の運命數奇東都に志を得ず。今春往きて、信州の山中に隱れぬ。彼の歐陽修が梅聖兪の詩集に序して、然則非詩之能窮人殆窮者而後工也といへるをおもへば慰む方もあれど、また友として、その不遇を悲しまざる能はず。さはいへ、此の二人の者どもに兄弟あり、また、或は双親堂に坐し、或は、母は逝きたれども、猶、父の健在しますあり。たとひ、身は志の如くならずとも、其の樂、また雍々たるものあらむ。然るにわれは、然らず。早く、怙恃を失ひ、一片の孤身、江湖に流寓するもの、嗚呼、友の不平を憐れみ、友の不遇を悲しむものまた、飜りて、他に憐れまれ、他に悲しまるゝ者たらざるを得べきか。

信州に行ける友の、行路の景を叙して、われに寄せたりし書は、素より不用意なる筆なるものから、さすがに日頃の筆路は、しるく、頗、面白きものあり。一節を記さむに、

出立の際は、早晨わざ〳〵、御見送下されたる有がたさは、拜謝すべき辭もなく候。途上は、在京中

の、比翼の交を追想し、今、花を辭して雁かねと共に、あらぬ鄙路にむかふ事のあさましさを感じて、獨車中に泣きぬべく覺え申候。御別申して、上野に至りしに滊笛は、既に乘客を促しつゝありき。幸にして、われも、その右往左往にまじり、六時、上野を發し申候。王子、赤羽などの、花の堤が一刻々々に遠ざかりゆくにつけても、我ながら心細さのえもいはぬやうに覺え申候。鴻巣に到り候處、早田畑の開けたる彼方には、脈々たる遠山の横はりそめたるあるに、武藏野も、これや限ならむと覺束なし。新町に至れば、早面白きもの山の頂にあり。櫻かとおもへばあらざりけり。聞けば、げにこゝは、既に、上野の地に入れるなりとぞ。倉ケ野の梅の盛りなるを見て、いよ／＼、別乾坤に來れる心地致候。高崎にて、乘換へて、直江津行のに投ず、西北に、高きは榛名山なりとぞ。雪益白し。西に重疊せるは所謂碓氷峠なり。滊車の傾斜、漸く高きは、既に山を上りつゝ、且、潜るなりけり。入りつ出でつ、夜となり、晝となり。明暗、殆、さためなき事十數回にして、輕井澤の信濃の地なりと聞くも、あふさきるさの心ときめきす。御代田、小諸、田中を過ぎて、午後二時には、既に、信州の土を踏みて、をかしき土音の車夫と、言を交へつゝあるなりけり。さらでも寒き心の車上に、霰さへたばしりたるには、村夫子の顏色粟を以て滿されたるなるべし。四里を走らせて、四時半青木村といふへ着申候。(中略)

翌七日青木を發す。保福寺峠、刈谷原峠を越えて、松本までは、七里ばかりあるべし。生が、最なやみたるは、こゝに候。雪は、左右に白く、泥濘は、脚底に深く、霧は咫尺に近し。そこを一人の人足を伴ひつゝ喘ぎゆく人ありと、想像し給へかし。峠を下りて、漸く車を傭ひ、人足も車夫なりしを幸に、綱を付けさせて、松本の丸茂といふに着きしは四時

半なりき。(下略)

なつかしき友の筆の跡ばかり、幾度くりかへしてもあかぬものはあらじ。

かくおもひつゞくる程、雨は、いよ〳〵ふりしきりて、ものさびしきに、顧れど、瞬げる青燈の下、孤影の獨消然たるいとゞ、沈思のくさはひとなりぬ。

文反古（寄稿）

白松園主人

月夜懐古

尾花が袖、鳴野の虫、瀟灑たる秋の色を増すのみかは、かの月にこそ、わがこの年頃の哀は、いみじう深うなりまさるなれ。嗚呼荘周が胡蝶にはあらで、現にして夢なるかな、今は五とせの昔となりぬ。彼の長安一片の月かげ、さやけく澄みて、颯々たる松籟は、妹子が急ぐらむ擣衣のおとに、たぐひぬるゆふべ、兄と相携へて、月下に語り明しゝは、そも戸山の原なりけむ。

白露瀼々として、古郷しのぶ涙の數を添へ、孤雁西天になきて、野鶴に漏れぬ帚木の思を傳ふ。運命迍邅して、前途悠々たり。仰いで中天を望むに、父やもいづこ、月はむかしの月なれども、共に眺めし影を止めず。慈母をおいて、遙に遠郷の客となれども、天鑑、我に溥うして、屢々學びのたづきを失ふ。時なるかな、命なるかな。されど繰りかへすとも甲斐なきものを、努めよ弟や、蠖尺の屈するは、やがて延びんがためなるぞかし。彼の浮雲を吹きそけて、心のうさを慰むる、ものこそあれと取り出づる、笛竹ならで悲茄數聲、秋草寂寞として、誰聞くらむともおぼえぬ、眞萩咲く野に、一聲高く、音を泣きぬるは、借問すること勿れ、山郭公の音にはあらじを。たとひ沙羅雙樹の花の色は、盛者必衰の理を現はすとも、衰へたる者も、いかでかは起らざらむとは、仇野の露、はかなき頼みなりけり。あはれ兄は、二豎のために襲はれぬ。嶺吹く嵐は物かは、膚撓まず、目まじろかず、いかならむ鬼神

なりとも、稲葉のそよとも思はざりし身も、病には勝ち得ざりき。今は我身よ、羈禽幽谷に啼けども、山彦の外には吊する者なく、孤猿三峡に叫べども、月ならでは、哀むものなきが如し。父におくれ、兄にすてられ、只、茫として、萍の淪漪に漂ふが如く、夢と現の界を經て、光陰、徒に荏苒し、ことしの夏もくれ竹の、葉末そよふく秋風に、ちゝよ／＼と簑虫の、なく音も悲し、ゆふまぐれ、さびしくも散る桐の葉に、積るうさをも數へ出でゝ、九つの腸、悉く斷れ、破戸漏りくる月影は、徘徊して、心を痛ましむ。鐘聲、遠く聞ゆるとき、孤燈のもとに、紀念の書を繙くとき、按摩が吹きなす怪しの笛も、世にあぢきなき心地ぞするや。

（三十年紅葉散る頃）

長門櫻山の廢寺

四方の山邊の、うら／＼と霞みわたれる頃、わらべ等、三人四人をさきに立てゝ、櫻山へとのぼりぬ、頃は卯月の半なれども、谷間の風の身にしみて、すゞろさむき心地のするは、木ぶか山のかげなればにや。からうたなどくちずさびて、つゞらをりなる鳥路熊徑をたどる／＼行くほどに、汗さへ出できて、岩まの清水むすぶもあり。をちこちに、鶯のなのりたるものどけく、野守にはあらで、山がつの、枯草やくもをかし。すでに半腹にもなりぬれど、足もと遠く目くるめきて、麓の方をうち見やるべうもればえず、わらべは山路になれたれば、いととくのぼりはて、處々につき出でたる巖の上にあがりて、小手かざしなど戯れたるさま、なか／＼に、疲れたりとも見えず。後れてのぼるれのれを招きて、早くきませ、み寺に案内せんといふも、はこらしげなり。やう／＼に登りつきて、吻と息をつぎつゝ、わらべをしるべに、南原寺といふ寺に至りて見るに、藁葺なる小寺にて、壁は落ちて、骨をあらはし、柱は虫ぞみのあとに埋れたり。池もあれど、水は涸れて、草高く生ひ、いつの世にか結びけん、竹のまがきはよろぼひ伏しぬ。あさましうも荒れたるさまか

な。かくても住持の僧はあるらむ、おとなひて湯を乞はゞやと、入らむとしつゝ、仰いで、扁額を見るに、櫻山と題したり。袈裟僧衣など垢じみたるが、佛前に脱ぎ散して、おほかた物もとゝのはず、すさまじげなるが中にも、如來尊のみは、獨り光明赫奕たり。物申すくと呼べども寂としていらへなし。さては里へや下りけむと、堂をれりて、左手の方に至り見るに、少し登りて、觀音堂あり、之れも、頽破年を經たりとおぼしく、狐狸の糞、簀子にうづたかく、棟は風雨に吹き剝がされて、佛体は雨にさらされたり。之れをば女禁堂といふとぞ、そこにもいと心ぎたなき名なりかし。少下りざまにゆけば、廣やかにて、山櫻を兩側に植ゑ並べたり。今を盛りと咲き亂れたるさま、得もいはぬながめにて、散る花、咲く花、とりぐにをかしくて、遠く望めば、白雲のかゝるかとも見えぬべく、近く見れば雪にもまがひぬべし。古歌に

櫻さく櫻の山のさくら花
ちる櫻あればさく櫻あり

とあるは、まさに、此の山の歌としつべし。花のもとをかいくゞりて、向ひへ出づれば、朱塗の二王門あり。やをら歩み出でゝ、かたばかり殘りたる、崖の上なる石の玉垣のもとより、はるぐと見渡せば、崗巒の波濤を眼下に見て、蒼海漫々たる豐浦の海、われかとばかりおぼろに見ゆ。春霞たなびきたれば、白帆の、風を孕んで往來するさまも、釣舟の岸にかゝれる影も、定かならねど、いとくちをしきや。眺めは盡させねども、今はとて下山するに、さすがに櫻の花のみ見かへられてのこりをし。こたびは道をかへて下るに、かたへに、ひとむらの小松が森ありて、中より老松ひとつ高やかに聳えたり。わらべ等指さして、かしこには花山院のおん墓ありといふ。何をいふにかと行きて見るに、亂石を小山の如く盛りたる上に、むかし床しき石の玉垣めぐらして、苔むせる五輪の塔あり老松は、その背に生ひたるなり、こはしるしに植ゑたるなるべ

し。その左右に小さき石塔五基並びたり。わらべら語りけらく、昔し花山院位を逃れ給ひしより、此の地にさすらひ給ひて、かんさり給へるなり、側なるはその侍臣の墓とぞ、云ひ傳へ侍る。されど此の麓なる村人は、此の人々のみ末にて、今、悉く藥をなりわひとするも、恐きや。雲の上なる宮人なれど、別にせんわざをも知らざるによるなりけり。かゝりければ、多く他の村と交らはず、彼の五家村めきたるを、世の人の思ひ賤めぬるは、なか〳〵なるあやまりにこそとなむ、古老の口碑に殘り侍ると、いとさかしらだちていひけり。何によりてかくは附會しけん、その故を知らずといへども、故ありげなる古墳なりけり、已に見終りて下るに、かへさはすべて、翼をつけて飛ぶが如し。



花がたま

雨後の漫歩

井上賴文
露月

茅が軒端も朽ちなむばかりふりとふりにし五月雨も、辛うじてけふは、をやみにけり。日頃のうさやらむとて、慣へる野路に、歩を運びつ。

田中の、このも、かのもすだく蛙の聲うちしきるは、増しにける水かさを喜べるにや。道のべに立てる柳よ廣ごりたるにくしといはれたるは、さるものから流石に、雨の名殘、いちじろく枝ごとに、玉を飾れるもめでたしや。苗代小田のさかりは、御代の姿をうつせるなめり。いとも繁き白露には、たはむ惠の程も見えけり、早苗とりとり、雨間を急ぐ賤の男賤の女、手肱にみなわかき垂り、向股に、泥かきよすらむも賴もしからでやは。

このわたりの景色、すべて、世に似るべうもあらず。

我も、さながら、一幅の畫圖中の人と成り了れる心地して、彼方此方たちさまよふ程に、山寺の鐘のこゑ、今日も暮れぬと告げ渡りぬ。驚かされしは我のみならで、牛率きて歸るもの、鍬荷ひて急ぐもの、かたみに笑ひさゞめく聲の中にも、豐なる御代のしるしぞ顯れたる。曇りがちに過ぐしにける心も、今は慰みて、雲爲はるかに、そこはかとなく、郭公の名のりたるもうれし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

問情子　　　濱　荻

うすやうに包みたる螢空しく、文机に投げやられて、ランプと云ふものはありげなれど、それもともさで、いとほの暗し。

床の柱によりかゝりて、手うちこまぬきたるまゝ、身うごきせぬ、若者あり。夕くれのほどより、隣の高殿に例の女の、らうたげなるさゝめき聞えて、かなづる玉琴、ことにゆかしげなるに、玉すだれの奥かけて思ひやるなるべし。

更けゆくまゝにひきさしぬ。峯の松風、いとゞ待たるれど、今はせんなし。つゝみたる螢、手に取りて、小君ははや。寢ねたるにや。來など、與へて問はましものを。など、うちつぶやきて、なほ見やるけはひなり。

小君とは、ゆかしき人の弟なりけり。

あはれ、孟母、三遷のいましめさへあるを、今の、文讀む若者よ。吾から、わざと、さる宿りもとめ出で、隣の花を手折らんとすること、けしかるわざかな。昔は、書を照らしゝ光、今は戀の闇路を照らさんとす。螢に聲なし、車胤、苔の下にや泣きなん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

野川のあそび　　　竹　亭

菅のを笠うちつらねて、田草とりたる田子も、晝食したゝめむとて歸りや行きけむ。ふしをかしき田歌の聲も、しばしとだえて、蛙、ひとり、わがもの顏に鳴きしきる、眞晝頃、暑さも知らで、あたりの野川に、

魚追ひまはすは、顔黒き里の童なりけり。脛もあらはに、裾高くまくりあげて、手に小桶もちたる童「それ、そこの藻にかくれたるぞ。大なる鮒よ鮒よ」と噪ぎつゝ、水跳ね飛して、かけ出せば、今一人の童「噪ぐな〳〵」と小聲に制しつゝ、やをら覘ひよりて、笊さし入れむとすれば黒きもの、つとかけ出でゝ、彼方の藻に隠れぬ。「あ、逃げたり」と叫びつゝ、又、静に、覘ひよりぬ、今度こそはと云ひ顔に、静にすくひあげたる笊の中、かの鮒は、いかにして、ぬけ出でにけむ。躍るは目高の、二つ三つのみ。童は、いと本意なげに、水の面を眺めて立てり。小桶もちて、静に後に控へたる童は、いとくやしげに「今一度、その抗のあたりをすくへ我も追はむ」と、立ち噪ぐにさらばとて、一人は笊さし入れて身構へすれば、一人は、彼方此方追ひまはる。やがて「それ、よし、あげよ」と力を合せて、引きあぐれば、大なる鮒は、はた〳〵と音してはね躍る。童は鯛をもすくひたらむ心地やすらむ。いとうれしげに「はやく桶もてこよ、それ、跳ね、出づるぞ。はやく〳〵」とのゝしりつゝ喜び勇む。折柄、堤の上に「太郎吉よ次郎吉よ、この暑さに、何して遊べる」と呼び立つる賤の女は、其の母なるべし。童は、たゞゑましげに「これ見よ、この鮒」と、手につかみて、高くさゝぐるさま、いとしたり顔なりや。「またいたづら事して衣ぬらすな、けがするなよ、晝食も、みなすましたるに、はや歸れよ」とたしなめられて「いざ歸らむ。歸りて、早くぢゝに見せむ。來れ〳〵」と、うちつれだちて危き畦道とび、傳ひて、はせゆく。いとたのしげなりや。あはれ、徒に爲す事もなく、得る事もなくて、あたら月日をすごす身は、今更に、この里の童の、いとうらやましくて。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

郷先生　醒庵

書燈影暗くして、蛙聲、遠近に聞ゆる時、遙に蛙聲に和して、咿唔朗々の聲を聞く。耳を欹てゝ、之を諦聽

すれど、正に然り。古靑先生、燭を剪りて、兒童を敎訓せらるゝなりけり。

想ふ。曾て、余が先生に師事せし時、先生甞は、乃、書城を背にし、硯池を右に、草稿を左に、醇々として、經義を講ぜられしを。而して夜は、乃、抔盤を前にし、兒童を、左右に侍せしめ、手に、一卷の史書を握りて、且飮み、且談じ、往々深更に及ぶことありしを。

嗚呼、これ、余が、十餘年前の景況なり。爾來、音問絶たるにあらず。然れども、余が性の駑駘なる、學進むことを加へず。識固より陋なり。然も、尙、且、先生に棄てられざるを幸とす。先生、日夜、孜々として諸生を敎化すること至れり盡せり。先生、假令、余等に望を屬する處あらざるも、余等、安んぞ、先生の知遇に報ゆる處なくして可ならんや。退きて思ふ。門下諸生、其の數幾何ぞ。然も、未、一人の、世に聞ゆるものなし。先生、多年の敎訓は、竟に、それ、空しく、靑山白水の間に埋沒し去らんとするか。

既にして、又以爲らく、先生人を敎訓するは、道を傳へ、業を授けんが爲のみ。豈、又、人の高卑に關して、念慮を勞することをなさんや。今や、先生の門下生は、四方に散在して、各、其の業に從へり。然らば、則、先生、身は、一室に坐するも、其の、鼓吹したる學問は、原動力となりて、廣く、世間に運動せりと謂ふべし。誰か、又、先生が、世の所謂名高の爲に、斯學に從事すと爲すものあらんや。

先生は、道を傳へ、斯學を盛ならしむるを以ちて、其の志と爲すものなり。先生の志を高く仰がしめ、先生の業を、廣く慕はしめんと欲するは、門下諸生の志なり。而して、先生は、其の廣からんを欲し、諸生は、其の高からんを欲す。廣くせんと欲するは、先生の志なり。高くせんと欲するは諸生の志なり。先生、其の志を盡すも、諸生、未、其の任を全くする能はず。

一圃の桑園、之を廻れど、先生の庭に達す。先生、世

の榮辱を避けて、書燈、耿々、閑かに、古人の語を、兒童の口に聞き、又、蛙聲の囂々たるに關する處なきもの丶如し。余や、之に對して、愈益慚色あるなり。

（六月十一日、梅雨窓下に諸同人と會して、端なく、昨夜の情景を思ひ出せしまゝ。）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

田植　　銀杏

點滴の音は、はや耳なれて、田面にさわぐ蛙のみかしまし。折柄、賑はしき聲するさへあるに、やがて、高く低くふし面白き歌の聞ゆるに耳かたぶけられぬ。

降る雨に、うち霞みて、ゑがきたらむ樣なる柳の木の本に、三々五々菅の小笠の、ほの見ゆるは、かの鄙歌の宿りなるべし。をり〳〵、勇ましげなる言の葉のもれくるは、去年をとゝしの戰にかゝはれる歌にや。なは耳すます程に

なはしろの水はますとも……ふる雨をなにかいとはむ…秋のみのりの少きは……國の寶の足らぬなり。

などいふ心の、たとらるゝぞゆかしき。

あゝ、かの、菅の小笠の少女よ。かく、勇ましくいでたち、かく、樂しく謠ひつゝ倦ます、撓まず、なは、暑さをいとはず、寒きにたへ、星を戴きて出で、月をふみて歸り、しかも、怨言なきは何にかよる。美衣美食を望むにあらず。收獲を樂みてなり。

これを思ひ、彼をおもへば、劍と銃とをこそ持たね、その業につくす功は、益荒男に異ならざるなるべし。その紺木綿のよそほひ、赤き青き襷かいぐ〳〵しく、菅の小笠うちかふりたる姿は、やさしくとも、勇ましく愛らしき聲うちそろへ歌ふ鄙歌は、戰にのぞまぞ、やがて軍歌ともなりなむを。

あはれ、今日、植ゑそめにいでたちの改りたるは、徒に、身をかざるにはあらざらむ。樂しげなる歌は、徒に、收獲の利をおもふのみにはあらざるべし。

＊　＊　＊　＊　＊

そゞろありき　　さゝのや

螢がりすとて、童、四人五人窓の戸近く騒ぐ。前栽の木の下陰よりはとて、我も、そこはかとなくたちいでぬ。たどるは何處、野邊の細道、早苗の露の、いと深きに、遠近にたち上る、蚊遣の烟の、空に、細くたち上りたるいはむ方なし。紅塵萬丈の巷をよそにして、獨、涼風を友とし、蚊遣の烟に心をまかするも、ことさらになむ。蟻の如く、東西にさまよひ、徒に、營利にまよふは何ぞ。都人は、眩き黄金白金の、光をのみうらやみて、見るもの、きくものにつけすがゝしからぬはなき、自然の樂を享くることをも知らでやわるらむなど、おもひつゝさまよふ程、夜もふけにけむ。童の聲もきこえずなりぬ。今はとて歸れば、文机のほとりに、獨、我まちがほに光を放てるは、これぞ、よべ家苞にせし螢なりける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

蚊遣のひま

路山
洲鳥

木に竹をともいはまほしきふしのみながら、夏の夕ぐれ、二人、親しくまとゐして、蚊遣のひまにつくりいでたる事の、さすがに忘れがたければ、さもあらばあれ。後のおもひでともなさばや。

たち迷ふ蚊遣の隙に涼しくも　路
風こそ月を誘ひ來にけれ　洲
早乙女がひきし赤裳のかけたれて　洲
苗代小田に夕日さすなり　路
河波に幾重の綾を織らせつゝ　洲
拔手をきりて泳ぐうなゐ等　路
さらし身は闇に見えねといもうとを　路
よぶ聲著し螢居たりと　洲
童の闇に語らふ聲すなり　路
螢となりて我もきかむや　洲
伏庵にこがふ少女よ言問はむ　路
はての錦は誰がおすひかね　洲
かきさして物思ふはしにゆふ風の　洲
軒のしのぶをそよと音なふ　路

ふく風に露の玉をもちらしつゝ　路
柳にゆらく月ぞ涼しき　洲

をやみなきこの五月雨にゆかしくも　洲
玉の小琴を誰かかなづる　路

病める人のわびしきものをけうとくも　路
軒をかすめてかはほりのとぶ　洲

せの爲に酒勸めつゝ賤の女は　路
端近くいでゝ蚊遣たくなり　洲

わが通ふ山路に百合のはなさきぬ　洲
ほのみし春は夢の間にして　路

二孝女（續）

井上頼文

また、深川富川町に、柏屋某といふ者あり。かみな月の二日は、母が年忌の逮夜なれど、親族を招ぎ、非時の設してけり。客人は、みな還りたる跡に、傍ちかき、大工の娘にて、二十歳ばかりなるが、助手に來りしのみぞ一人殘りけるをりしも、にはかの地震にて、柏屋の軒やぶれ落ちて、すさまじき音す。あはやとたち騒ぐ間に、やがてゆりやみぬ。かの娘は、我家を案じ、御暇申すといひ捨てゝ、飛ぶが如くに馳て行く、柏屋は、ひとりは、あぶなし送らんと、娘があとを追かけて、外にいづるをりしもあれ。ふたゝび、大地震動し、家屋も倉庫も、左右より、將基倒にくつがへる。此の狀況におどろきて、ひた走に、走來れど、道路の上に、兩側より、覆ひかゝれる屋根の下にて、助けて、給とよぶ聲す。彼娘にはあらざるかと、つみ重りたる戶板などおしのけつゝ、聲をしるべに尋ぬれば、慘然や、娘は破落ちたる軒に壓れ、身動さへもなり難く、只聲たつるばかりなり。柏屋は、かくと見て、もろ肌おしぬぎ、引起さんと、桁に手を掛け、汗もしとゞにあせれども、いかでか、力に及ぶべき。あたりに人は見ゆれども、親は子を見うしなひ、妻は夫を索ねて立ちさわぎ、他人を救はんとする遑あらず。かゝ

る程に、猛火、忽ち傍より燃上り、黒烟うづまきたち、眼も眩み、息咽び、立もえやられず、をりから、遠近の倒屋の内より、壓れたる人々の泣き叫ぶ聲耳をつらぬき、さながら、叫喚焦熱の冥苦も、かくやと思はれたり。娘も、今は是までとや思ひけん。柏屋が援ひいださんと、ひしめくを、停めていふやう。なまじひに、わらはを助けたまはんとて、御身も共に燒死たまはゞ、いよ／＼わらはが罪ふかゝりなむ。もはや、此の身は爲ん方なし。たゞ／＼老いたる父母が、外に憑まん子とてあらねど、わらはが、今こゝにて、燒死なば、誰を頼りて世を渡らん。あはれねがはくは、御自御夫婦わらはになり代りて、老い衰ふる父母が行末見とゞけて給べ、これのみぞ、いまはのきはの願に侍る。外には、思遺す事、露はべらず。また、こはわらはが遺物なれば、父母に屆けて給べと、頭に挿したる櫛と、笄とを板取て附しければ、柏屋は、兎角もなく、兩親のことは、おもひ煩ひたまふな、我等夫婦が一命のあらん限は、かならず助け參らすべし。不自由はさせまじ、心やすく思はれよと云ふ間もあらせず、猛火の焔もえたてば、せんかたなく、なく／＼振捨て、我家の方に歸りきたれば、いつか、我家も燒野となりぬ。柏屋は力なく、大工の家に來て見れば、孝女がまとや通じけん。神やあはれとおぼしけん。いとさゝやかなるあばら屋なれど、強き地震に破れもせず、類燒もせでまぬかれたり。柏屋はなく／＼、娘が遺言をのべ、彼かたみの櫛笄をわたしけれど、老夫婦は、狂氣のごとく、たゞちに、燒場へ馳附き見れば、娘が屍は焦けくすぶり、ありし姿はかはれども、身を燒く苦痛に堪へかねて、面を土に衝入れしかば、面のみはわづかに燒け殘りて、生けるがごとくぞ見えにける。老夫婦は、あまりの悲さに聲さへたて得ず、右左より走寄り、娘が屍に抱きつき、むせかへりてぞなげきけるとなん。今も聞くだに、いと胸いたき物語にぞありける。あはれ、身を燒く、いまはにも、父母の行末おも

ひやる。娘が深き孝心は、日頃のおこなひさへ、さこそどおしはかられて、いと〳〵かなしくなん（終）

才くらべ

蓬生屋女史

筑後の國三池郡飯田村、字を朝日谷といふ所に、百姓惣助と云ふものありけるが、家いと貧しく、年々の調賦をさへ治め難きに、家宅、其の他の家財をうり拂ひ、やう〳〵さびしき年を送るほどに、いつしか、惣助病にかゝりて、藥蕩効なく、遂によみぢの人となりたり。あとには、なほ六十餘歳の老母あり。七歳をかしらに四人の子さへあり。殘るものは、たゞ手足にからむもののみにて、誰れ一人糊口の助をなすものもなく、借財こそはあれ、米一つぶさへ、昨日のものはなき程なれど、親子は、たゞ餓えと血とになくのみせんすべも知



らぬを、妻女たきなるもの、孝貞のものにて、朝夕にさし迫る中にも、藥餌介抱怠らざりしが、そのおとを

も、ねもごろにとぶらひ、親子をもはぐくまんものと心身をくだけど、人にも鬼あらず、近隣のもの、之をあはれみ、まづ雨露を凌ぐばかりの小屋を建て、之に住まはせしに、たき女は、いたく志をはげまし、生魚をひさぎて、たづきとなさんと、晝夜を分たず、險を越え、岨を渡り、路のりをこゆる七里ばかりなる肥後の長洲の海濱に至り、その生魚をもとめ、擔へ歸りて近邊の村々にあきなひて、僅に親子をやしなへり。その朝日谷にかゝる處、一里ばかりの所は、山、又山のかさなりし深山にて、おどろかるかやのみしげりあひて、晝もなほ往來する人まれなるを、たき女は一心、夜中もつねに獨行せしが、ある時、山賊出で來りて、その荷物を奪はんとしたり。これ奪はれては、親子が露の命にかゝはる大事、されど、爭はんには、先は大の男、此方は、かよはき婦人、たゞ必死の聲を擧げて、惣どん、〳〵、早く馳せ來てくれ、盜人ぞ、五郎作さんもよと、あらぬ伴を、大聲あげて、しきりに呼び立てしに、山賊は、これに欺かれて逃げ去りしと云ふ。度きやうあるものは、一毛の間にかゝる智を呼びおこしぬ、これは此の程の事なり。我が知る人の娘、姉妹つれだちて、ある夜牛込邊のさびしき裏路を通行する際、一人の壯士風の書生來りて、姉娘をぞ、何處にか伴れ行かんとせり。妹はおどろきて、母につげんとてや、走りて家に志しぬ。姉は何も云はず、それもおのゝきもせず、引かるゝまゝ行く程に、彼方より、一人の女房らしき人來りたるを見るより、知る人のさまして、なれ〳〵しく物云ひかけしに、先なる女も、夜中にてくらけれど、たれかはしらねど、伯母と呼ぶは誰ならんと、すかし見て何事か云ひかはさんとするまに、此のものは知人とや思ひけん、おそれて、少女が袖をふりはなちて、走り去りしとなん。君子は、あやふきに近かずとて、女子の夜行など、なるべくはせぬをよしとすれど、之は、また度量も、頓智も供はりたる少女にこそ。

禽獸の言行

田端の隱居

己が行爲を省れど、翁も走る屍、行く肉、耻しき身ながら、人を笑ふ、烏のたぐひか知らねど、井中にすみし蛙の、世の海のはしばかりを見ても、たゞ、おどろきあきるゝ心にまかせて、人は田端の蛙と笑はゞ笑へ、かきつゞくるも後車のいましめになんありける、

熊は、をかしき動物なり。其の性、肉を好むものから、濱邊などに出で、鮭鱒の類を數多とりて、之を、竿に通して、意氣揚々として、己が住家に持ち行く、されど、熊は、其性として、後をかへりみぬものなり。故に竿の先次第にたれて、鮭の落つるも心付かず、幸にして、一尾にてもあますときは、よろこびて食し、あるかぎり、落せし折りは、大に怒り猛りて、近隣の樹木となく、家屋となく、怒力もて、引きぬき、うちをり、暴れにあれ、狂に狂ふこそ。人にも、さやうの者あり。己が用意の足らはずして、失敗せしを、なほ省ずして、人となく、物となく、八つあたりにあたりちらすものあり。これ熊の類なり。むかし、ある華族の殿、短慮の性にて、己が心に任せざる時は、近侍となく、老臣となく、怒りのまゝにして、忽ちに免じ。忽ちに罪を得せしめたり。ある時、鷹狩りに出で玉ひけるが、かれひまゐりしに、其の乾飯ぢやり〳〵とおとして、氣早の殿は、前後も省ず。まかなひを呼べ、無禮なり。此の飯は、如何にして調せしものぞ。かやうの小砂利入りたるものを、我に食はすは、無禮なり。速かに呼び出せ。手打にせんと、はや、刀の鐺をしくつろげ、あらゝかにかまへらるれば、すは、又や事こそ起りつれと、人々は青き顔しながら、早く命を傳へすれど、我れもあやふしとばかり、おぢつゝ、やがて調せしものを呼び立つれば、其の者は、御前にひざまづき、あらゝかに下し王ふ命の下に、はるかに首をあげ、かしこけれど、これは殿の御意ともぞんじ侍らず。

拙者事、心に心を入れて調じ奉り、殊に毒見、加減見も致せし上にさし上げし御かれひ、さやうの義は、毛頭なきはずと云はせもあへず、殿は、ます／＼怒られて、重ね／＼の無禮、己今は用捨ならずと云ふや、刀は、はやくさやをはなれたり、調せし者は、なほれそれず。御怒りはさる事ながら、殿は、御狩り遊ばされしまゝ、御口を注ぎ玉はで、御かれい參らし玉ひたれば、御口に砂利の入りおりて、さやうに味はれ玉ふにやあらん。もし御口を注ぎ玉へる御後に、さやうの無禮候はゞ、拙が命はもとより、君に献せしものなりば、かしらなりとうちわり玉ひて、御心をはらし玉へとあるに、流石、殿の耳にも聞えたりけん。まかないが言葉のまに／＼口を注ぎて食べしに、はたして、砂利はなかりしとなり、これ熊に似たる人か、熊の此等の人に通へるにか、何はとも、思慮あさきものなり。かやうの者は、人の死まぬ、信切ぶりなどに、よくたむからるゝものなり。

張合（八）

白魚女史

くれ竹のまだ世なれぬ文代も、思ひ立ちし心の一すじに、自、繪畫の師を訪ひ、弟子にならまほしきよしを流石におもはゆさに、鶯の、ひなのなく音ぞかりに乞ひぬ。師は、尤磊落の性、文代が父とは飾らぬどち殊に、へぼのあひ碁、互ひにまけじとの心さへあひてかたみに知らず夜をあかし、文代に酒を買はせ、糟糠をかきまはさせし事もしは／＼ありき。それ業の事は忘れたりや、忘れずや、むかしの事も云はねど、今のもかたらず。繪を習ひたしとなん、繪は美術の一種、美術は、はらくだしの術、財布もおはらを下して大方はから、あるときは米櫃もからになり、醬油されゝばぬかみそも汁のみとなる。そこで、妻も子も餓ゑて、ビー／＼となく、故に美術とは云ふ。それさへ承知なら、筆墨をもちて、いつよりにてもこよと、誰れに



も云ふ同じ言葉、文代は思はず、はゝ笑み、何どぞとて、歸りて、早速箋紙をとゝのへ、寺入りせしに、かざらぬものは、いつまで共にをるも、變る事なし。男も女も、親も疎も、長も幼も差別せず。殊に我も人もの別をせし事一日もなく、己つかれたりと思へば、ぬかみそを切らせて、一つ鉢に盛りて、弟子等と共に食べ、しぶ茶を共にのみ、人より菓子の折りにてももらふ折には、すぐさま蓋をとりてこれも弟子等と食す、客人にもつまゝす。つまゝざれど、敢へてすゝめず。金子が手に入れど、誰にても欲しきものはつかへよとて、座敷になげ出しおく。かゝれば、弟子等も師を見る事親の如く、團欒して殆ど、一家の如く、兄弟のやうなり文代も、いつか師の心のそまりて、磊落になるまゝ、うき世のうきも忘るゝふし多く、片糸のくるしき思も、くりかへす事少になるに從ひて、れのづから美術のおもしろく、はじめは、心にも、身にもそまざりし空とぶ鳥、地に咲く花、いつか心よりわこがれ出でゝ、思ひならひし、戀しの人も思ふ事、たび〳〵に、夢に現に見えし父の面影に變ふるに、今日は鶯の初音、まだ雪消えぬくれ竹の、まど近く、ふとおどろけど夢、夢に見えしまゝを直ぐに紙にうつす、窓の外にいつか、誠のうぐひすうちとけぬ聲、いとめづらし。師はいと早起きなり。とく起き、庭をまはり、とく起きたる、弟子の室に、まづ入りて、そのものせる畫を見るをつねとす。文代の、また朝ねを好まず。されば大方、師はまづ文代の室に入るが、例ならぬ例となれり。今日もまたうしろに立たせ給へり。早いな、〳〵文代、早速初音がおもしろいな、筆ぶりもめづらしいぞと、文代はめられしは、今日がはじめて、文代はめづらしき聲を、二つ聞きぬ。うれしき思ひになほ一心こむれば、我ながら、技術のすゝみたる目に立ちて、いよ〳〵おもしろく、明日はとくおきて、あれを、これをなど思ふ思ひに、夜もねむられず。やう〳〵しらみたる空に、あけがらすの、ねぐらはなるゝさま、さ

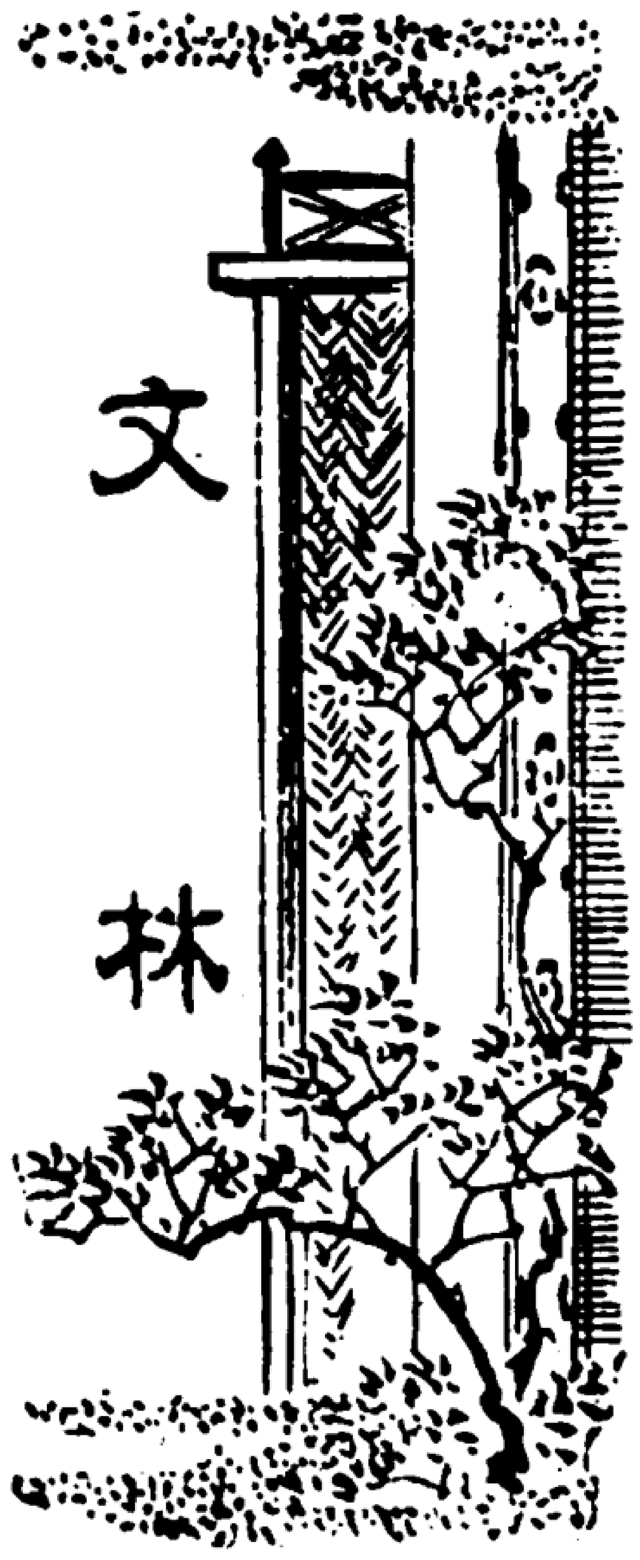
えさゆる筆にうつせば、實にいき〳〵、己には飛びも出でんばかり見ゆるを、いけぬ、いけぬ、末いけぬとうしろに師の聲、聲よりもいつもながら早きに、文代おどろきたり。

先生は窓に輕く腰を下ろし。文代よ。此のごろに四五十の金子手に入れば、旅行費ばかりには足りなんと思へば、やがて、支那に渡りて、唐人の筆ぶりを、親しく見てこんと思へば、そちも、共に行きて、しばしの間、ぬかみそをかきまはしくれずやとは、日來云はねば、數多の弟子中にめざされ、且つは、父が生前のしたしみを、それとなく云ひしにもあらん。

ぬかみそかきまはしくれずやとの言、文代が耳には、いたくひゞき、思はずむかしを思ひ出で、ほろりと一雫、答へよりも先き立ちぬ。

結ばんとしても、結び難きは、片糸のあなた、此方の思ひ、白川元雄、我子に、嫁にとて迎へ迎へし、文代も、其の子も、一度は辭めど、文代も辭み、つひに結ばれぬ中となりぬ。なにしは、生前よりの約束事と、思ひそめたる方との神の結びならめとて、やう〳〵、浪男が云ひける友の妹を尋ぬれば、もはや、他にとつぎたるよし、浪男が思ひそめし同じ思ひの、その人と思ひし人は、子に迷ふ親心、これを聞きて、また、五十に足らはぬ腰の折れたるげなれば、浪男も、力失せたり。さては、人、全く、我思ひをさとらざりしか、否々云はずとも、深き思ひは、何となくあらはるゝもの、我が底なき思もくまれたればこそ、人の底いなげなる心もくまれたるなり。否、彼れは、我くみし思の違ひしにか、はた、違はざるも、一時の思にて忘れしものか、忘れざるも、他にまさる人のありたるにや。はた、また、やむすべなき事のありてか、如何にしてぞ、彼れが面に、容子にあらはれし思、たやすくはかへぬげなりしをと思へば、今一度あひて、その様子うかゞひも知らまく、あはれ、ますらを、片戀せじと思へども益ら男。

子に迷ふ父母は、他のよき子をと尋ねて、かれを、これをとすゝむれど、浪男は耳にもかけず、とかくに野中の清水、もとの心忘れがたく、はては、其の人のとつぎし家のあたり、をり〳〵は用もなきにさまよひぬ。片戀か、片戀ならざりしか、たゞ知らまほしうてなん。今は、何某の夫人、きりやうも、學藝もそろひし人とあがめられたる、其の人も、白川様は、結髪わりと聞きけるが、まだ御てん禮はなさらずや、結髪にてはおはさゞりしにやと、心にかけて兄にとふ顔も、何となくわかみも見ゆるは、そも、何の思にや。



夏月　東久世通禧

若竹のはわけのかぜにつゆちりて
なつをよそなる月のかげかな

孟母　久我建通

擇びつゝやどり定めしはゝき木は
のちのこかげの榮えまちけん

望遠帆　鍋島直大

かくばかり追手はふけど走るとも
見えぬは沖の帆かげなりけり

岸上藤　佐々木高行

ゆくみづをこき紫にそめなして
ふかくもにほふ岸のふぢなみ

橋梅雨　高崎正風

柴人はかけだに見えずさみだれの
くもたちわたる峯のかけはし

朝梅雨　津輕承昭

今朝もまた晴間も見えぬ梅雨に
うめの實うみて落るおとする

山家夏　松浦詮

木々はみな若葉しげりて山さとは

いとゝみやこに遠さかりけり

夏泉　竹屋光昭

水底にわきやかよへるやまかげの
いは井のしみづ涼しかりけり

船納涼　前田利鬯

いざゝらば歸さは陸をわりかまし
あまり涼しきふねのうちかな

山家夏月　水野忠敬

世はなれしみ山のさとのしばの戸を
てらすも涼しなつの夜のつき

夕郭公　池田政禮

星か岡はしのひかりもみえそむる
もりのわたりに鳴ほとゝきす

晴後遠望　長谷信成

雨はれしむかひのみねに虹みえて
ゆふ日さすなり山もとのさと

石川丈山　前田利聲

老のなみよりくるまてもいし川や
せみの小かはを渡らざりけり

夏夜雨　宗重望

風やわると思ひて出しなつの夜に
あめすゝしくもふり出にけり

以利沙泊　宮地嚴夫

あたなしと誇りしあたのいくさ船
君なかりせばたれかくだかん

引田部赤猪子　北郷久政

大きみのみことまつまに若さかり
すきにし妹やかなしかりけん

閑中日長　小出粲

めぐる日の影さへれそき心ちせり
車のれともきかぬすまひは

張良　植松有經

かたちこそたわやめならめ君か爲
盡すところたくひあらめや

雨後新樹　千葉胤明

村雨のはれてののちもみつ枝さす
かしのしたみち露ぞこぼるゝ

蒹葭水暗　遠山英一

宵々にほたるとびかふさとかはの
あしまは晝もをくらかりけり

螢狩　諏訪忠元

おのがさゝ舟をうかへて宇治川に
螢からんとさきをあらそふ

橘薫風　足立正枝

そらたきの香にもまがひて玉たれの
をす吹く風にかをるたちばな

日出海　島宮太郎

そら晴れて果なくみゆる海原の
波の穂ゆらぎ日は出にけり

花山天皇　赤松景福

大御言畏まざるは雙六の
さえと法師と加茂川の水

六十一のいはひしける　宇井正夫

くれ竹も御代の惠の露にぬれて
嬉しきふしをこゝらかそへむ

新竹露　伊東祐賢

行末は矢にもなるへき若竹の
露おもげにも見ゆる夏よな

をりにふれて　安齋篤敬

世の中にこきゆく舟のかちをたえ
渡るよしなき身を如何にせん

修善寺なる範頼のはかにて　大畑弘國

ますら雄のほのほときえしあと見えて
空にたな引く夕けふりかな

老女對鏡　中村昌親

花のかほ昔にはあらぬ老が身の
むかふ鏡やくもりはてけむ

出産　木庭芳香

みどり子の千代の榮も知れけり
　　二葉の松の色にこもれば

楠正行　　　　　　長澤つゐ子

はゝそはのはゝのをしへにたかはすて
　　かくはしき名を世にのこしけむ

更衣　　　　　　　丸　玉子

夏きぬと花色衣ぬきかへて
　　ひとへに風のまたれけるかな

笛　　　　　　　　安齋さく子

そことなく風にひゝきて笛竹の
　　ふしおもしろく聞えける哉





雜報

●大學へ行幸　帝國大學校にては去る十日卒業證書授與式を行はれたり。天皇陛下には、豫て、仰せ出されし如く、畏くも、ふりしける雨をもいとへ玉まず、午前九時御出門遊ばされて、同校にみゆきしたまふ。同校來賓、職員、卒業生、一同、假正門内にて奉迎せり、同十時　おごそかに臨御あらせ給ふ。菊地總長、御先導申し上、便殿に入御御休憩の後、新任官、總長等の拜謁仰せ付られ、夫より器機圖書の天覽あそばされ、また便殿にて御休憩の後、再び同總長の先導にて、圖書館なる式場に出御あらせらる。次に、奏樂、嚠喨の裡に小松宮殿下を御首め奉り、山縣總理、西鄕内相、樺山文相、清浦法相等列席　陛下には、大元帥の御略服を召し結ひ、正面の玉座に着御あらせらる。

各、大學總長は卒業生に、證書を授與し、恩賜の賞品などを授けたり。陛下には再び奏樂の中に便殿に入御あそばされ、さて、同十一時半御還幸あそばされたり。奉送は、奉迎の時とかはる事なし。

此より、菊地總長は大學生一同を、工科大學の中庭に集め、各分科大學長は、次學年の特待生の氏名を披露し、次に總長の祝辭朗讀、卒業生總代の答辭、樺山文部大臣の祝辭朗讀ありて、其の式も終はれと云ふ。

●兵卒の戰死を憶ひ玉ふ

天皇陛下が、戰病死者に對せらるゝ、思召は格別の御事にして、一兵卒と雖も、其姓名、所屬、部隊、身分、閲歷等、一々、詳細に御下問すらせられ、痛惜せさせ玉ふこと、畏くも、慈父の子を失へるにも勝り玉ひて振天府創設、當時の事とかや、平壤、幷に臺灣にて、某々兩名の上等兵、戰死して、尙放たざりし銃ありて、岡澤侍從武官長より、具さに、其の次第を奏しけるに、陛下にはアヽ奇特に働き呉れしよとの御詞ありて、御涙をさへ浮べ玉ひしとぞいと〳〵有難き事共にはべさらんやは

●皇后陛下の御仁德（兒玉總督の榮譽）

至尊が臺政の事に叡慮を傾けさせ玉ふ事は、屢々報道し奉りし如くなるが、皇后陛下に於かせられても、臺灣の事に就ては、豫て御心を勞させられ玉はるる由、ひそかに漏れ伺ひ奉りしが、今度、兒玉總督の上京ありたるに付、去る十日皇后陛下には、深き思召を以て、特に、親しく同總督を宮中に召させられ臺地の情況、何呉れとなく、一々詳細に聞こし召され、時々御下問を賜はり、且つ、在臺兵士、其の他の者が、各般の業務に從事する有樣を聞召され、坐に御感あらせられたる由に伺ひはべりぬ。

同總督は、午前十時頃より、同十二時前迄、幾二時間程、具さに奉答したる由なるが、陛下には、御氣色麗はしく渡らせられ、總督の罷り出んとする時、特別の思召を以て、特に左の如く、御下賜ありたる由。

一銀盃　三組
一縮緬　一匹
一酒肴料　二百圓

總督は、無上の恩を荷ひ、翼々身を王事に献ずるの誠を表して、御前を退出したりしが、翌日は、午前九時宮中に、參內し　皇后陛下に拜謁の上、親しく一昨日、恩賜の御禮を言上げ奉りたりとぞ。

●振天府拜觀將校の話　過日陸海軍將校に宮城內、振天府拜觀を許されたる際、其の榮を得し某將校の具さに、拜觀の摸樣を語りたりと云ふを聞けば左の如し。

▲有光亭　此の亭は、畏多くも　陛下、親ら、詳細なる設計圖案を御調製あそばされし者にて、彼の威海衛攻擊の際、北洋艦隊が、我艦隊の進路を遮斷する爲めに用ひし、防材の木材を以て、棟梁、其他、總ての材料に充てさせられたるものにて、總ての配置優美、且つ、古雅の趣きを備へあるを拜しぬ

▲參考室の一　此の室の入口に向つて、左側なる、一隅に、丈三間程にして、全身腐蝕し、頗る疎造にして、古色を帶びたる、巨錨一基あり。戰役、當時定遠號に載せ込みありしもの〻由なるが、確に、其一對と鑑定さる〻同形の巨錨、一箇、肥前平戶、松浦伯爵家に、重代の什物として、所藏し居る由なるが、確は、弘安四年元寇掃攘の際に、分捕りたる遺物なりと云ふ。

▲參考室の二　又た、其側に、直徑二尺、延長九間程ある鐵檣木を以て、作られたる二本の檣あるが、極めて不細工の作方にて、二十七八年役に、現在せる北洋艦隊の、未だ組織せられざる以前の舊式軍艦に取り付けられたるもの〻由なるが、廢物となりたる後、則ち、日淸戰爭の頃、劉公島に於て、水師營の旗竿に据ゑられありしものなりと。

▲參考室の三　此の室は、幅五間、長さ七八間の廣間にして、正面の欄間には、故有栖川宮、及び、北白川宮、御二方の大板御肖像を掲げられ、其の側には、征淸戰役に戰死、病沒したる將官の中板肖像を列せられ、戰死、及び、病沒せる陸海軍將校は、各、其部屬に從ひ、肖像を巨大なる額面に組み合せ、南面して掲げられ、又、下士卒以下の肖像を組み合せたる巨大の額面は、北面して掲げられしあり。此の中將校の肖像は、蒐集上、左程の困難なく、纒まるに至りしも、下士卒の中には、撮影等の用意もなき者多かりしかば、今に至るも、蒐集の便宜なき者も、數多ありて、　陛下には殊に御遺憾に思召さる〻趣、漏れ承る。げにも畏き極みなりかし。名簿は陛下御手づから、戰死病死者の出身地、年齡、原職業等を御點撿ありしと承る。名簿は巾一尺竪三寸程のものにして、將校と下士卒の兩班に區別せられ、更に、又戰死病死の兩部に區別せられあり。勿論、是等の人々は、靖國神社に合祀の恩典に預り居れども、開國以來、

未曾有の名譽なる戰役に從ひ、國事に斃れたる靡に對も、永く其名を宮中に保存し玉はん有り難き大御心なりと申べからん。尙、又、當時、凱征討軍に御授ありたる軍旗、六旒も同じ處に收められあり。

▲參考室の四　此の處には、廣島聯隊が田庄臺に於て、名にし負ふ勁敵と對抗し、頗る苦戰の際、端なく飛彈を蒙りて數十の兵士、即死すると同時に、徹擊に破壞せる車輛の斷片、及び工兵第三大隊より、献納に係る鐵部、全く磨滅せる、丁字鍬、其他、一見悲愴懷舊の念に堪へ難き、戰利品の數々幾百十種となく、悉く　陛下の御差圖にて飾り付られたり。聖慮の畏さに、拜觀人、いづれも感涙に袖絞らぬは無かりき。

●郡司大尉と令妹幸子との問答　バイオリンの名手、幸子、音樂研究の爲め洋行することゝなり。芝なる兄君郡司大尉の許に、向島の令兄露伴子を始め、姉上延子孃等一堂に集ひて留別の席を開きたるが、日も、稍々傾きて夕風のすゞしく若葉の綠滴る比、大尉、卒然幸子を顧みて「お前も、良い加減にバイオリンを捨て丶、軍曹でも、憲兵でも、良いから、人の妻になつては何うだい」と戯れしに、幸子、ホゝと笑ひて「お嫁に歸つて何が面白いのです」と言へば大尉は「お嫁に行くのと、遊びに行くのと、間違へては困るよ、面白い、面白くないを、詮議する筈のものではない」と語りて、互に笑ひたりとなん。樂しき家には、樂しき兄妹の問答もあるなり。

●正直なる車夫　本月始め夜の九時頃淺草區今戸町人力車夫關口關三は、公園よりある所まで客を送りて、歸る途中十八圓五十錢と日本橋區、米澤町一丁目一番地守山とみ方、德田芳次郎といふ名刺の入つて居る小包を拾ひ、直に、其の筋へ屆け出づ。

●貞婦　千葉縣千葉郡撿見川町亡川島源藏の寡婦ますは、資性溫良、能く、病夫に事へ、曩は、他の傭役に就きて、醫藥、及び、生計の資を辨じ、夜は病床に侍して、看護至らざるなきもの二十年一日の如くなりしが、此の貞操を奇特として、縣知事より、金圓と、賞狀を下賜させらる、洵に、是當世、婦女子が龜鑑たるべきものなり。

●孝子　下總蘇我町に高石廣太郎とて、今年十一歲

になる學生あり。早く、父を亡ひ、母と祖父とに鞠育せらる。先月母かろからぬ病に罹り、千葉北辰病院に入るや。止むを得ず、學校を休み祖父と、共に院内に寓し、日夜母を看護し隙あれど、祖父の肩腰を採み、又學科を復習などせり。

●漁村の貞婦　綾錦の粧ひも、其の心正しからずば何かせん。藻汐燒く、蜑女が身の、襤褸を纒へるも、心の貞操を守りてこそ、人の人たる道と云ふべけれ。神奈川縣三浦郡葉山村字堀内三百四十五番地の農民鈴木秀次郎の腹違の姉のじうど呼ふは、ことし四十五にて父長右衞門が先妻とくとの仲に設けし娘にて、六歲の折、隣家なる鈴木淸次郎の弟馬吉が、當時十歲許なるを後來の婿と定め、養ひ子として、養育したるが、おじう九歲の時母をうしなひしに、父後妻を嫁りて、主秀次郎を擧げければ、遂に秀次郎を相續者となし、おじう馬吉の、とりあつかひも、おもはしからねど、親戚どもはかりけらく、一旦家督をゆづるために養ひし、馬吉なれば、これを相續人に立つることこそ至當なれと、よりて長右衞門をすゝむれどもきかず。遂にさる十一年中、おじうは馬吉とおもてむき婚禮をなし、二男一女をまうけ、長男ははや死せしが、兎角家督一件の爲め、家内折合はず、十四年中、おじう夫婦は、他に移りて、馬吉は漁業を營なみ、微かに、其日を送る中、親戚は、長右衞門へ說き、財產を二分して、其一をおじう夫婦に與へしめんとせしも、後妻が不服を唱へ、僅かに、我家の構内へ、見るもいぶせき家を建て、夫婦を、是に住はせ、且つ月々金一圓の手當を與ふる事とせしも、其は約束のみて、實際一度も與へし事なけれど、おじうは別に請求せず、もとよりうらみもせずありけるが、夫の馬吉は、同十六年中、フト忌はしきやまひに罹り、困苦の上に、困苦を重ぬる有樣を、たすくる人も無れど、獨り、身を粉に碎きて、夫の看護と二兒の養育に心を盡し、其上海藻を漁りて、藥代となし他家の使に雇はれて、其賃錢にて、口を糊し、

前後十四年の間、一日も怠らざりしが、夫は、遂に、去廿九年中死去したり。おじうは悲歎の中にも心を勵し、更にみさをを變ずして、其後も二人の子供を養なへり、其の勞苦は、到底世のつねの人の及ふ所にあらず。去れど同村の老若、語り傳へておじうの貞操を賞め稱へ、自己が子弟に見習はする程なりけれど、其筋にても、斯る貞女を世に旌はさば、廢れたる風敎の、少しは改たもまる所あらんかと、此の程淺田神奈川縣知事より褒賞を下賜さるゝに到れり。

●可感少女　高松高等小學二年生松原ヒデ、一老人の路傍に病臥せるを、氣の毒に思ひ介抱の上、老人の持荷を負ひ、手を引きて自宅まで送り届け、團扇一本を貰ひかへりて、後先生より習ひし、陰德あれば陽報ありの數字を書して自ら喜ぶとなん。

●婦人の義俠　愛媛縣淸家ミネ門司に至り、滯泊中途中同鄕の、西本シゲ、山口ナカの兩少女に會ひ、大塚幸太郎なる者に欺かれ、臺灣に渡航せんとせるを知り、幸太郎に談判するも要領を得ず、其内竊に二少女を船に連込みしを聞き、見張の巡査に急訴し、少女と幸太郎とを上陸せしめ、幸太郎が貸與せし、二十圓を辨償し二人と、共に故鄕に還れりと。

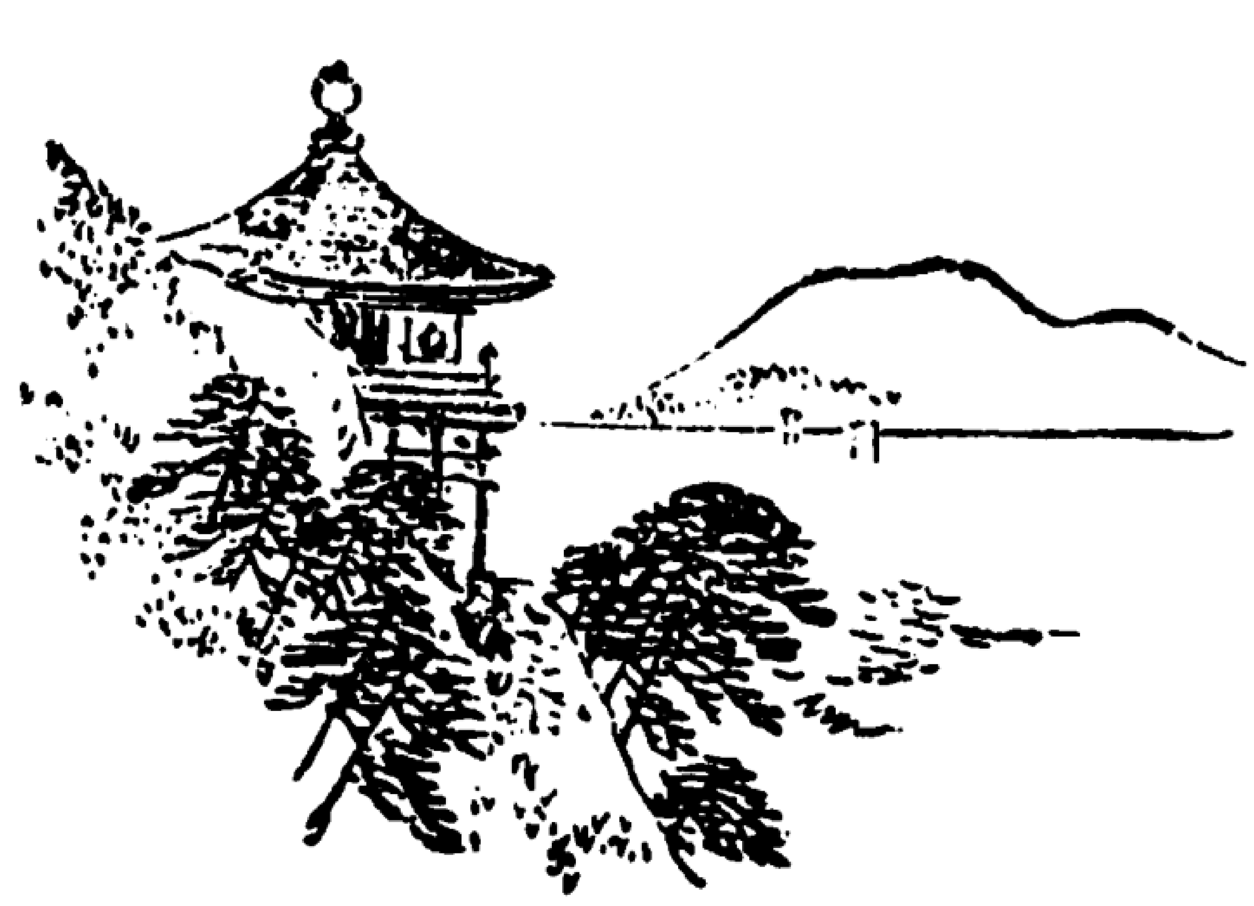
●感心な姉妹　京都紡績會社工女、服部ヤス、同ミネの姉妹は、江州石部の旅店大黑屋の娘なりしに、家道衰へ廿六年より工女となり。勤勉貯蓄の結果、貯金四百五十圓、軍事公債百五十圓を得、會社を辭し、石部に歸り、大黑屋を再興せんとす。世の人は、かくも勤勉貯蓄の心乏しき時に當り、かよわき小女のかくはかり、げによみしべき事ならずやは。

●哀むべきをみな　いにし、卯月中ばの事なりき。上野よりの歸り路夜更けて、人のゆき來もいと稀に、をりふし雨さへ降り出てゝ、さびしさ云はんかたなし。常は乘るべき車の多かるに今宵は、絕えてあらず、ほど〳〵困じはてぬ。暫したどり行くに。とある辻角過ぎなんとしける折しも後より、あわたゞしく走り來

ん者あり。こは何物ぞと、半は驚きてふりむけど、旦那、々々召し給はずやこのころは、まさしく車夫と知られたり。どゞろく胸を押しさげて、さらぬとてうち乘りぬ。暫くにして車の進行は次第にゆるみぬ、夜もふけたり。とく〳〵と二たび三たびせきたつれど、いイと諾はずなるも、やがてもとの如く、いきづかひもいと苦しげにほと〳〵耐へねばかりなりけり。さて思ふやう、こは未なれぬにもや。わりなくせめむは反りて罪ふかゝるべしとて、更にこゝろをあらためて。我が家も、ほど遠からねど、是よりかちにて行くべし。ここにて、車止めよと命じければ、いと氣の毒げにものをもいはず。下車せしめぬ。其のさま、いかにもあやしくたゞものならぬもの、如くなれど、なほよく伺ふに、あはれ一人の女にて、今しもすゝりなきすめり、さては堪ねずやありけむ。聲ふるはして。妾は女に待る。かゝる夜中に、男のさまして、男の業するも、故なきに待らず。暫しきゝたまはれかし。妾が家は、日本橋にて一人の父親待り、妾が夫は、もと、佐官を職とし、日々に壁をぬるをもて饒にはわれねど口もぬれり。さるにいにし、支那との戰に、夫は、公に召し出されやがて、敵の地に渡りぬ。もとより、國のおんため、君のおんために待れど、女心の遇さに、一日一夜わするゝこともなり難く、ひたすら、無事のかへりをまつのみに待りけり。ほどなく講和もとゝひて、戰はをさまり玄かど、台灣の夷ども平定のためにさしまはされにき。ある日の事に待る。公よりの文着しけれど、心も心ならず。開き見るに、あはれ、夫は病のため、かへらぬよみじにせめ入れりとて、髮の毛、少しれくれるにそありける。妾のなげき、まして父上のかなしみはいかなりけんとて、うちふしぬ。女は更に語をつゝけて、せめてはなき魂だになぐさめばやと、髮こそそらね、心はなどてかはるべき。形見のおくりもの、はだ身につけてはなたぬも、三年になりぬ。父上は、とかく氣色もあしく、日々の食事もおこたりか

ちなれど、かくてはとなくさめもし、いさめてもしまつりしかど、遂に病の床にうちふし給ひき。かくてよりは、一しほ心をとゞめ、なにくれと看護に力をいたしゝも、更にかひなく、いよ〳〵重くなりまさりつ。わづかの貯も、何時しかつきはてゝ、朝夕の烟さへうすくなりゆくくるしさに、人の家にやとはれ、あるは、かゝる業さへつとめて食事、薬などとゝのひさゝげて、からくも、其の日をおくる妾に侍る。今宵は、わけてさびしきは、車ひきよせ木かけにたゝずみ居たりしが、はからず。御身と知りまつり。やがて願もまつるなり。されどかよはき女の力には、路の悪しきに堪へかね、かくは足をもとゞめまつりしを、なとかめ給ひそとてさめ〳〵となきふしぬ。おのれさすがにせきくる涙とゞめあへず。暫しは言葉もいひ出でず。雨は一しほふりまさりけるなり。かくて、いつまであるべきならねど、心ばかりのたから得させて、分れつ。あはれその後やいかなりけむ。

世には不幸に沈める人も多かるべし。されど、この女の如く、いまだ子もなきに、夫にわかれてよるべなき身となり、さては老父のやまい、あまつさへ家貧しく、女の身ながら、賤しき男のわざさへつとめて、よく、孝養を盡し、貞節を守りて、かはる事なきは比まれなるべし。諸嬢たち、こを以てかんがみる所あらむ、こよなき幸になん。





七月廿日兼題　橘姫

天　近江國大津　梅林　濱野芈子
わたつみをなだめし姫のまごゝろに
　みこのいさをも顯はれにけり

地　豫伊國温泉郡朝美村　越賀龜代子
かくはしき名をそのこしてさがみの海
　なみのはなとも散りしきみかな。

人　濱横本町一丁目　綿野りき子
はしりみづ今もながれてたちばなの
　かぐはしき名は世にもかくれず



秀逸（八首）

綿つ海にみは入ぬれとかぐはしき
　たちばなのなはかくれざりけり　淺草　吾妻ちか子

たちばなの花のすがたをあら波に
　すてゝみふねをやりしきみかな　麹町　戸塚てつ子

かくばしき花たちばなに和田つ海の
　かみのこゝろもしづまりにけん　丹波　羽室龜子

綿つみの神をなごめしみいさをは
　ふかきさがみのうみもものかは　山口　村上みさを

相摸の海なみのたちゐにたちばなの
　むかしの香こそしのばれにけり　甲府　名取正代子

たち花の名にしおへれば世の爲に
　たてしみさをは千代もかをらん　横濱　新藤雪枝子

身をすてゝ誓ひし君がまごゝろを
　いかにあはれとかみやうけゝむ　神田　鹽井梅子

あら波に身はしづめてもたち花の
　はなのにほひのかぐはしきかな　淡路　泉久良子

（以下原稿到着順）

あつま路の名にこそかをれたち花の
　身をすてたりしきみかいさをは　柳元いさ子

涙わけて入りしみこゝろくらふれは
　さかみのうみのふかさものかは　吉崎世喜子

國のためあらしにちりしたちはなの
　かをりは世々につきせさりけり　井上まさ子

みなそこにしつみし君かまこゝろの
　ふかきみさをは世ににはふなり　萩原章子

うたかたのあわさ海路にみはきゆて
　きみかいさをのこすひめかな　諸井久良子

あつまなる森のみやゐにぬかつきて
　うみにいりけん君をしそおもふ　伊賀直子

身をすてし橘ひめのいさをしは　片山あや子

あつまにのころ名にそしらろゝ

君かためきゐていさをたちはなの
ひめはいく千代香ににほふらむ
新海わか子

名にのころ吾妻をさめはことさらに
ひめかみさをしたひまつらむ
舘脇ます子

さし櫛のなかれよりきと聞きつとふ
あつまの森のむかしおもほゆ
杉浦糸子

わたつ神いかりのなみもたくひなき
君かまことにしつめはてけり
小曾根しう子

たれ人かしのはさろへきさかみなた
ちりにしはなのむかしかたりは
新泉さ代子

たちはなはとくちりぬれど高きかは
いまもむかしにかはらさりけり
新泉翠子

あら波のうへにちれともたちばなの
かくはしき名は世になかれけり
矢田部信枝子

なみあらき相摸のうみにしづみにし
あはれはなかく世にのこりけり
森こと子

八重たゝみたゝめろなみも君おもふ
こゝろのうみにながれいりけん
中村きよ子

もゆる火のほ中とひしひとことは
身をしつめてもなはなかれけり
野中朝子

たちはなの高きみさをそかをりける
さかみのうみに身はしづめども
由井涙子

わたつみに身はしつめともかくはしき
たちはなひめの名こそくちせぬ
石川類子

たちさわぎあれにし波もたちまちに
なぎしぞきみがいさをなりける
尾崎嘉子

わたつ海のかみにさゝけしたちはなの
そのみは千代ににほひぬるかな
長澤秋甫子

さかみなた浪のそこふかくしつみても
うかひいてけり玉のひかりは
長澤ひて子

國のためわかせのためさをゝしくも
わたつみふかくきみや入りけむ
田中すゞ子

たちはなの薫りとともにいく代かけ
つまにつくしし名ぞかをりける
山本きと子

みいさをは千代も朽ちせじ國のため
あづまのうみに身は捨つれども
眞壁美津子

百千とせすきにし今日もひめが名ぞ
はなたちはなとともかをれる
山本富子

あら浪のはなと散りても世ににほふ
とのゝまもりのたちはなのはな
山田稲子

わたつみの神をなために身をしつめ
きみやすかれとおもふあはれさ
中村壽枝子

しのふにも袖はぬれけりさかみなる
なみのもくつときゐしきみはも
淵本繁壽子

身をすてしいさをは清きたちはなの
かほりとともに千代にのこれり
中山富子

さがみがたあらふる浪をおしわけて
きみが御ふれをやりしきみかな
溝口貞子

相模の海そこのもくつときゐしにも
きゐぬはきみがいさをなりけり
吉富彦子

吾妻はやさがみのうみをみわたせば
おとたちはなの御名ぞかをれる
村上昌子

かぐはしき花たちはなの散らさらば
なみかぜいよゝふきあれましを
浦井豊子

君がみはあらき波ぢに散りぬれど
いよ〳〵かをるはなのたちはな
岸崎豊子

かしこくもすがすがしきは八重だたみ
友永幸子

あれし海なみをしづかになしぬるは　やへのあらしほにしきし君かな
すゑのよまでのかゞみなりけり　那須昌子

かしこくも身をなけすててしづめけん　なみはいくよのかゞみなるらん　黒田明子

あら波をしづめましけんいさをこそ　いくよあづまの名にのこりけり　虎口資子

雨かぜにはなたちばなのかをる日は　ひめがむかしぞしのはれにける　佐々小琴子

あづまがた海ばらあれしそのかみの　はなたちばなの香こそたかけれ　佐々有鄰子

あつまの海しつみ給ひしたちはなの　たくひなき香は千代につきせし　尾倉益子

水そこにしつみてもなほたちはなの　その名はよもにのこりわたれり　永井さい子

よしや身は千尋のそこにしづめさも　かをりはたかしたちばなのはな　河原芳子

世々かけて流れをくまむさかみなた　八重のおき路にいりしきみかも　竹村竹里子

わたつみの神のいかりをなごめんと　にへにたゝししひめそかしこき　都志津子

身をなけていさをゝなしき君こそは　千代はしりみづの海に名だかき　徳永萬壽子

君がためうみのもくづときえましし　そのをたやめのいさをゝなしも　徳永麗子

君がためくにのためさてかぐはしき　名をはしりみづのうみに留めき　小森田輝子

水そこに身をしづめてもたちはなの　名のみは千代もながれざりけり　澤田春子

君かため身をしつめにしをゝしさに　わたつかみさへなごみましけん　駒澤まつ子

ほとゝきすれにや鳴くらんたち花の　かぜにあへなくちりはてしより　横山柳子

みをすてゝみこさを思ふまごゝろに　あらふるかみもかまけたりけむ　横山すが子

いかはかり雄々しかりけむ相模なた　そこの藻くつとなりしきみはも　名取よし子

さかみなた底の藻くつとなりしより　あはれあつまの名やのこりけむ　坂田きみ子

咲出てゝあらなみたつのみやこにも　むかしゆかしくにほふたちはな　武田たま子

身をすてゝみこを渡しゝたちはなの　かをりは世々にかくはしきかな　百合子

あた波をうちしづめしもたちはなの　身をすてたりしいさをなりけり　清子

わたつみの神のこゝろもなぎぬらん　身をしづめたるきみがまことに　千代子

あだなみのうちしめしもたちはなの　まことにつくしいさをなりけり　雪子

たち花のみはくちぬれさまごゝろの　名もかくはしくよににほひけり　菅原松子

さがみの海おさの波まにいりにけり　きよきその名をいまにのこして　石井豊子

九重の御そのの外にもにはふかな　むかしさいまにさけるたちはな　山田静子

君かためあつまのうみにしつめさも　名はたちはなの世ににはふかな　山田婦美子

こゝのへの御階のもさにゝはふなり　兒平千賀子

名もたちはなのきみのいさをし

君を思ふこゝろのおくのあらはれて
うみのなみさへしつまりにけん
安原くに子

きみかため身は海そこにしつみしも
かくはしき名は千代もつきせし
立神富子

君かためあらきなみまにいりましゝ
みこゝろいかにかなしかるらん
河田ふく子

たちはなのたかきか殘るさかみの海
なみたゝぬ日もそてはぬれけり
河田いし子

水そこに身はしつみてもたちはなの
香はさほき世になかれつるかな
原口くか子

さかみ灘すさふあらしにちりぬれさ
かにこそにほへはなのたちはな
中澤千野子

皇子を思ふそのまごゝろにくらへては
千ひろのうみもあさ瀬なりけり
山田璋子

さかみなだ荒きなみまにみをすてゝ
御子にかはりしみさをたかしも
山下茂登子

たち花のかをりゆかしく殘し置きて
あはれはかなくなれるきみかな
田代綾子

吾妻やさ問はれしあさのことの葉の
はなのかをりはいまもかくはし
吉田久子

わがつみに身を捨てゝさへ我せこを
やすくわたしいしさをたふさし
山村隆子

身をすてしまことを神もまもりけん
あらたつなみも凪ぎにけるかな
田中睦子

百させのよはひをすてゝうなはらに
君のゆくてをまもりけるかな
椎野ぬき子

吾妻はやあつまのうみのせのために
つくすみさをのかゝみなりけり
證子茂子

さかみの海あせなん世にもたち花の
名こそあつまに千代もかならめ
敷島花子

まごゝろを神もうけてやわだつみの
なみちしづかにみふれはてけん
吉岡歌子

たちばなの高きかをりを殘しおきて
きねにしきみがむかしをぞおもふ
吉岡すみ子

わたつみの神のいかりもさけにけり
皇子にかはりしくしきこゝろに
伊藤みどり子

八重たゝみ海路にしきてわかれにし
たまのひかりそ世のかゝみなる
高田杉子

わたつみの底さへなきてうきつらん
おさたちはなのみのひさつをは
高田杉子

たぐひなききみがこゝろに相模の海
あらきなみぢもしづめけるかな
牧瀬かう子

うみかせにたちはな姫のあさゝへは
いまはなみまに名をそさゝむる
横手孝子

立つなみにこゝろ沈めてたちはなの
ひめのかた見にめなみなるらん
今井萬子

あれしきるさかみの海にきねつれさ
なみよりたかきなをそさゝむる
須藤みわ子

花はしもさかみのうみにちりぬれど
なはたちはなの香にぞのこれる
黒子うみ子

たちはなのかをりゆかしも相模なる
うみにちりにしひめしのはれて
宇佐美まつ子

身をすてし君かいさをによりてこそ
よのあたなみはしづまりにけり
田中登美子

なかなかに相模のうみのあれなくは
よにたちはなもにほはさらまし
内山きう子

いのちをばわたつみ神にさゝげてぞ
林友子

君がいくさのさちをいのれる

君かためさかまくなみに身をすてゝ　ふなちいのりしこさのたふささ　齋藤勢ん子

わたつみにしづみし君がいさをにて　みこのみふねはきしにはてけん　青木はる子

雄々しくもあらふるうみの波のほに　わかせのためにたちしきみはも　森こさ子

さかみの海いりにし月のひかりこそ　たかきみさをのかたみなりけれ　賀茂笹子

さかみの海君しづますはいかにして　からきしほろにふねをうかへん　河合縫子

わたつみに沈みはてゝも消ぬ名は　世にたちはのにほひなりけり　加藤數子

きくそでに波こすばかりさかみの海　しつみしきみかむかしをぞおもふ　服部萬子

國のなのあつまさいへはしのふかな　おとたちはなのむかしかたりを　伊東以佐子

火中にてさはれしきみかみためさて　はしりみつにそみをしすめける　伊東千代子

うなはらのもくつときえし君か名は　よくたちはなのかににほふなり　福島喜た子

七月廿日兼題　蟻

天　東京神田區猿樂町二ノ一　鹽井梅子

蟻はにくけれど輕びいみじう、水の上などたゞ歩みあるくこそをかしけれと、清少納言の品評せられしもさるとながら、こはひとへに蟻のふるまいのあらましにて、流石に蟻の功と德とには未だいひ及ばざるなり、蟻の爲口をしの業ならずや。おのれ思ふに、蟲といふもの、これかれ數多あるが中に、蟻ばかりめでたう健氣なるもの、よにあらじかし、かれ其形の見にくゝこそあれ、其体の小さくこそあれ、其心をゝしう、其力はた強かり、されど、常に自ら蟻塚といふものを造り、若しくは土に穴してすみかとなし、そが食を求めむにも、例の難きに耐へ、苦しきを忍びつゝ、さては身に餘るばかりの大きう重なる物をさへ、打動し引まはしつゝ、遂に己がすみかにえ運ぶなり、殊にかのあら金の土さへさくといふなる夏の日の暑きにも、露いとふ氣色なく、競ひ勵みつゝ立働くさま、さながらつとめある人の怠りなくいそしみあはむにもたくへつべしや、かれゆきかふ毎に首垂るゝは禮なり、弱きを扶けて利に走らぬは義なり、前後の列みださで睦びあふは、長幼の序なり、爭ふ所なきは君子にも似たるかな、此外蟻の功多かめれど、こゝに面白き話あり、昔或將軍、軍に打まけて、野山落ちのびけるに、一匹の蟻あり、蟻は身に餘る許りの大きさなる物を、他に移さむずる樣なりけるが、さすがに其力の及ばざるにやありけむ、たやすうえ動かすべくも見えず、いと困じに困じ果てゝ、立ち去らむとすめりしに、かれはたおもふ所や

ありけむ、やがて又もとり來て、前の如く氣を勵まし、力をふるひて、さながら斃るとも止まじとのけはひ見えぬ、かくて失敗數度に及べど、いさゝか撓める色も見えず、いよ〳〵益々ふるひおこりぬれむにや、遂に志せる方へえ運びけり。今まてよそめもふらず打守り居ける將軍は、いかにおぼしよられけむ、つと立ちあがりぬ、やがて再び敵の地に打入りて、今度は前にまされる花々しき軍して、大に敵を打なびけたりきとぞ、將軍のいきをしもさることながら、將軍をしてこゝに至らしめし蟻の功こそ、いみじうたふときものにはありけれ。

あはれ、世の人々よ、飽くまで食ひ、暖かに衣つゝ、何すともなく光陰を送りて、禮もなく、義もなく、はた功遂げず、德あらはれずて、一生をすごしたらひには、かの蟻にも劣らなじ、あはれ、萬の物の靈長とし稱へらるべき身をもちてとてかくなむ。

本鄉區 龍岡町十九　横山柳子

地

此虫よ、かたちはいともさゝやかなれども、その行は品たかられはゆるふしそれはかりける、友と逢ふときは、かたえに道をゆつりて、すこしもあらそはず、また道に友の屍をみれは、口にくはへつゝいともねもころにおのかすみかに引きゆくさま、さながら人のなすごとくいともあはれなり、われ、ひと日、夕庭をそゝろあるきせしに、年頃やしなふ紅梅の根に、いつのほどよりか造りそめけん、あまたの蟻とも、力をあはせて塔を立てゐたり、あまりのめつらしさにうからよびつどへてみてあれは、この中のをさともみゆは、脊にはねをもち、そこゝとさしつすめり、あまたの小蟻とも、そのまにまにはたらきて、おこたるけはひなく、規律たちたる、その建築のいとたくみなる、なかなかに人もおよはぬさまなり、あはれ一身すらをさめかたき人多かる世のかくめつらしき虫もありけるよ、

伊豫國松山市 二番町七番戸　森　こと子

人

てりわたゝくこの頃の暑さに、ひるのまはふみよむことも物うくて、眠りのみもよほし、せんすへなさに、端近ういてゝ見れは、高き木も梢はたれ、志けれる草はみきさへなえて、あらかねの土もさけんはかりの日盛なるに、蟻てふ虫のみは、くるしげもなく、うからやからにやあらん、打集ひて冬のかてにとやおのか身よりも大きなるものをひきゆくさまこそ、いといとあはれなれ、こを見ておもひけらく、かく數ならむ虫だにも、其身のつとめはなすなるものを、まして、人にして何事もなさで徒に、衣食のみしたらむには、かゝるちひさき虫にもおとりなん、いでや、つとめて學びなむ、いかにおろかなる身なりとも、一事むかりは人並々にし、出づるふしもあらんと、獨こちつゝ文机

に向ひて、よみさしのふみとりて、復よみはじめつ。

(以下原稿到着順)

河原芳子

蟻ほどめでたきものはあらじ、來ん冬の蓄へにとて、あまた力をあつめて餌をもとめ、巣に運ひもて行きては、世のはげみなき人の戒にはやされ、懶惰の人の肌をさしては、たふとき日時を仇にすごすなといましみ、堤に巣くひては人の油斷をさとらしむる、あゝ古よりこの小さき虫のはたらきを例にとりて、人の人たる道を教ふることそをかしけれ、

名取正代子

世に虫けらなどいへば、物の數にもあらずおぼゆれど、よく／＼其なすところを心して見れば、又大にさとる所なきにしもあらず、さるが中に、いと感ずべきは、かの蟻になん有りける、此蟲、多くは地の中、又木の窩等に巣を造りて、其中に數多群れ居るを常とす、又稀には高き數尺の塔など造りて住むものあり、さて其種類も數多くして、赤色なるあり、黑色なるあり、大なるゝ小なるゝありて、各種の中には、雌雄と職蟻とあり、雌雄は專ら生殖の事を司ると雖も、雄は早く死し雌は殘りて巣の中に籠り居り、職蟻をして勞働せしむ、さて春日の漸く暖なる頃に至れば、巣の中より出で、四方をかけめぐりて、其食を求むるなり、かくて夏日の炎天やくが如きも、たゆて怠らず、其嗜好する所の糖分、油質分あるもの、其他昆蟲等の自躰の數倍重き物をも、よく一匹にて荷ひ、巣の中に、運び貯へて、冬日籠るべき用意をなす、實に其力の大なる事、小蟲に似ざる所あり、なほ其性甚鋭敏にして、殊に記憶の力尤も强しとす、例へば、一匹の蟻來りて、其食物のある所を求むればよく之を記憶して、忽ち他の群蟻を率ゐ來り、驚くべき重さの物を、寸時にして、巣の中に運び去るなり、其他友愛の情甚だ厚くして一匹の蟻不圖害せらるゝか、又は負傷等なしたる時は、他の蟻其骸を負ひ、或は之を扶けて巣につれ歸る等、實に感ずべき行あり、又時としては異種の蟻互に戰爭の如き事をなし、列を正して暫時勝敗を爭ふことと、實に心あけなり、されば昆蟲類の中、蟻は其主長ともいふべき能力を有すといへるも理なり、之を思へば、萬物の靈とあふがるもの、はづかしからざらんやうつとむべき事にこそ、

中村さく子

あはれ花の世の春の景色も見捨て、夏のあつきもいとはで、ひねもすたゆまず食を求めて、冬の用意をなすは蟻なり。ありは群居する虫にて、種類多く赤色あり、黑色あり、或は大なるあり小なるあり、されば冬は階級を立て、中にて最も大なるを王蟻とし、次の大さなるを兵蟻とし、小さきを工蟻となす、王蟻は一の蟻つかの主にて、兵蟻は之を守り、工蟻はやすまずつかを作り、食をあつむ、他のてふ／＼など春は花にたちむれあそぶが多し、さるを花にたはむれず、よく忍耐して、末來を考へ用意なしおく蟻こそたのもしけれ、

中澤千野子

あらがねの土もさくと云ふ水無月の十日ほど、朝よりちりばかりの雲もなく、てりはたく日影のやう／＼四日になるほど、さながらやきつくやうにて、暑さ云はん方なし、眼のみきざしつゝ、針持つわざさへ物憂ければ、扇うちならしつゝあるに、我しらずゆめ路に入るぞいといひかひなしきや、かくも堪へがたき日の、況して久しう雨にあはで、灰のやうなる砂の上に、いと勇ましげに働けるもの、これなん蟻と云ふいとも、小さき虫なりける、あはれ此のはげしき暑にたへ、苦しきを忍び、日毎に食をあさり、己が巣に積みたくはへ、木枯すさぶ冬の日の備へとなす、其の心がまへいといみじや、げに、夏の中ばに秋風のふくとかや、若葉の綠は、やかで時雨染なす紅葉となり、ねむるまさへたちまちに、夜の嵐に、はかなくも散りしく土におく霜の、やがては雪とふりかはる、はかなきうき世と知りながら、怠りがちなる身の、此の蟻にさへ劣りざまなるぞいと恥しき、いでや、ゆるぶ心をはげまして、軒の柳に秋風の音聞ゆぬ間にと、縫ひかけし衣とりあぐれば、今までの暑さ忘れたらんやうにて、針もつ手もいと涼し、

佐々有郷子

昨日までふりし雨の、今朝はあさなくはれて、池の緋鯉おどりいで、島の柳いさたれて、青波をそたてつる、風おもむろにすずしの袖かろくおばしまちかく、立ちいづれば、ふみ石のこなたより、遥見燈籠のあなたさして、飛騨の工がうつ墨繩のごさく、黒く長くひきはへたるものあり、あなさ先聲たてつれば、れいの媼が、いかにあそばしましけんさ、はせよる、あれ見よさ、指してしめせば、これなん蟻大名の行列さいふものなるさ、そのさまをかたりいでぬ、いや先なるは露はらひ、菅笠きて二十人、御かちの者これをつさむ、馬上の御侍壹騎、これを御徒歩頭さいふ、火繩の御小銃百挺、御てつぼうの者これを持つ、馬上の御侍四騎、これを御物頭さいふ、長柄の御鎗百筋、御ながゑの者これを持つ、馬上の御侍貳騎、これを御長柄頭さいふ、弦かけたる御弓參拾張、御ゆみの者これを持つ、馬上の御侍貳騎、これを御弓頭さいふ、金御紋對の御先箱、白鳥毛對の御鎗、御陣笠、爪折御傘、御長刀、御弓矢、御鐵櫃、金覆輪の御鞍置馬、白桔梗替對の御鎗、白肉毛の十文字御鎗、御太刀、御鷹、御供の御侍、一千餘人、御供衆の鎗白毛を紫革にて、鎗印の鎗につけて、次第順に數百本、鐵櫃數百荷、殿の御行列、御三家衆さ稱ふる御家老職より、手勢引連れて御勤なさる、蟻大名の行列を見て、かく申あぐるは、媼が老婆心に、四十年のむかしをしのび、太守樣の江戸御參勤の御發足の御行列を夢のごさく孃樣にきこゑおきまゐらせんさてなり、御祖父樣は、御物頭を御勤めなされ、江戸の御參勤にも、度々御供あそばされ、媼が夫の金兵衞も、御家司役なれば、江戸に御連あそばしゝこさもありしか、今は亡人のかずに入りて、懷舊の涙のたれさなり侍りぬさ、噴鼻て語りいづる媼が言葉をきき、蟻の群行をみれば、げにさもありしかさ、昔のしのばれて、今日の女鑑の題料に、聞君のまにまにかくなん、あなをかし、

白岩艶子

人も草木も唯しほれにしほれて徒に暮るゝを待つばかりなる此の頃の暑さ、書見るも憂く、栽ち縫ふ業も苦しくして、扇手ならしつゝ、見る

さもなく、庭の面にまなこをやれば、燃ゆるばかり照りはたゝく石の上に黒くさゝやかなるものゝ動めくさまなり、何ならんさやをら日陰におり立ちてうかゞへば今朝しも犬に放げ與へたる飯の、少し殘りたるに、數多蟻の群居て、各かしこく持ち行くなりけり、忙はしげに往來するうちにも、逢へば必ず頭もたぐる樣に見ゆるは、互に禮を爲すにやあらん、いさ床し、あはれかばかりさゝやかなる虫だに、たゆまずいそしめるものを、萬の物の長たる人さ生れながら、暑さにおちて、爲す事もなく明し暮しぬるこそ、いさもいさも耻しけれ、實にその昔、戰敗れて伏屋にひそみし大丈夫に、再びさごゝろふり起さしめしも、此の虫のいさをさ聞きぬあはれ、蟻よ、汝をば義に從ふ虫さかき初めしも、實に理なりや、

吉岡歌子

照りはたゝく水無月の暑さ堪へがたう、梢の蟬の聲々もいさゞ暑さそふ心地して、言ん方なきにあはれ庭の撫子の萎るらん、いかで一村雨の降れかしさ端ちかく眺むる折しも、其處ら行きかふ蟻の、かゝる日にしてもいそしくまめやかに、己がじゝ何やらん持ち運ひつゝ、しばしたゆたふいさまだになき樣をぞ見つけたる、かゝる日に、かゝらでもありなん、そも何を欲りしてかゝるにや、宜へな利に走る人心を、ありの甘きにつくが如しさいひなすなり、あまりに欲ふかきありや、身をしらぬありのさまや、さはれ、この蟻よ、かくいそしめばこそ、穴にあまる食物、澤につみためつゝ、やがて秋風吹かん日は、いちはやく穴籠りして、春來ん程を心安くねぶるなうるなれ、この時木かげの蟬、けふ盛になつ衣すずしにほころこのせみ、まさにいきんやは、思へば、己れ人にしてさ、かだへの書を手にさる折しも、降り出でたる村雨の名殘、今も猶すゞしや、

眞壁美津子

見るかげもなき小蟲なれども、能く其務を怠らず、且怜悧にして、蟲類の中に秀づるものは、蟻にぞあるそも此蟻は、其巢を地中に營み、僅か一尺位の地をもて住ひさなし、之に群居するものにして、其間に、種々

の階級ある事、亦蜜蜂に異る所なく、乃ち女王蟻兵隊蟻、及び勞働蟻などありと聞けり、而して女王蟻は、此の蟻塚の主君にして、之を總べ兵隊は主君と國家とを守り、勞働蟻は常に勞働して食料を集め、主君と兵隊とを養ふを務とし、其秩序自ら整へり、而して主君の命令はよく之を遵奉し、各自其務を重じ、又能く信義を守り、義の爲めに生命の惜しきを知らず、艱難相救ふ等、到底他蟲のよく及ぶ所に所あらずと云ふ、あはれ無下の一小蟲すら、尙かく忠を重んじ、義を守り、已が務を怠らざるにあらずや、況して萬物の靈長たる人にして、猶此蟲にも及ばざるは、げにうとましの極みにこそ、

山本きこ子

蟻は少さき蟲なれども、力強く、春の彌生頃、早くその穴より出で、霜月の頃までは、日々よく勞働して、食物を集め、冬の日穴籠りする時の用意をなす。その食物の中にても、蜜、砂糖など、甘味あるものを取りわき好めり。

今は昔、泉州日根に、ひとつの珠ありけり。其珠、上より下に一すぢの孔通り居りけれども、いみじく曲り居たりければ、人々多く打集ひて、工夫に工夫を凝らしゝが、誰一人、此珠に絲を貫ぐべきすべを考へ出でしものなかりき。時に一人の翁あり。此のことを聞き、そはいとやすきことゞもなり。健なる蟻一匹を捕へ、その尻に細き絲を附け、孔の一方に向はしめ、一方の口に蜜を置くときは、蟻自ら絲をとほすべしと、語りければ、人々喜び、その言の如くなしけるに、いと〳〵たやすく絲を貫き得たりとなん。(現に今、泉州日根に、此翁を祀りたる蟻通明神の社ありとぞ。)

あはれ、此翁が、斯く皆人の考へぬ難事を、やすくなし得つるは、全く蟻の性質を見究め、其の蜜を好めること、力の強きことなどを利用せしによる。なべて社會の文明を進め、人々の幸福を增さんには、動物、植物、礦物など、あらゆる天然物の性質を調へ、用ふべきは皆採りて用ふるにあることにこそ。彼の經濟とかの道も、亦其の要は、この利用てふことに在るなめり。吾姉妹、やよ勉めよや。

蟻といふ課題に就し、幼き折、今はなき祖母上より、聞きしことゞもの浮び出でつるまゝを、斯くはものしつ。

田中すゞ子

富士のねの雪さへきゆる昨日けふの暑さには、ほと〳〵魂もたゆなむはかりにて、文机の業にもうみはてぬれば、少しは心をなぐさむすべもやあらんと、讀みしの書物とりまとめ、庭におりたちて、そこはかとなくさまよひぬ、築山のかげに植ゑ並へたる梅櫻の、けふははやきのふの花の姿は名殘だにとゞめず、青葉しげりて、梢を渡りくる風のいとすずしくて心地よきまゝ、暫しは何事をもうち忘れ、歩むともなくそがかげに行きぬ、いにし春秋には、こゝにしけれる木々とともに、花さき出でゝは人の心をなぐさめ、れ葉ちりては浮世のはかなさをしらしけむと、さすがにむかし偲はるゝ一本のかれ木あり、ふと見れば、なかばは朽ちたらむが如くそがみきを、いと少さきあまたの蟻の、おの〳〵餌を口にくはへ、群をなしてのぼりくるあり、或は求めんとてにや、つらをなして下るあり、互に行き逢へば必ずとゞまりて禮をなし、道ゆつりてのちしづかに別るゝ也、さてもこのかてを、何處まではこひ行くならんと、眼もはなたで見てありしに、かの木の日にとほき方にて、地上よりおよそ二尺ばかりもや高からん、いたく朽ちたる少さきうろの中に入りぬ、こゝぞかれ等がすまひにやあらん、霞たなびく野に山にさく花のかを、人皆のしたひてあそぶ春の日も、かれ等は朝とくそのすをいでゝ、おぼろの月の出づるまで、おもやゝ如き夏の日さへ、うますたゆますかてあさり、さびしき秋の風ふきて、木の葉ちりしく頃まで、少しもおこたりなく、冬ごもりの用意をなすなど、いともゆかしうあはれなる、虫ぞかし、もしそが中に、怠りて務めをはげまれものある時は、かれ等の王は、すみやかに他の蟻をして、これを群より除かしむといふ、あはれ、かゝる少さき蟲の、さばかり禮を重んし、業をはげみ、おきてきびしく、ころばぬさきの杖とかやいふ、諺の心をもよくしりて、冬のかてさへたくはふる怜悧さよ、など思ふに付ても、我身の拙くして、學びの道に後れだにあるを、いかにあつしとて日かけもさゝぬ家の中に書よむ身の、お

もきもの引きて炎天を行き〻する蟻のつとめにくらべては、なが〳〵にものゝかずにもあらぬ事なり、さるを、うみはてたりなとたへしのぶ心なきはこのむしにも劣りぬ可き行ひささりては、しばしもあだに時日をつひやす事のなしくなりて、今きし方にかへらんとして、ふと見れはこの暑さを事ともなし給はで、卅君のわかものにやあらん、たちぬふ衣はうすくともあつきみめぐみに手をだにとゞめ給はぬかたじけなさを思ふに付けても、いよ〻わが身のかへり見られてなん、人におも見こらんも心苦しければ、おひしけれる木の下道たどりて、いそぎおのがへやに入りて、文の林をはせ行きぬ、

由井浪子

夏の日は、いとにくき物、いとうるさき物、いとおそろしき物、多かる中に、蟻はかりは、照る日盛も忘らす、己が業をいそしむなり、嗚呼この蟻よ、風ふきすさみ雪ふる冬の寒き日、深く土中にひそみ、かれて、貯へし糧におのが身を養ひ、花も若葉となりゆく頃より、森の上風身にしむひまで、又孜々として己が業にいそしむを、この蟻も、夏の日を暑しくるし〻とて、はげます怠らは、いかでか冬日の楽しみを得んや、人も又常に怠らず、己が業をはけみなは、後の楽しみを得るは、この蟻の如くならむと、見るがま〻にかくなん。●

中村きよ子

ある夏の日、椽先に立ち出で〻見渡せば、枝さしかざしたる大きやかなる梨子の梢に、綾のやうなるうすき羽衣を着たる蟬の、若葉のかげに身をよせて、暑さ知らぬがほにもなきたるはうらやましき、下には恐ろ〻日に燒くさかりなる庭の面に、少さき蟻の數知れず這ひて、食物にやあらん引きて行くさま、いそがはしく勇ましげおのれおもふやう、彼のは蟬やんごとなき人の、暑さをしのぐとて、山水のけしきよきを撰み、日ねもす遊びくらすに似たり、彼方は、賤の男の木かけもなき道を、人乗せたる車引ききほひて、玉なす汗をおしぬぐひつ〻行くさまにやたとへつらん、同しく此世に生れいで〻彼方はすゞしは楽しげに日をおくり、此方はあつさにあひてくるしく、暮すくいとあはれにもまた憐なること〻しおもひしか、秋風たちてほどもあらぬに、蟬のやせ衰へたるが梧の葉の露にぬれて落ちちりたるを、かのありは如何なしけんとあたりを見渡せばふるき木のうつろにひそみて、心ゆたけく暮すさまなる、世は、さまざまの物になむありける、

竹亭夏來　　草野隆道

あさな〳〵庭にこぼる〻わか竹の
　葉末のつゆになつをしるかな

禁中夕立　　仝

けふも又すゞし〻き風をさ〻くらん
　大うちやまのゆふたちのあめ

旅宿夢　　仝

旅ねしてうれしきものはふるさとに
　かへりしゆめをみつるなりけり

夕立　　兒平千賀女

風おくるのきの小笹につゆ置きて
　すゞしく晴る〻夕だちのあめ

毛利吉就の夫人　　佐々豊水

すみかへる心さか井の水かゞみ
　さやけき名こそよにながれけれ

かぐつちの神のあらびをなぐめしは
　いろうるはしき女なめしかな　　仝

月ごとにみたまの前にくろかみを
　つみてさ〻げしこ〻ろたゞしも

惟忠の室　　仝

灰をまきてふせぎし城のいやたかき
　名はよろづ代に立ちにけるかな

避暑必携

志賀矧川君序文

野崎左文君著

改正漫遊案内

著者曩に五畿諸道を歴遊して、名勝舊蹟温泉避暑地等を詳記して、漫遊案内を公にするや、忽ち第廿版を重ねて、洛陽の紙價爲めに動くの狀況なりき。然るに汽車汽船の通路日に開通し、各地の繁榮亦隨つて月に加はるの情態なるより、更に増補訂正し、汽車線路と汽船航路等に因りて、沿道の各地を分叙し、探討遊浴の便宜を計れり。今や漫遊の期至れり、請ふ一本を購ふて山水行吟の杖とせよ。

改正概目

- 東海道鐵道線路部
- 大阪及奈良鐵道線路部
- 中武及青梅鐵道線路部
- 東京灣汽船航路部
- 信越鐵道線路部
- 關西及參宮鐵道線路部
- 山陽鐵道線路部
- 總武及成田鐵道線路部
- 日本鐵道線路部

全壹冊　總クロース金字入頗美
本寫眞銅版全國名所舊跡圖挿入
正價四拾錢——郵稅六錢

東京日本橋區本町三丁目

發兌元　博文館

顧問大和田建樹

淑女

毎月一回廿五日發行
一冊拾錢六冊五十七錢十二冊壹圓拾錢廿四冊貳圓但遞送料共
郵劵代用一割增爲替振込は東京四谷見附外郵便取扱所宛

第六號（六月發行）要目

●口繪　ペナンの瀧

●論説　女子の倚頼心……衆議院議員武市庫太

●家庭　珠名、手兒名……故齋藤彥麻呂　日用字類……松本碧雨

●史傳　列婦河井氏小傳……村上倫　戸塚種子略傳……第一高等學校講師中村秋香

●地理　千葉日記……前參事院議官補村岡良弼　詠歌私評……佐々豐水

●音樂　雅樂振張意見……宮島春松

●講話　桃太郎の物語のかうかへ……淑德女學校講師西式

●歌文　「アブラム」と「ジムリ」（英詩を譯す）……華族女學校教授鳥山啓　長歌……村岡良弼　長歌……鳥山啓　移居……林甕臣　其他和歌數十首

●詩文　桃仙詩稿……東京文學館教授國分操子　客游賸稿叙……岡崎春石　玉手匣……村岡良弼　其他詩數十首

●考證　六月名義……故讃岐明道館都講水野秋彥

●小説　古葛籠……武藏野

●英語　速成英語……島田奚疑

●雜録　昔語屁理窟……君民同祖會主林甕臣

●雜報　重要事件

右の内女向の英語は他に例なく非常に評列よろし

淑女發行所　東京市四谷區南伊賀町十六番地　紫鸞社

●東京朝日（二月十六日）發刊の辭に曰く我邦男女教育の程度を比較すれば男子に重くして女子に輕し是豈昭代の缺事に非ずや我社今より全力を以て女子教育に任じ其成功を他日に期せんとすと其抱負知るべし云々●國民新聞（二月廿三日）三宅花圃上眞行中村秋香國分操子等の寄書より儒教を基として女子教育に力を盡さんとするもの云々●千代田新聞（二月十八日）今回題號の如き新雜誌を發行せり家庭史談音樂講話衛生歌文詩文考證小説雜報の諸欄に分ち淑女たらん者の模範に供せんとするが如し云々●大阪毎日新聞（二月廿一日）我國男女教育の程度男子に重くして女子に輕きを慨し昭代の一恨事として之が成功を期せんとの趣旨によりて發行せられたる者花圃女史の書初を首め詠歌看護の法等女子必讀の好雜誌なり殊に其孝悌を旌表するに勗めたるは尤も吾輩の意を得たり云々●同新聞（三月五日）社説浮華淫靡なる小説と新躰詩の弊害を痛論したるは大に善し家庭史傳音樂講話衛生等の諸欄あり歌文欄鳥山華族女學校教授の宇治拾遺物語に擬したる筆のすさびなどなか〳〵に面白し●近江新報（三月一日）第一巻第一號發刊の辭に云ふ教育偏に男子に重くして女子に輕きは豈昭代の缺事に非ずや我社今より全力を以て女子教育に任じ其成功を他日に期せんとすと其抱負思ふべし家庭史談音樂講話衛生詩歌小説の諸欄あり各大家の記事を載す云々●海南新聞（三月二日）淑女は女徳發育の機關雜誌として第一巻第一號を本年一月廿五日に初刊發行さる發行兼編輯人は曾て文學を以て都下に其名を知られたる本縣出身沼口鷗村氏にして巻首には賜硯堂成瀨大域翁の書したる窈窕淑女君子好逑てふ詩經關雎の字を題詞とし石版摺にて掲載し祝詞には諸名家の和漢文章和歌等あり本欄には家庭音樂以下の諸欄最高なる資料を載せ渾て女子教育に允當云々

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊前金（三ヶ月分）	十二冊前金（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
拾錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十二年七月廿一日印刷
明治三十二年七月廿二日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木良雄

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　（電話番號新橋八八）　國光社

杉谷正隆編

修身百首

全一冊
菊版美本
定價金二十錢
郵稅金四錢

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を發ひ給へかし

發行所
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
國光社

〔印刷所　東京國光社印刷部〕